川柳塔

創刊大正十三年　通巻八八七号

白川協加盟

No. 887

四月号

西尾 栞7回忌川柳大会

と　　き　2001年(平成13年)5月5日（土）
午前10時開場・午後1時開会

と こ ろ　八尾グランドホテル
八尾市八尾木北5丁目101　TEL（0729）94－3591
専用バス（JR八尾駅－毎時 0分・30分／近鉄八尾駅－毎時 10分・40分）所要時間 約15分

＜記　念　句　会＞

おはなし　「西尾栞先生を偲ぶ」
川柳塔社名誉主幹　橘 高 薫 風

兼　　題　「羅　漢」　川柳塔唐津支部　仁 部 四 郎 選
「　菜　」　川柳塔みちのく　波多野五楽庵 選
「一　歩」　時の川柳社　小松原 爽 介 選
「座　る」　ふあうすと川柳社　泉　比呂史 選
「　恋　」　番傘川柳本社　森 中 惠美子 選

事前投句　「あわてる」(3月31日締切)　川柳塔社　河 内 天 笑 選

◎各題2句（欠席投句拝辞）出句締切正午・終了予定午後4時

会　　費　2000円（当日いただきます）西尾家・川柳塔社から粗供養呈

＜懇　親　宴＞

と　　き　同　日　　午後4時半～午後6時半
と こ ろ　同 ホテル
会　　費　6000円　申込み制（会席料理）
宿　　泊　八尾グランドホテル　7500円（朝食付）

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは同封のハガキに明記の上3月31日までに本社事務所宛ご送付下さい。
◎懇親宴・宿泊費のご送金（句会費をのぞく）は同封の払込用紙でお願い致します。お持ちでない方は本社事務所（06－6629－6914）までお申し出下さい。
◎当大会は川柳塔本社5月句会を兼ねますので1人でも多くの方々のご参加をお待ちしています。
◎昼食は同ホテル内レストランを各自ご利用下さい。

川　柳　塔　社

句集『旅人』（その一）

河内　天笑

『旅人』は不思議な句集だ。写真と胸像でしか出会ったことのない路郎だが、ページをすすめているうちに時々にゅうっと私の前に現れて、どうだと言わんばかりに胸を張っている。

凡聖一如元旦のこころしる　　路郎

昭和二十八年十一月に上梓された『旅人』の表紙はむらさきがかったねずみ色で、当時とすれば多分めずらしかったであろうフーツラボールド小文字のローマ字金箔押しで、とびきりシンプル且つモダンに装丁されている。

見開きにつづく著者近影は六十五歳で短冊をしたためている横顔に、ひとつ成し遂げた満足感があふれ、穏やかな表情だ。また次頁のアート紙では「凡聖一如」の色紙が目にとびこむ。黒地白抜きの転写はぴりりと引き締まった元旦の感触を、より効果的に見せるに充分な心づかいだ。

「どうぞ胸を張っていてください」と、思わず応答したくなる作品の中でも巻末に纏められた「旅つれづれ」の次の四句には、路郎の作句技術が集約されている。

山中温泉にて

だし抜けに鐘の鳴るのも旅のこと

菖蒲池遊園地にて

夕桜とんぼがへりがしてみたし

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり

大和三本松村の山荘にて

名も知らぬ山の起伏をうれしがり

普通は見た通り思ったままをなかなか表現し難い旅の句を、これらの作品では全てリズムよく整えた上に、「だし抜け」では驚きを「夕桜」では童心に還った心の高まりを、そして「遠く来て」と「名も知らぬ」では自然への思いを情感こめて格調高く表現している。

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子

昭和三十三年に古稀を迎えた時の作品。不朽洞の諸先輩が路郎の直弟子だからその人達に習い、教わった私は孫弟子に当ることになる。丁度この年、学生から社会人になったばかりの私は未だ川柳と何のかかわりもなく孫弟子でも何でもないので、「この句事実と違いますな」と、ひとり言で屁理屈を呟いたら「理屈で川柳つくるんと違う」と元祖の声が聞こえてきた。

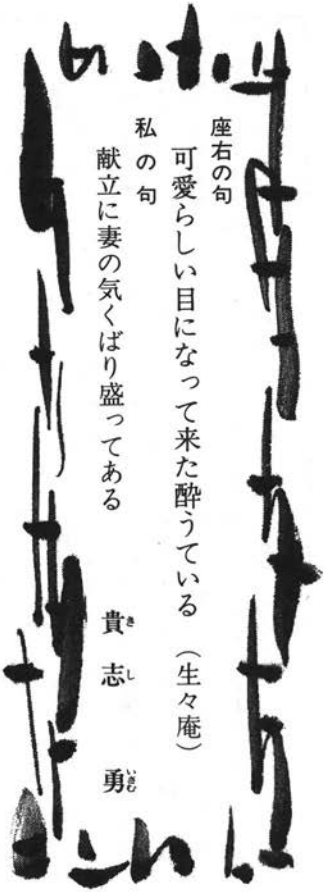
一ト握りああ人生は和に如かず

句集『旅人』に接するまでに路郎の有名な作品は、機会ある毎に聞いたり見たりはしていたが、中には作品の真意を摑めぬまま素通りしていたものもいくつかあり、この句の「一ト握り」もそうしたものの一つだ。

今年二月末大阪川柳人クラブのことで、天王寺で薫風名誉主幹とお会いした折、この句について「愚者も賢者も長者も貧者も死なば一握の灰」という私の感触を聞いて頂いたところ、「私は人との握手にあると見た」と言われ、また「下五の和に如かずにつづくものでないとなあ」と述べられた。

何日かたったあと私なりの結論が出た。「何億人居ようと自分が生きてるうちにかかわり合える人はほんの一ト握りだ」。これで下五の「和に如かず」につながったと解釈することにした。

次号につづく



座右の句
可愛らしい目になって来た酔うている　（生々庵）
私の句
献立に妻の気くばり盛ってある　貴志勇

川柳塔　四月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　句集『旅人』（その一）……河内天笑…（1）
変ったそば屋……東野大八…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
自選集……板尾岳人選…（58）
水煙抄……奥田みつ子…（86）
秀句鑑賞「同人吟……山本三郎…（91）
　　「水煙抄……（88）
■特集　ご当地桜自慢……江口度・川崎ひかり・櫻庭順風・中原比呂志・藤井明朗
　　私の教育改革論……岩津ようじ…（57）
■エッセー　雪の一日……園山多賀子…（99）

変ったそば屋

東野大八

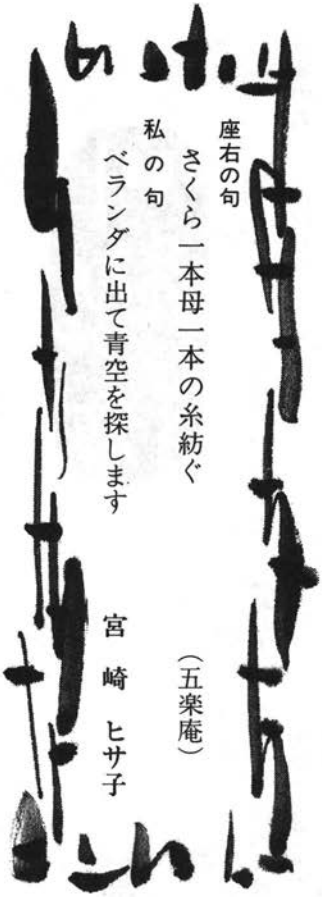
娘二人に老妻を連れ、うぬまのそば屋へ行く。何でもこのそば屋はテレビ放送をした変ったそば屋だそうだ。老妻の話に乗ってうぬまへ出た折寄ってみる気になった。

一見、文化住宅並の青い屋根で、芝生の庭もある。老舗のそば屋のようにノレンもそれらしい装いもない。入ってみると紳士風二人が、そばの出てくるのを待っているらしいのに出合う。それを横目にこちら四人連れは座敷へ案内された。その部屋の襖越しに、隣は女同士の先客らしく、盛んにおしゃべりしている。

案内の女将らしいのはその風体から長女が、「十二単みたい」と言いニヤリとした。煙草が吸いたくなり、件の女将に聞くと禁煙と言う。せんかたなく一人表へ出て吸うことにしたが、案内の十二単が「テレビでは、お店の電話番号も言わなかった」とデンと居座っての話。そばどころではなさそうな世間話のはじまりともとれる。

「あの人の話の間に、奥の炊事場を見たら誰一人も居ない。これではいつそばにありつけるか見当もつかない。」と言って、三人がゾ

川柳の群像　菊地炭吉……東野大八…(92)
誹風柳多留二四篇研究 28 ……(94)
愛染帖……波多野五楽庵選…(96)
茴香の花……西出楓楽選…(100)
「生まれる」……川本畔選…(102)
一路集「影」……長谷川淳選…(102)
「移る」……山下省子選…(103)
初歩教室「甘い」……吐田公一…(104)
三月本社句会……(106)
各地柳壇（佳句地十選／山本玉恵）……(110)
柳界展望……(126)
四月各地句会案内……(128)
■編集後記……楓楽・希久子…(130)



座右の句

さくら一本母一本の糸紡ぐ　（五楽庵）

私の句

ベランダに出て青空を探します　宮崎ヒサ子

ロゾロ出て来るのに出会う。はじめに会った紳士風は、まだ来ないそばにイライラして、なんとも言いようのない顔で白けぬいていてお互い言葉もない。

てっきりテレビで見て、こちら同様この変ったそば屋へ誘い合ってきた御仁と受け取ったが、それにしてもお気の毒。「この調子では、あの案内のおばさまの独り話で終りそうなので逃げてきた」と、娘の一人が話すので一同そこから車を走らせ別のそば屋へ行く。

出てきたのは、風呂屋の桶みたいなでかいそば桶で、きしめんみたいに平べったいそばも一面にある。それにひどい固さで、そば好きのこちらも閉口頓首したものの、コシがこんなに固いのもこの店の持ち前で、そば通にも見込まれてのことと辛抱してほおばる。

やっとのことでその店を出たら、閉口していた便秘の下の方が催してきたので、逆に大助かりだ。

娘たちはまだ変なそば屋の話でモチ切りだが、文化住宅のそば屋に〝二八そば〟の項目があったのを思い出し、江戸前十六文のそばが今ではこんな店構えの中へ落ちぶれた？のかと思わず感無量になった。

ともあれ、この変なそば屋は、今でも商売を続けているそうだが、そのうち店終いするだろうとみて、しんからおかしくなった。そばはやはり更科流のノレンにしかずと思った。

川柳塔

河内天笑選

西宮市　奥田　みつ子

煮麺のぬくさに命しみじみと
生きていてくれさえすれば寒の月
肩を揉む　失いかけた日が戻る
病気して夫婦　夫婦の味となる
寒風にも青空　生きてゆけそうだ
わが夢の銀河に続き果てもなし

箕面市　出口　セツ子

エプロンのブラックホールへ入れる鬱
和紙の雛　自分に飾る老いの部屋
小悪魔も鬼も楽しく飼ってます
涙拭く所作は隠しているピエロ
弱味など見せず風きるイヤリング
Eメールでは伝わらぬ手の温み

藤井寺市　高田　美代子

熱燗にほろりほろりと泣き上戸
どの辺で笑おう仲直りをしよう
いい人に囲まれ春になっていく
阿吽の息でどちらからともなく誘う
無期限という約束にある油断
頑張れる年はとっくに過ぎている

倉吉市　野口　節子

野良猫も泊めてやりたい猛吹雪
ランデブーするには丁度好い月夜
立春を待ってつくしも唄い出す
真心を壊さぬようにそっと受け
だんだんと嫌な鏡になって来る
ずかずかとハート乱しにやって来た

西宮市　牧渕　富喜子

物産展　路地のおばばの店が無い
解凍に至るプロセス秘しており
眼鏡たたむ指の先から消える町
黙々と南々東を食みにけり
頭の中に未踏の山があるらしい

ヒトゲノムはえの二倍という情報

出雲市　城多喜

老人のパワー未だ未だお見せする
今日座る場所があったらそれでいい
大器にはなれず小皿を叩いてる
ペアカップ一つ毀れたどうしよう
視線浴びた傷がなかなか癒らない
わたくしの胸にちょろりと小悪魔

笑面市　岩津ようじ

アメリカに勝つという本売れている
悪いことせぬ代議士が気味悪い
ステンレス風呂 豆腐になった気で入る
再診の南無心電図また乱れ
子を寝かせ夫婦で義理を欠く話
大きい息してアメリカへ抗議する

鳥取県　新家完司

おもしろい顔の魚だ僕に似て
猫 狸 蟹も轢き殺されている
現金は無いと金庫に貼っておく
川柳ほど面白くないテレビジョン
春風にぴかぴか光る霊柩車
息子から労られたりせぬように

堺市　宮本かりん

肩の力抜くと案外低い山
突っ込んだ首へトラブルからみつき
整頓をしてからよけいさがし物
口下手の手足はとてもよく動く
腹立ちが消える鏡を見せられて
出不精を誘い出させる春の風

羽曳野市　徳山みつこ

こけそうでこけない棒読みの男
ヘソクリといわず機密費これからは
選挙あるのでええことを言うてはる
大声で笑うと元気出るそうな
山道を二人で歩くのも至福
おしゃべりはするものでない朧月

堺市　志田千代

即入院ベッドが空いていたらしい
渋滞の前の車は危険物
目立ちすぎる人は仲間に入れぬこと
マスクすると万引なんぞしたくなる
靴下は左右バラバラ妻の乱
許可なしにチラシ広告入れられる

唐津市　仁部四郎

春の宵童話の目次できました
募集した童話総理を困らせる
こわいことグリム童話の奥の顔
伝統の童話 科学がむしばんだ
童謡の二番は妻に明け渡す
童謡にカタカナがふえ新世紀

唐津市　井上勝視

今のところ元気で医者に通ってる
お隣と点滴同士飲む話
ケチじゃない半身浴の仕舞風呂
お茶受けの文化まだまだ捨てられぬ
男性に生まれたかった妻と棲む
日の丸を貶す政党だから嫌

香川県　池内かおり

草餅のひとつで足りる母おわす
器ではないけどやるだけはやろう
誕生日娘がくれた食事券
下戸が居て心おきなく呑んでいる
踏み出した一歩を夫が押してくれ
げんまんをしたベルバラを観に行こう

竹原市　小島蘭幸

貯金通帳一年ぐらいすぐに来る
午前二時古い演歌を聞いている
バレンタインチョコ妻からひとつだけ届く
やさしさがいつも裏目に出る男
本を読むわたくしだけにある宇宙
桜咲く頃やさしくなった娘が帰る

岡山県　小林妻子

終着駅で見直したってもう遅い
引き合うた長い夫婦の息づかい
よく言えば香車のような人でした
皮肉にも難聴だったおかげです
残り火を煽れば春の芽のように
金融の電話へ不自由してまへん

岡山県　大石あすなろ

一陣の風が邪魔する立ち話
子育てに鳴らしすぎたかラッパ病む
ハッピーで終る話に酒支度
熟年の丸い言葉のかくし味
風の道摑んで進む子の巣立ち
足ふみが少し長くて出おくれる

相生市　中塚礎石

宿命へ走り続ける蟻の夢
豆腐一丁隣の店で義理を買う
足もとで一円玉があざ笑う
臆病な影がしきりに袖を引く
止まり木の話題の人と目がからむ
開き直る時の切り札しのばせる

倉吉市　松本よしえ

鬼の子がうちの娘に目をつける
いい夢が見たい今夜は赤ワイン
山の湯で老人会が若返る
湯上りが匂うはたちの白い指
芋車回る小川も春のうた
立春の匂いそろそろ蕗の薹

倉吉市　米田幸子

連帯保証だけは親でもお断り
ぼうふらが湧いても金は壺に溜め
死ぬときは畳の上と決めている
すれすれの線で法律掻い潜る
万策が尽きても母は高鼾
ばあちゃんが出掛けるときの身だしなみ

米子市　中井ゆき

大阪のおでんタコヤキまだ食べぬ
田芹つむ母の背中を夢に見た
細い足でツルは本気のラブダンス
悪あがきやめて白髪のままでゆく
横道に迷い綺麗な花を見た
小さい芽の周りの雪を指でかく

米子市　鷲見正子

義理チョコを嬉しがってるお父ちゃん
正直な人に総理は務まらぬ
一歳の眉が明日を主張する
光源氏よりも凜凜しいランドセル
月を見て想う星を見ても思う
ナフタリンの匂いを乗せた春のバス

米子市　青戸田鶴

大山は守護神いつも仰ぎ見る
毎日の事件にゆきばない怒り
ぼんやりと見えない先を考える
隣人にお世話になる日など思う
裸木たちがふくらんできた春近し
楽しみを見つける旅を続けよう

米子市　永井三津子

かあさんに負けない母になるいくさ
強い母演じて送る子の門出
人間の自己中ばかり国が病む
貧乏神どうやら私好きらしい
真心を持たぬ男の口上手
生きる意味わからぬまんま墓を買う

米子市　澤田千春

私が残す小さな花の森
ときめきも愉しからずや待ちぼうけ
スプーンに小盛の毒を持ち歩く
海に出る川の苦労は語らない
さわやかな風を残して行った人
好きな人と地球に住んで幸せだ

鳥取市　福田登美

夢買って夢が裏切る宝くじ
無い袖に振り回される春の義理
心の傷小さく畳み見栄を張る
不器用に生きても笑顔忘れない
ふる里の風に多弁なクラス会
健やかに紅引く今日に感謝する

鳥取市　岸本宏章

余震かと風の音にも身構える
えこひいき誰もいじめと気が付かず
おみくじも夫婦で違うものを引き
惜敗の残念会が盛り上がる
リハビリへ医者は甘えを許さない
失敗談いつか自慢になっている

鳥取市　岸本孝子

これからは笑い薬の世話になる
ひと昔前の予定にある若さ
しっかりと貯め使うのが惜しくなる
幾山河越えて初心に辿りつく
匂い立つほどの美人に気が疲れ
幸せは一夫一婦の世に生きて

鳥取市　武田帆雀

文筆に長けて敬遠されている
スタミナの塊一人歩きする
掃除機の音が襖を開けてくる
騙されてやった だました積りかい
六十になって旦那を比べ出す
代わる代わる命狙いにくる名刺

鳥取市　倉益一瑶

でで虫よ家が重くはないのかい
おいでやす ぐらり心を傾かせ
雑音に迷って初心見失う
一匹の蛇が胸から出てゆかぬ
念仏じゃ渡り切れない橋もある
涙ポロポロ猛獣だって子を守る

鳥取県　西原艶子

さあやるぞ今年も喜劇繰り返す
片隅の庭へ小さな春芽吹く
これからの旅へ呼吸を整える
団欒は息子とふたり春の膳
豆まきをウッカリ忘れ春になる
土の道踏めば昔の音がする

出雲市　板垣草丘

路郎師と一句のえにし句碑を待つ
税金が戻る小さい話です
腹わたを日本で見せている南瓜
腹這いで雑誌 仰向いて新聞
汁もどき おかゆもどきで検査中
手術する予定を聞いている薬

出雲市　青山久子

はんなりと友の白髪の深い艶
追憶の流れやさしい音がする
軽やかな足になりたく化粧する
厚化粧してもはかないぼたん雪
死とはなに生とはなにを繰り返す
許されて生きているのよ冬薔薇

出雲市　岸　桂子

言い訳をする度塀が高くなる
決断のにぶさを笑う花鋏
スタイルは抜群だけど出雲弁
雪が降る昨日と同じ身の上に
淋しさを入れると重くなる手紙
吉報へ小豆小躍りして煮える

出雲市　佐藤治代

ワァーすごい思わず言った冬の虹
悪いとこばっかり似てる次女七女
愛してる漫画のようなオトウチャン
鰹節削る箱には母が住む
お互いの酸素になっている夫婦
冬眠の穴むず痒くなり春はそこ

芦屋市　黒田能子

なんとなく頭を下げて丸く住む
少な目の言葉選んで慰める
痛み忘れて同じことくり返す
横道にそれた話が面白い
両方の味方言い分聞いている
生きるとは一病を経て強くなる

西宮市　秋元てる

「もう八十」「まだ八十」と自在なり
口癖の勿体ないが娘に伝染り
へらず口生かされている身と知らず
女ひとり　その場しのぎで生き延びる
朝顔の折り目正しい花が好き
日々好日　耳の遠さが幸いす

西宮市　西口いわゑ

振り向けば神と鬼とに支えられ
ほろほろと酔うて時計のない世界
豊かさが人を病にしてしまう
リベンジを空の青さに恥じている
梅林をそぞろ歩いて詩人たり
雑炊を食す平凡なる幸よ

尼崎市　春城武庫坊

夜明け前闇に光った夢がある
土の道　命が弾む音がする
鉛筆を削ると湧いてくる希望
退屈を知らぬ男の予定表
弟妹六人揃うと昔生きてくる
箸　茶碗　今日も無事です棚に坐す

尼崎市　春城年代

立春や油断召さるなちゃんちゃんこ
ふきのとう野菜売場にちんと在り
灰皿がいらなくなった良いはなし
ひょっとしてあの世はホントかも知れぬ
ひよどりと鳩が交互に樹をゆする
ゆるゆると老いを労わる起きあがり

雪見酒　雪の修羅には触れず酌む
風向きはどうあれ在野押し通す
古稀という一つの節目心電図
列島の南は開花　北は雪
待つ不安募らせ地吹雪が狂う
死語となる言葉を備忘録に積む

弘前市　高橋岳水

桃の枝に菜のはな添わせ弥生三日
日だまりに薄き影もつ冬の蝶
羊水のよな春の日だまりうとうとと
春眠の深さをベルに脅かされ
ははの歳越えても母を越えられず
世の移り地球の水を売買す

弘前市　今愁女

泣く前にそっと鏡を見てごらん
百薬の長と思えば安いもの
マイナスをプラスに変える自己暗示
津軽三味糸がときどき喧嘩する
鼻穴に霰の詰まる猛吹雪
なけなしの年金を吸う所得税

黒石市　相馬一花

もう知らんもう知らんとて放っとけず
クラス会むかし昔の礼を言う
年金の靴はついでに磨かれる

東京都　播本充子

響き合う人には惜しまない切手
優しさを競う男の力瘤
脳死論友はＩＣＵにいる

静岡県　薗田獏沓

体温が伝わるように話しかけ
大御所を跨いで行った猫と孫
放置した庭を好んで野鳥群れ
そら耳か雛の鼓が鳴ったよう
夫婦にも秘密があって触れ合わず
内戦は豊富な資源奪い合い（ウガンダ）

橿原市　居谷真理子

深読みはするまい太い字の手紙
ああ言おうこう甘えよう君を待つ
試されることに慣れてる小粒ですお嬢さんを下さいと首太い奴
笑うように男が泣いた冬の夜
楽になるまで溜息をつく独り

京都市　高島啓子

仏壇の正体裏はベニヤ板
着物よりジーンズ板についている
溝板が消えた頃から子も変り
出来悪い子ほど心配　新庄君
雲水の素足ようやく春の風
蛍光灯人はつめたい顔を持つ

還暦の日に両親が居てくれる
闇という無限へ男憧れる
春の音 炬燵の中で聞いている
世紀末過ぎるしばらくご安泰
諦めたものに出世と酒タバコ
予言というジョークひとつを信じてる

和歌山市 牛尾緑良

春うらら母も香水替えて出る
立春が過ぎても事件降りつづく
繁殖の為と知っても杉花粉
不器用でマウス一匹あやつれぬ
緑内障だけでなさそう狭い視野
曖昧が取り柄で不況乗り越える

和歌山市 福本英子

車窓より蝦夷松 椴松 雪の華（さっぽろ雪まつりにて）
登別 子宝温泉にも浸り
ななかまど雪ふる朝はなお燃える
雪像と初対面して白い息
嫁姑こころ温め北の旅
バレンタイン愛の手錠をかけにくる

和歌山市 福井桂香

野良猫も人間らしく暮らす町
靴のサイズだけはひとまず父を越え
連休とうかれる歳でない暮らし

和歌山市 古久保和子

凍てついた月と出合った街の底
合鍵に残った君の静電気
木登りのうまい友から里便り

和歌山市 細川稚代

一通話ぬくい言葉をくれて切れ
究極になれば手も出る金も出る
トローチをなめてスピーチかろやかに
米作り祖父のタクトは狂わない
青菜つむ祖母の背中に舞う粉雪
偶然に茶碗が破れただけのこと

和歌山市 松原寿子

春風が寂一点を抱きにくる
予期しない波へ想いが弾け翔ぶ
行間からある結論が浮き上がる
止り木で心の捻子を巻き直す
本流へ出て生き残る鞭に遇う
写真いちまい大切にして繋ぐ愛

和歌山市 青枝鉄治

野次だけはもう身に付けた金バッジ
選良の汚職平気で聞く怖さ
情報のルーツは街の美容院
商魂を垣間見てきたアルバイト
目礼の女へ妻のテレパシー
男性の化粧講座もある平和

和歌山市　吉村さち子

なんとなく嬉しい小雪舞っている
俎板の鯉に無情の医療ミス
両方に向ける笑顔で苦労する
重い荷へやさしい嫁の手が延びる
聞いてくれる唯それだけで気が和む
母の背を拭く母の背の小さく冬

和歌山市　川上大輪

遺影にっこり私を羽交い締めにする
さよならが言えず位牌をまた磨く
一周忌まだ疑問符が付き纏う
舐め合った傷がだんだん深くなる
やる事もないのに何故か忙しい
備忘録に書いた事さえ忘れてる

和歌山市　山根めぐみ

健康が欲しいバンクも私も
人嫌いわたし只今挫折中
ＩＴの話に黙るメカ音痴
かくし味ぐらいの恋はまだ出来る
大笑い心の風邪に効いてくる
くれないの歴史はしかと胸に抱く

大阪市　板東倫子

一喝で男を上げた土佐の知事
毒舌も不倫も売れる芸能人
二月十一日私の中では紀元節
水ぐらい掛けてやりたい長電話
大臣が立身出世と思えない
プライドを傷つけに来る御意見番

大阪市　神夏磯典子

テーマ曲しぜんに足が動き出す
老母の目反抗心をそっと消す
忘れることなら一等賞もらう
すぐに泣きすぐに踊れるのが特技
干し芋のうまさが孫に分らない
春の風嬉し涙を持って来る

大阪市　杉澤汀

塩鰯　巻ずしと組み晴れ舞台
草の種が命をかけてすがりつく
どのくらい悪か閻魔に訊いてみい
平成の維新はまだか志士よ立て
ついにきた裁くご身分裁かれる
番外の焼香しばし哭く女

大阪市　渡部さと美

大阪に雪が舞うたら春はそこ
お札よりカードが占める春財布
それとなく奥さん自慢して帰り
肥大する噂流して身が縮み
不景気も極みお隣売りに出る
あの原潜巨大ロボットだけやんか

大阪市　小林周信

三寒四温　春の光があふれだす
開発に鎮守の森が風邪をひく
仏壇を開けると聞ける父母の声
生きんかな　ぐっすり眠りよく食べる
新顔が混じると堅くなる話題
誘われた混浴男ばかりなり

大阪市　本間満津子

どないしてはる用事ないけど電話する
海外へ？日本国中知ってるのォ
要るときにいつでも買えるから買わぬ
ゆっくり歩けば街の音見えてくる
流れの早さ何百年も生きたよう
寝たいとき寝て夜昼マイペース

大阪市　西出楓楽

言葉尻ちょこっと上げて気を持たす
神様にレンタルしてるこの命
口車に乗っておくのも生きる知恵
歎異抄ひらくこころが乾いたら
明け方の夢の続きを見る昼寝
大道芸おもしろくなる春の街

箕面市　椎江清芳

貧乏を追風にした立志伝
盃を下に置かせぬ久し振り
嫁が来ぬ村に根雪がまだ残る
戦前になかった春の花粉症
雲追って山越えて来た山頭火
どの枝も夢を抱いて天を指す

吹田市　石原靖巳

福の神と肩を組みたい年男（当年七十二歳）
退き際の美学かぽとり寒つばき
句読点ない人生が悔やまれる
もう五勺飲んだら雲に乗れるのに
鍋囲む湯気に本音が洩れてくる
闇の金お前までもか外務省

吹田市　山本希久子

交差点会いたい人が向こうから
向かい風少しぐらいで傷つかぬ
身のほどを知ってるうちの洗濯機
内孫は男ばかりのカレー皿
雑念と雑用私につきまとう
つき合いは淡くコーヒーはアメリカン

枚方市　海老池洋

今浦島にされるＩＴ新時代
人生を賭けた仕事も社史の隅
診断書僕を軟禁するつもり
大鍋も悟りの姿　禅の寺
アンカーのどれも韋駄天めいた顔
留守電のわが家がいやに他人めき

枚方市　前　たもつ

今の世に養生訓は新しい
冬を越すハチに長ぐつ貸してやり
新鮮な足音のする伊能展
マスクした美人に声をかけられる
救助法　人形だからすぐ忘れ
葬儀屋に挨拶されて困ります

枚方市　寺川弘一

喜怒哀楽のどれにも恋の場所がある
無言劇　時々妻が主演する
ものぐさが晩酌だけは欠かさない
名優が台詞を超えた咳をする
おきあがりこぼしきっと必死に違いない
邪魔になるほくろ私である証拠

寝屋川市　北岡波留吉

嫁が来て寒気和らぐ過疎の村
落城を哀れみ楚楚と梅香る
日の丸を揚げてためらうことはない
ためらわず妻抱き締めた復員日
まだ八十路　老兵などと言うなかれ
改めて妻に礼言う金婚日

寝屋川市　籠島恵子

夕まぐれ父に似ていた冬帽子
留守番は夫がしてるホイサッサ
わたししか居ないでしょうとチョコレート
紙芝居の始まりですよ新世紀
ひとりっきりになる日をふたりして思う
南無阿弥陀仏死者をなだめているようだ

八尾市　井尻民

許そうと決めたお酒がよくはずむ
正直な鏡ときどき憎らしい
高くない鼻に今年も花粉症
余生まだ愛と憎しみからみつき
砕け散る波の花撮るバスの窓
ふる里の駅ではずしたサングラス

八尾市　長谷川春蘭

四代の元号に生きおらが春
二月堂僧の足音春はそこ
梨の名も二十一世紀とや言わん
初映画隣の席に君が居て
詰襟の少年凜々し入学す
確実に春の足音聞く峠

東大阪市　谷口義

説明書入っていない玉手箱
デパートで俎板を買うことはない
おばあさんみたいなおじいさんがいる
おじいさんみたいなおばあさんもいる
お食事券がついているから友さそう
俗名を名乗って今日も生きのびる

羽曳野市　三好専平

捨てるのに金と時間のかかる核
硬骨を通す義一の浪花節
公園ができても遊ぶ子がいない
朝市で魔除けの草鞋買うてくる
老人の知恵かりたいとおだてられ
苦しみのあとの笑顔に媚がない

羽曳野市　安芸田泰子

色褪せた夢が詰まった古日記
誉められた味へレトルトとは言えず
新調をする度余命考える
先頭を歩けば強い風当り
栄転へちくりちくりと社宅の目
他愛ない話で嵩む電話代

堺市　山本半銭

春の陽の優しさ見えて蕗の薹
年金も介護も足りて日向ぼこ
バースデーカードはバラで七十歳
人を待つケトルひゅるひゅる鳴るばかり
肩のこる話を友が持ってくる
落ち椿　褥にしてる黒い猫

堺市　神原文

ワイナリー一段はしゃぐ母でいる
ワインにも七色の味花の味
二十歳と七十八歳飲みあさり
チーズでワイン思わず英語踊り出し
おあずけをあちらの犬が聞き分ける
浮世波静かであれよまた会おう

堺市　桑原道夫

図書館で森林浴をしていたり
噴水の裏へ回って確かめる
日が射してペリカンがまず日を浴びる
夕焼けが大好き給湯室の薬罐
紙風船落ちてしばらく息をせり
冬の船撫でているのは冬の恋

富田林市　片岡智恵子

滅びゆくものにも光った跡がある
年金で生きがいごっこして平和
節分草　春を知らせにくる命
春を待つ心はすでにみどり色
書道展極めた筆に無い迷い
未来像　錯覚だった七光り

富田林市　大橋鐘造

下心見たく誘いに乗ってみる
真夜中の間違い電話に安堵する
なにもかも捨ててあなたの舟に乗る
一枚の切符に賭ける男運
招き猫　客の値踏みをして座り
綱渡りいつもしている僕の靴

唐津市　山門幸夫

立春やわっと萌え出す庭の雑草
立春や雀は尻尾をぴんと上げ
母さんのお弁当にも春が来た
番山鳩撒餌拾いが済んで恋
啓蟄や蛙の目玉美しい

唐津市　山門タミ

浮き草は離れないよう手をつなぎ
三御代を生きて口だけ達者です
電線に烏三千ヒッチコック
人間は嫌でも親子切れぬ縁
新世紀地球はどこも揉め放題

唐津市　久保正剣

母泣かす赤を五月の花屋から
膝を打つ妙案もなく新世紀
貧しくてキャビアをグルメと思わない
人生の答に迷う雑煮箸
機密費で買えるマンション　馬　めかけ

唐津市　樋口輝夫

アラ探し上手な姑にくたびれる
都落ちそこにも強い敵が待ち
欠伸する孫もて余す夏休み
助手席の妻のうるさい差し出口
参院選食欲色欲出世欲

唐津市　宗水笑

写真より子の描く母は母に似る
雪しんしん三度食べると日が終わる
今月も仏事　神事のある手帳
ＩＴの世でも葬儀は鯨幕
本命のチョコ念入りの花結び

唐津市　山口高明

人謗るそんなわたしが赦せない
自然との対話楽しむ島の磯
あの女に構って欲しい酔った振り
山羊さんの乳で育てた孫元気
割箸の仕入れをかくす弁当屋

唐津市　市丸晴翠

鬼となり母のリハビリ室に添う
結び目を確かめ合ってまだ夫婦
車椅子　口は達者な母を乗せ
冠雪に春の灯を抱く沈丁花
新学期駈込寺の保健室

熊本県　高野宵草

ストーブを付けたよ今朝をはじめるよ
新聞を読むから補聴器はずします
幸運も不運も一直線に来た
花冷えは筵の酒であたためる
富士山に乾杯　車窓の紙コップ

熊本県　岩切康子

積雪の感触しかと踏み回る
考えが一致楽しい旅プラン
兎も角も似合いの髪を依頼する
心得て断る訳は探らない
保存食幾つ作れば楽になる

熊本市　永田俊子

初雪を踏むにためらう五欲の身
湯豆腐はゆらりと逃げて妥協せず
余裕少し生まれて鬼を遊ばせる
老人の存在示す咳一つ
余生しみじみ感謝の糸を今日も巻く

北九州市　梅田宣司

高齢者住みにくくなる新世紀
お互いに垣根はずした酒の席
若いなと言われて老いを意識する
休肝日 体の悪い日と決める
老体が登る階段おぼつかぬ

香川県　山地マツヱ

絵馬掛けて二浪の春を祈願する
松の内過ぎると神も一休み
水仙を活けて一人の茶を入れる
立ち直る女に踏み絵が多すぎる
マヨネーズかけるとサラダになる大根

香川県　清川玲子

墨染の衣に出会う古都の坂
この瞬間二度とはこないシャッター切る
受験期の願いに神も疲れ気味
捨てられた小さな命持ち帰り
年毎に手抜きしている拭き掃除

香川県　川崎ひかり

明日と言う原野に夢の花咲かす
初恋の想いはるかな草千里
白き梅 天使笑ったように咲く
甘辛をじっくり煮こむ落し蓋
何十回見てもやっぱりハズレ券

香川県　神保坊太郎

言の葉の海で夢追いびととなる
バスが来て噂はんぶん積み残し
赤紙にわが青春を刈り取られ
晩学のあせりを辞書に覗かれる
いいかげんにしないと立つぞ筵旗

香川県　瀧井勝

産声は誰憚らぬ自己主張
儲からぬ仕事ばかりを子は好み
右顧左眄しない姿が潔い
視野広くなって迷いが多くなり
恋唄を僕は死ぬまで口ずさむ

香川県　成重放任

つるし柿北風飲んで頬を染め
運と夢かついで帰る福袋
孫達が帰った後のふがいなさ
寿の一字が諭吉連れて行き
ショッピング疲れて休む亭主族

高知県　赤川菊野

倒産のうわさ飛び交う冷えた町
人生はあっと言う間の夢芝居
自己暗示かけてお化粧念入りに
よそゆきの声で娘の里帰り
ほめられて天狗になる子はにかむ子

高知市　北川竹萌

晩酌につらつら思う吾が世紀
優等賞六枚貰い小卒す
家起こし村起し等たのしかり
村長推薦青年教師断れず
資格試験受験直後の召集令

高知県　小澤幸泉

家出しても娘は生きている生きている
祈りの果てに生きるリズムを取り戻す
聞き流すことにも慣れた夫婦坂
古里の山河に夢も詩もなし
切り札は子供三人まだ独り

愛媛県　中居善信

裏切った鬼を思うているひとり
捨てきれぬもの引きずって陽が落ちる
何をどう言えばいいのか泣いている
抱きしめていると安心できるから
そんな目をすると秘密がばれちまう

松山市　宮尾みのり

六十路すぎやっと身の程分りかけ
しがらみというストレスが嫁にある
発想の転換　歳を忘れさせ
そう言えばうちの日の丸見当らず
引きずっているらしまたも夢に出る

松山市　丹下美津子

外は雪　春が舞い込むさくら草
気のおけぬ友と楽しい膳囲む
結婚も離婚も派手な人気者
聞き上手へ裸になっていたわたし
巻き返し狙う野党の正念場

弘前市　櫻庭順風

手ぬぐいをきりりと締める妻の髪
チン　ときめきの貌で出るリーフパイ
リーフパイの香りに染まる妻の指
さくさくとパイの優しい味の私語
アンコールには答えられないリーフパイ

弘前市　宮崎ヒサ子

滑り止めに金具の付いた靴を買う
名のみでも立春といういい響き
五年振り喘息もろにやってくる
のどの奥けものが吠える音がする
芽吹く春待ってする事たんとある

弘前市　福士慕情

妻の愚痴軽く流して行くゴルフ
そば打ちの趣味が脱サラそそのかす
止まり木へ独り残ったツケの客
雑草に取り囲まれている案山子
年輪を重ねる森の御神木

弘前市　一戸ツネ

冬安居　地蔵のお膝冷えてくる
居酒屋の湯気はぬくぬくじゃっぱ汁
草も木も目覚めの支度雪の下
賑やかに笑いの種の阿弥陀くじ
その昔バブルに酔うた自己欺瞞

弘前市　相馬銀波

雪始末　冬の神様から貰い
雪道は私道の先も奉仕義務
仕事する前に汗する雪を掻く
雪かさが四メートルほどの奥津軽
熱燗の前は手酌になるビール

十和田市　阿部進

手間暇をかけて作った母の味
久し振り逢った貴方は誰だっけ
会釈して道譲り合う雪の路地
すくすくと父母の背見て子が育ち
オッハーに新年宴会盛りあがる

黒石市　千葉風樹

人の世や震災救助の虫眼鏡
迷路からああ立ち籠めてくる死臭
いもうとが旅立つ時の赤まんま
子がサードベースに立っている打席
真っ白の雪を信じちゃいけないよ

青森県　西谷大吾

密室で吹雪かれている少年たち
地吹雪の涯にはきっと曼陀羅華
温もりを雪にいただく福寿草
雪消えて雑草芽吹く休耕田
生きのびてカルテがずんと重くなる

砂川市　大橋政良

雨の日の案山子に傘をさしてやる
白羽の矢こんな手錠をかけられる
柿を剝くお前も種のないひとつ
雪が降る大根おろしほろ辛い
磨いても石を一歩も出られない

横浜市　山下省子

浜言葉すんなり使いあんれまあ
レシートの裏の一句が逃げちゃった
飼猫にお留守なのよと言いつける
オブラートでくるむ川柳なんて嫌
朝刊のルームサービス待っている

横浜市　菱田満秋

泰平に馴れて生命を軽んずる
友人の写真を老けたなと見てる
太陽の味も滲みてる鯵干物
温泉疲れをわが家の風呂に癒される
眼の前が展け叫んでみたくなる

横浜市　菊地政勝

初孫に隔世遺伝暴かれる
満月を砕いて入る露天風呂
火の玉と見紛うほどの陽が沈む
富士山を眠れる獅子として崇め
ロボットの仕草にいつか飽きが来る

横浜市　清水潮華

ワクチンを打って普通の風邪を引く
賞味期限のばす栄養剤を飲む
チョコレート女に還る十四日
能力の差を人柄が埋めている
掛けることないがケイタイ持っている

横浜市　小野句多留

牛丼の朝に冴えない男達
マシュマロの如き乳房をいとおしむ
梯子酒三次会まで覚えてる
泣き所心得　女乱舞する
優しそうだから聞いてる目的地

東京都　後藤早智

こけし手に雪国の悲話だぶらせる
折れかけた花が必死に蕾持ち
病気などしてる暇ないアリの家
手話でまず第一声の我愛你
雑念を払い今年も花の下

川崎市　和泉あかり

高層の街を斜めに斬る冬陽
今朝はなに食べたか脳にきいてみる
おしゃべりがしたくて耳を借りに行く
シャッターを待ちくたびれている微笑
仏さまになっても愚痴を聞かされる

富士宮市　渥美弧秀

潮時を後悔してるお人好し
すぐ尖る度量の狭い過去でした
尖んがった顔で鏡とニラメッコ
散歩道しゃれたコーヒー館が待つ
途中下車　無人駅での菊花展

富山市　舟渡杏花

母の忌に合わすが如く冬薔薇
剝製の視線わたしに突き刺さる
踏ん切りがついた日のゴミ袋
食欲がなくなる恋がしてみたい
棚ボタを今でも待っている余生

富山市　島　ひかる

寒い朝元気を貰う紅をさす
早見表親の年齢消えてゆく
携帯が衣の袖で三度鳴る
惚けたねと言われて腹を立てる惚け
雪の立山見せてあげたい人が居る

富山市　酒井　輝

パソコンで社会を覗く登校拒否
ペースメーカーと余生を生き競べ
看護婦にビールをねだるほど癒える
行幸は裸の列に迎えられ
ドラマでは嫌いな物もうまく食べ

富山県　増田紗弓

諭しながらおどけてみせるだるまの絵
だまされたふりの背中がくくくくく
マイカーにごくろうさんと帰宅する
酔うたまま暫くいたいふたりなら
豆粒になるまで送る曲り角

愛知県　早川盛夫

ごめんねと声かけて折る梅の枝
今月のノルマ円形脱毛症
厚底の危っかしい終電車
若い日の自分を想う向う傷
税務署へ身の上相談したくなり

可児市　板山まみ子

小説の舞台の町に思いはせ
中世が昨日のようなパルテノン
バイロンに出来心あり遺跡の字
あこがれてたった八日で帰る旅
長旅にまずは体と青魚

滋賀県　中宗明

パートナーと息合いダンス鮮かに
八十路きて頑固ますますきつくなる
古希迎え脳波検査も無事にすむ
ふところに単身赴任娘の写真
定退の挨拶状が目にしみる

奈良市　米田恭昌

祝杯の辛い断酒のお父さん
子沢山光らぬ玉が多すぎる
ハイテクの動く小犬が売れている
戦争の語り部父も老い給う
おなかに子そろそろ挙式急がねば

奈良市　天正千梢

嵯峨野路やひざの痛みを忘れさせ
二十世紀宿題残し暮れてゆき
ビルの上稲荷まつるや朱の鳥居
失ったものをさがしに遍路道
さびしさに耐えて八十路の坂のぼる

奈良県　渡辺富子

受験生の機嫌伺うカフェオーレ
割り切れぬ気持ちの余り胃にたまる
バリアフリーふと思われる水たまり
甍の波うるわし大和主張する
マネキンが夏のポーズで媚を売る

大和郡山市　坊農柳弘

止まり木に遊び馴れてる箸枕
自我一つ未だお釈迦の掌の内に
はにかみのえくぼ可愛いランドセル
四万十川春きらきらと鮎の稚魚
べんちゃらを素直に受ける四月馬鹿

大和高田市　岸本豊平次

五十二キロを支えきれずに痛む膝
くるくると来るから増える寿司の皿
木枯しに葉芽抱きしめた庭の木々
花好きが狭めた路地に苦情出ず
雲百態　二上山の夕茜

香芝市　大内朝子

ヘルニアの痛さ一気に地獄ゆき
さくら草ひらき始めた回復期
お試しのエステへ夢を見る蛙
こども用ドリンク剤が売れている
メディアとは無縁のんびり生きている

京都市　小西未佐子

見下ろせばホワイトチョコの屋根瓦
お遊びの判る人にはハートチョコ
枯れ果てて閻魔惑わす術もなし
カルメンよあんた聖子に負けている
招かざる客　風邪の神さま連れて来る

京都市　山海友熙

いつ来てもサクラ咲いてる嵐山
散り急ぐ桜を憎む古都の風
煩悩を洗って爪をといでいる
警察犬蹴られた傷の深い謎
耳鳴りが止んだら赦せるかも知れぬ

京都市　都倉求芽

誤解したおかげで助かったことも
大気より汚れているな議員の掌
スイッチが入らぬ五体今朝の冷え
傘ひとつ重い日軽い日忘れる日
家事すべて停止しました長電話

京都府　稲葉冬葉

花時計 春には知恵の輪が解ける
寒い日も一番風呂に入るなり
寒中托鉢 最敬礼をしてしまう
痛いとこ突いてくる子の頼もしさ
極めてからの椅子深くかけている

和歌山県　中後清史

分け隔てなく育てても揃わない
妻の掌の中で踊っている頓馬
こちらから折れると妻も折れてくる
留守電に入れるセリフが畏まる
鉛筆を削ると山の香に触れる

和歌山市　田中みね

節分の豆恐ろしや六十個
大空へ夢大書する新世紀
手を叩き僕の失敗笑う妻
笑ってくれる客が宝の漫才師
高熱に耐えた孫抱く電話口

和歌山市　西山幸

蕾ふくらみ鳥が囀る塀の外
体験のため福は内鬼も内
身の裡に棲みついている虫たちよ
色見本にはない海のいろ山のいろ
穢土浄土たしかな今へ歯を磨く

和歌山市　山口三千子

町内の役三月の解除待つ
巣立った子の部屋に並べるランの鉢
三猿になって渦から身を守る
近すぎて名医と知らぬ幼友
巣立ちする翼宇宙を視野に入れ

和歌山市　榎原公子

判断の甘さが命取りになる
父さんにとってゴルフが先なんだ
なまけもので咄嗟の対応に欠ける
甘やかしすぎたか伸び放題の木
無為などという過去なんかありはせぬ

和歌山市　木本朱夏

釦かけ違ったままにさむい春
海鳴りを遠く近くに羽根枕
子の部屋に破れた翼落ちている
転生の旅道草をくいながら
しっかりと鍵かけておく現在地

和歌山市　玉置当代

長女は那覇 次女札幌と言うご縁
わたくしの業か娘は遠く嫁き
親子の縁薄いと易に言われたが
また元のふたり静かに鍋つつく
終着へ夫婦の歩調合わせとく

昨日に乾杯まぼろしから離陸
あの頃は活気のあった老舗の灯
街に灯が点って生きてくる水面
サラサラの川で疵口洗っている
ふる里の山の丸さにかなわない

和歌山市　楠見章子

曾孫まご娘にわたし女子四代
金縛りに逢いそうおっかない貴方
眼科耳鼻科梯子で保証してもらう
般若心経千巻悲願立てている
ストーブで真っ黒焦げの餅齧る

和歌山市　桜井千秀

言い負けて止むなく尻尾巻く夫
愚問にも笑って答くれる医者
手の焼ける子ほど可愛い親心
公害の墓場　地球は病んで居る
共通の欲が絡んで手を結ぶ

海南市　谷口義男

入院しているのに元気かと主治医
末筆で祈ってくれるご健勝
大きな声で泣いているから大丈夫
新聞はチラシの中に入ってる
厚底がなんだ竹馬なら負けぬ

海南市　三宅保州

体調がいいと忘れる祈りごと
新世紀明るい風を待つさくら
喜寿傘寿メリハリつけて卒寿まで
顔よりは心美人と言う傘寿
ひたすらに生きる散歩に舞う小雪

尼崎市　的場十四郎

夫の忌の早さ自立をせかされる
豆撒きを孫と楽しむ鬼の面
早春の風が運んだ梅便り
ゆっくりと米寿の母へ梅香る
ちょっとした言葉うれしく春になる

尼崎市　内田美也子

厄年を越えてやりたいことが増え
人生のハンドルいつもゆるやかに
日向ぼっこ暗い話が多すぎる
ストーブの部屋でぬくぬく暇つぶし
日めくりをはがして今日を感謝する

尼崎市　奥山美智子

漂流をつづける僕の正義感
背伸びして生きてもただの四　五センチ
気に食わぬ事の多さよ今日も雨
児の問いが目の節穴を突いてくる
人生の後半戦はロスタイム

尼崎市　田辺鹿太

西宮市　刈田泰司

七十の初心マンネリ打ち破る
盃と喜怒哀楽を分かち合う
乾杯へ平服なれど襟正す
乾杯の音頭携帯邪魔をする
広告塔がデフレの街で枯れている

西宮市　門谷たず子

うたかたの旅ダイヤ婚まであと二年
ひび割れた盃　痛みまだ残る
牽制球受けて歩幅をせまくする
花屋の前でゆとりを貰う春の色
ゆく雲やネガに残った古い恋

西宮市　緒方美津子

難民の笑えば淋しい顔の子等
よく見れば雑草ばかり出てござる
サングラス　マスク皮ジャン　リハビリ中
トイレには一番好きなカレンダー
大方の好む電車の隅の席

西宮市　山本義子

無欲にはまだまだなれぬ朝の駅
善人を演じていますこれからも
雪どけ川早春の香も少し連れ
春ですよ自分自身にネジをまく
脇みちは雪と花との一行詩

西宮市　菊池トミヱ

古里に気丈に生きる母ひとり
ジャンプ台思い切り跳ぶ若人よ
黄金色に夕日の沈む窓に佇つ
一病を宥めすかして日向ぼこ
移りゆく人の世眺め生きのびる

西宮市　亀岡哲子

お手玉のたかが三つを取り落し
寒いぞと身に言い聞かせ扉押す
鮒ずしもからすみも好き下戸である
温暖化へすこし安堵か寒い冬
仏壇の奥から転げ出た内緒

神戸市　山口美穂

弱点を知られて話がしようなる
二階へとんとん何だったかなあ笑うだけ
お互いの身勝手妥協点さぐり
それぞれの個性で老いを演じよう
水仙の香りにアルファ波をもらう

神戸市　小林一夫

薄氷の童子の足に砕けたり
春雷やわれは錠剤数えつつ
どの顔も少しゆがみて金太郎飴
壺焼きの匂いもありて厄除寺
アトリエに赤い花あり春の風

神戸市　池田善守

ツバメの巣我が家に二つマイホーム
今日も元気だから明日を信じてる
電報の生き甲斐 結婚式とお葬式
春風を胸一杯に掃除する
幸せの真ん中に居て不服言い

伊丹市　樫谷郁子

恐れられまた愛される雪景色
北国の雪 雪に胸痛む
冬枯れを温く包んで雪景色
湖北には妥協をしない雪積り
坪庭を雪で粧い雪見酒

伊丹市　山崎君子

初釜は紅いふくさで若返る
嵯峨野面 可愛い鬼よ京みやげ
セツブンソウ春を知らせる里の森
ケッケキョと庭のつばきに幼ごえ
しずかな笑顔いのちみつめる車椅子

三田市　北野哲男

和菓子屋の味より凝ったネーミング
縄のれん湯豆腐アルミの鍋で来る
廃校に伸ばしきったる大ポプラ
目をそらす先にもあった募金箱
弔電が明りのついた家に来る

三田市　久保田千代

蟠り抱えながらのおつきあい
こだわりを捨てて私も輪の中へ
人生の主人公です誰だって
天の声聞こえてきそう冬の空
しんしんと過去消す雪が降り続く

川西市　米原雪子

気が付けば優しい言葉求めてる
真似られた方言違うニュアンスに
毒舌に同じ思いと頬ゆるむ
ＩＴで世の中急に騒がしい
散々に迷って頼る占師

川西市　松本ただし

冷めた目で見た人生の万華鏡
法螺吹いたとこで崩れる砂の山
ふる里もオートドアーの村役場
サラ金のＣＭが出る時間帯
大正と昭和ごっちゃになる記憶

宝塚市　嵯峨根保子

ブリ大根つづき不平のない寒さ
ＣＴで撮った頭は春キャベツ
ＩＴ革命維新の親の気にもなる
ほいほいと花の約束する二月
町の本屋で監視カメラと仲がよい

姫路市　古川奮水

ピエロにもなれず炬燵で蛇になる
下駄履けば珍しそうに子等が見る
絵はがきに歓喜が満ちる旅日記
ハミングの合唱春の風になる
ハチ公も酸欠しそう人の息

兵庫県　大谷幸次郎

やんわりと捻子巻き合っている夫婦
薬飲む日課ときには忘れたい
リハビリの日課寒さがさばらせる
雪中の水仙遠く匂いくる
水門を開けろと有明海苔が言う

岡山県　矢内寿恵子

永らえて今の幸せ初春の陽に
見て見ない振りを学んだ歳月よ
プライドを守り通して尊厳死
朱の帯に女の夢も十重二十重
残り香に消えた未練がまだ疼く

岡山県　山本玉恵

だまされてだまして笑い合う二人
フィクションの風のとりこになる私
そこまでを言うてしまえば生きられぬ
どん底で蛇と鬼にきく生きる道
一歩下がる訓えに生きて来たきびす

岡山県　福原悦子

冗談で方針かたる人が好き
先読みが下手で反旗の風にあい
うきうきも悲しみも知る共白髪
今日の無事信じて送る朝の靴
幼子の箸左ぎっちょの自己主張

岡山県　富坂志重

太陽にしたら変って来た嫁さん
曽孫を相手に笑い今日も暮れ
ちらばった孫のおもちゃに蹴つまずき
日向ぼこしようと影が言うけれど
孫のお八ツお先にどうぞ仏様

倉敷市　小野克枝

大病が教えてくれた粥の味
微笑みに飽いて人形眠くなる
点ほどの誤差で信頼揺れ始め
端役には端役の自負があり走る
悪妻と言われてからは焦がす飯

竹原市　森井菁居

ばらされて悪い事なら止めときな
持ち歩くかずらバッグは別に買う
税務署はやはり嫌いな申告期
フィアンセと春色グッズ見て歩く
一病息災 減塩食に慣れました

竹原市　時広一路

年輪の幅　年毎に狭くなる
老い二人携帯なんて要りません
軍配がゆらゆら揺れる飲み比べ
余生だというのに予定欄が要る
白黒をつけたら友が一人減る

竹原市　石原淑子

大木の鼓動を聴いた小宇宙
煩悩を燃やすベッドへ春の花
雪化粧　恋に恋する寒椿
うっすらと夜明けの月の愛おしき
菜の花の倖せ彩に咲き揃う

竹原市　三宅不朽

梟の胸で眠れば安からむ
昭和四年生まれと記すなつかしさ
馬券裂く美人薄命とは昔
よく笑いよく泣き嘘もうまくなり
特訓の目玉焼きから先ず始め

竹原市　岩本笑子

手に淡き雪なり古里誰も居ず
こんな私にすり寄って来るネコよ
迂回路線にタンポポ二つ三つ咲く
千客万来　少々くたびれてはいるが
雪椿　私を待ってたかのように

竹原市　古谷節夫

ロボットの進化へ危惧を抱くワタシ
足して割る妥協案には頷けぬ
輪の中で囁きながら生きる知恵
弔電が元の肩書き付けて来る
夕焼けの彼方に朝日待っている

広島市　森田文

折れ枝もやっぱり花を咲かせたい
誇りもつ棟梁がいて弟子がいる
医師のだすどのくすりにも副作用
民芸館　知恵の作ったものばかり
よみがえる名水監視員がいる

広島県　藤解静風

骨壺と写真を置いて行ったきり（末弟逝く）
ひとり娘がちちの柩を離れない
エコノミークラス症候群に遭う
仕合わせな日はコーヒーがうまいなり
待たされて愛がふくらむのが分る

美祢市　安平次弘道

人間の鎖にいつかしばられる
搦手から攻めると少し向きになり
弱点をさらすと妻が威張りだす
ざんげするたびに迷いが深くなる
拾う神あってこの世は面白い

宇部市　平田実男

悲しみは竹馬の友の訃の知らせ（親友急逝）
美容院の鏡お世辞を聞き飽きる
雑草も人も踏まれて強くなる
沈黙が金でなかった遺産分け
年金が出る日を待っている財布

島根県　堀江正朗

未練など無いと言いつつ生きる欲
あせるほどまごついてくるタイミング
心急くままに額を打つ廊下
戦友は記憶の中に生きている
太陽に誘われて出る白い杖

島根県　堀江芳子

うたた寝を起こせば夜か昼かいな
失明を忘れて卒寿　福は内
春を呼ぶ風いとおしや肌に沁む
怒鳴る夫いて幸せと思うとき
気分まだ花の高校同窓会

島根県　伊藤寿美

不器用な男と歩きルビー婚
断りの手紙何度も書き直す
携帯が届かぬ距離に居るらしい
枯木に花が咲くかも知れぬ未来の絵
症候群ばかり飽食の街が病む

島根県　森茂美

散歩するポチも恋人居るらしい
脇役に撤した彼が素晴らしい
銀行の軒を塒のホームレス
聴診器僕のいのちを確かめる
着ぶくれて葱引く妻に春はまだ

松江市　安食友子

鬼面凝視して雑念を吐きまくる
引き返す勇気をくれた好感度
巣立たれた空っぽの部屋をまさぐる
セレナーデ憤怒の心和ませる
このチャンス天の意思だと身構える

松江市　佐野木みえ

陽だまりに心許した猫柳
佗助が古刹の庭にひっそりと
つらら達何をそんなに自己主張
左脳が鈍って今日はミスばかり
水仙の香りで朝の目覚めよし

松江市　川本畔

純粋になれそうもなく着ぶくれる
とめどなく海は語るよ身の上ばなし
干拓地　祝餅までひび割れる
気がかりを背負って今日を歩き出す
鼻風邪をひいて策略まとまらぬ

松江市　銭山昌枝

気力だけあって体力ついてこぬ
健康にいい事みんなやって見る
自転車でスピード出すと血が騒ぐ
手料理へ味にうるさい孫が居る
最後まで酒舐めて逝く肝臓ガン

出雲市　小白金房子

五色豆祝う雛段春の詩
生かされて友の恩義が身にしみる
ありがたい言葉両手に受けとめる
朗報へ活気が戻る娘の進路
大根を刻む農婦の太い指

出雲市　小玉満江

初渡航　嫁に嬉しい日が続く
ニアミスへ二の足を踏むパスポート
相談を口実にして逢いに行く
淋しいと心の弾むテレビ見る
幼子を連れて布教の女達

出雲市　富田蘭水

福は内隣は見ない事にする
血のめぐり電気かけてはリフレッシュ
ほどほどの欲でまともに生きている
目隠しの馬車馬だったと今気づき
リサイクル何でも宝に見えてくる

出雲市　石倉芙佐子

はいつくばって生きるぎりぎりの線
真剣にぐうちょきぱあを朝毎に
大事なことは細やかに密やかに
菜の花にうもれ幸せな蝶々
浜山に秘密な場所を持っている

出雲市　竹治ちかし

天には天　地には地なりにある掟
自画像にジキル　ハイドの顔がある
御不満はあるかも知れぬ順不同
男女同権　男の老いが早くなる
独り居の静けさを知る咳一つ

出雲市　吉岡きみえ

化粧直し花嫁さんの涙拭く
やさしかった椿も散ってゆくさだめ
雨も風も春に向かっているんだネ
運不運わたしが乗った泥の舟
玉手箱あける未来がきっと来る

出雲市　園山多賀子

大正女　忍従と言う処方箋
躾糸また掛け直す新世紀
対岸の火の手は河を渡らない
目線は低く身の程を弁える
卒寿今人間続け日々新た

出雲市　久谷　まこと

招き猫恵方に向けて初日の出
有難さ忘れ時々不足言う
妥協点食い違うまま手が打たれ
口出すと叩かれている老いの知恵
独り居にたまの電話はダイレクト

鳥取市　春木　圭一郎

未来図に今も理想の国がある
着実に理想を目指すペン先だ
網棚にいつか理想を置き忘れ
理想には遠いが馬の合う夫婦
かしこくて色気たっぷり理想なり

鳥取市　西村　黙光

ふる里を離れ早くも五十年
墓地移し家紋大事に跡を継ぐ
仏壇をつくり先祖の霊招く
五百年耐えた家系の重み知る
井戸塀の異名煌く祖父偲ぶ

鳥取市　坂田　和歌子

発熱は一番星をみた日から
断るの奥さんの声きこえます
にゅう麺を食べてご機嫌なおらはる
泣き笑い夫育ててあら白髪
生と死を繋ぐマスクを見ています

鳥取市　徳田　ひろこ

あちこちで囁きだした桃あんず
ジーンズの膝の穴から春が来た
川のぼる蛇も鰻も速かった
活きのいいワカメ　カツオのいる茶の間
胡麻を炒るパチパチ憂さが飛ぶように

鳥取市　冨山　檳榔樹

今年こそ今年こそはと埒あかず
赤い靴ラストダンスで光らせた
丹精の芽生えが育つ母の園
妥協する頃合いを待つ母の耳
ほろ酔いの頬に桃花が二三枚

鳥取市　夏目　健一

それぞれに持ったルールが噛み合わぬ
付録だと思えばさほど気にならぬ
良い人は無能と言われだしてくる
味方だと思いたくない人もいる
したたかな風が波紋を置いて去る

鳥取市　近藤　佳子

ももこ十九こころ毎日ゆれ動く
水清いことも侘しい過疎の村
貧乏神　風邪と一緒に出ておゆき
訛り出てふるさとかたる嬉しい日
嘘少しまぜた話がうけている

鳥取市　上田宣子

えも言えぬ影を小さく振りかえる
もう嫌いとても頑固なジャムの蓋
仔犬コロコロ喉のつかえも転び出る
ご機嫌うるわしく窓は春だなあ
ピッコロを吹いてる春の雲の上

鳥取市　植田一京

日々多忙働く元気ありがたい
頷いて聴いてくれてるきき上手
水は低きへお金はそうじゃ無いらしい
父さんの料理半端じゃない出来だ
あなたとのリズムがずれたまま春に

鳥取市　岩原喬水

エンジンは古いが父の舟を継ぐ
ど忘れをするのに穴場覚えてる
ほらごらんやはり女狐金目当て
十円で神様無理を頼まれる
飲み残す薬が棚に溢れだす

鳥取市　杉本孝男

反応を見てから二の矢番えよう
あの人のためなら損もいとわない
もうすぐと思うと消えた肩のこり
名セリフ荷物にゃならぬメモをとる
漢方の振り出し薬じわり効く

鳥取市　美田旋風

ひと仕事終って仮面つけ換える
坂越えるたびにポックリ寺に寄る
はなむけに逮捕味わう新成人
ゴミ増やすチラシどっさり朝の使者
世直しの狼煙　無党派層が待つ

鳥取県　田村きみ子

怖いのはこの世でひとつ花粉症
騙されてみようか落葉舞うように
女らしい輝き乳房あたりから
鈍行に乗って魚屋さんに会う
年の差をいつも話題にするめしべ

鳥取県　原みさを

街へ出て見よう帽子の色かえて
一喝がその気にさせた予定表
昭和という時代の匂い老いに入る
ひと声もあげず過疎地のトンド焼く
天気図の故郷にいつも雪ダルマ

鳥取県　西川和子

浮かんでもメモするまでにもう忘れ
雨風も詠めば楽しい詩になる
折紙に指が不思議に動き出し
挑戦の山へ足元揺れている
故里の絆も遠い物語

立春の陽射しに雪の縛も解け
大正も明治も欠けた三世代
老いの影ぼかす背筋をピンと伸す
外出を控えただけの風邪予防
また地震本気でリュック詰めてみる

鳥取県　羽津川　公乃

湯豆腐へ妻をさそって途中下車
窓明り一寸覗いて見たくなる
美しく老いたし傘寿寺めぐり
傘寿でも二十歳の心秘めている
よく笑う所に視線よって来る

鳥取県　太田　幸枝

大芝居打って満足してしまう
ホラ吹いた数だけ寿司をたいらげる
勢いにまかせ散りゆくバラの恋
女流棋士きらきら指で追い詰める
五十年妻といくつも橋渡る

鳥取県　橋本　多哥由

日の丸の旗翻翻と青いそら
喋ってる暇などないよ食べ放題
にこりともせずに酒注ぐバーの女
デパートの売り娘に惹かれ帽子買う
日野川の夕日を拝む妻の墓

鳥取県　山本　正光

寒椿　吹雪過ごしてさんざめく
自己虫かお手手つながず輪にならず
ミス　汚職　今朝も新手が踊り出る
リビングといわれ炬燵の居場所なく
頼まれる幸せ老いの刻惜しむ

鳥取県　埒　寛子

世のルール無視し成人式の乱
文句等言わず地球は自転する
ライバルは父の背中と決めている
歯車が時々狂う愛もある
出番来た大きな声で呼名する

鳥取県　近藤　春恵

くつろぎの一刻紅茶胃になじむ
生きるとは守りつづける仏の灯
旅で出合った情けズキンと身にしみる
茶の間より居酒屋恋うて出ていった
一瞬の命を演技する花火

鳥取県　黒田　くに子

口紅に女の活気満ちあふれ
登り坂枯れ木を折ってつえにする
出雲弁笑う自分は米子弁
妙薬と言って飲ませたまむし酒
味噌作り出来る幸せありがとう

鳥取県　権代　康女

鳥取県　石谷　美恵子

特別会計どうやら妻はもっている
睦まじく仲人役の冷えた仲
巻き返し願い暖簾に陽を当てる
縛っても泣いても諭吉居つかない
因習のルールを洗う新世紀

鳥取県　岩崎　みさ江

ことさらに喫わない人へいく煙
あみだくじ我が人生に似ておかし
立春の陽に木の家の息づかい
神の手で閉じる最後の一頁
旅人の見ている雪は美しい

鳥取県　土橋　はるお

酒を出す動きするから動かれぬ
サレコウベになっても動きたいものだ
明るい顔になる造作をしてもらう
膝小僧抱えていても酒は飲む
無駄遣いされる税金　嫌いやだ

鳥取県　土橋　睦子

渦巻いた心に春を呼び寄せる
連凧の最後で舵は風まかせ
リハビリに離れて歩くそれも愛
菜の花も淋しがり屋ね群れたがり
携帯電話そこに居るのに呼んでいる

鳥取県　上田　俊路

愛憎を水に流してフルムーン
玉手箱開けて余命を聞いてみる
果せない夢にしびれたまま老いる
これからは男も学ぶ育児法
ぬくぬくと鳴る携帯は親がかり

鳥取県　林　露杖

立春は雨熱燗二本誕生日
快眠に通じ朝飯てんこ盛り
免許更新三年日記八十五
ほろ苦い追憶仄か蕗のとう
交通禍　刑も生命も軽すぎる

鳥取県　谷口　次男

雪だるま立春と聞き急に溶け
花マルをもらった子ども目で分かる
日本に生まれたことを良しとする
リレー消え応援寂し運動会
親切に見える人ほど怖くなり

鳥取県　㈱乾　隆風

トンネルの中から描く春の海
休耕田に火をつけて眉毛焼く
老いぼれが主張したって芽が出ない
女房が耳打ちをして顔が立つ
呼び捨てを続けて五十年になる

鳥取県　奥谷彩子

いい気持こっくり船も終い風呂
春めいてフルムーンの靴はしゃぎ出す
地球の隅に生きた証の杭を打つ
かしこ過ぎず敵も無いから世話役に
娘と街にはんなり春の彩を着る

鳥取県　石尾かつ乃

お日様に申し訳ない乾燥機
急ぐまいひらめく時はきっとある
お赤飯食べず嫌いが一人居る
孫の絵を眺めて未来あれこれと
品切れになって値打ちを評価され

鳥取県　吉田孔美子

新世紀に残すわたしという証
元旦に配膳まっている浴衣
姉の喪も明けてわたしは胃検診
姉は今花野辺りに水鏡
丸まって膝抱えてた発症前

米子市　木村春枝

静寂に阿吽の獅子は雪かぶり
月並みの挨拶かわす間柄
道草が好きで遅れてばかりいる
悪あがき穴がだんだん深くなる
家の中スパイが一人住んでいる

米子市　神庭詩郎

孫来る日朝から妻が良く動く
小企業だが働ける職があり
教訓として聞かせてる失敗談
後幾年どの細胞が先に死ぬ
躾糸取れずそのまま成人し

米子市　木村富美子

二〇〇〇年越えて六日の命とは
植物のように生かすもむごかろう
残されて妻の大きさ知る男
梨の山思いがけない喪に服す
登っても降りても一人縄梯子

米子市　門脇晶子

梅咲いて春の絆をうたがわず
約束をした小指には夢がある
暦をめくり今日も一歩と旅に出る
地震から僕の身体にすきま風
自画像を何回書いて終るのか

米子市　白根ふみ

どの部屋も水仙が立ち冬に克つ
水仙のトイレから凜として出る
太陽がすこうし長居してくれる
枝切りをせねば春芽がふくらんで
まだ暦あつくて油断してしまう

米子市　政岡日枝子

風呂上がり爪も素直になっている
長風呂を誰ものぞきにきてくれぬ
スニーカーちびてリハビリ効果出る
軸足が迷うと脇があまくなる
矢印も疲れ果てたかぶらさがり

米子市　林瑞枝

むかし駄菓子とタイムスリップしてみよう
兵馬俑　神秘のパワー醸し出す
アレキサンダーグラッセ仏壇から貰う
迷児の火星人と擦れ合う都会
倖せは私の回り飲む珈琲

米子市　光井玲子

ほこらかに旬を唄って露地の花
つぎつぎと話が湧いて水入らず
目の高さ子らに脱帽するばかり
古いノートにしばし時間を盗まれる
砂吐いて貝は自縛から逃がれる

倉吉市　淡路ゆり子

ふるさとを語って友と癒し合う
不景気でこの頃笑顔忘れそう
墓地を買う意見が夫と一致する
一本が大切になる髪の毛だ
土の味忘れてしまう足の裏

倉吉市　猪川由美子

カッカして水はおのれの頭に掛かる
満ち足りて愛に飢えてる世の中だ
ど忘れをした振りをして様子見る
結婚写真昔のママをほらごらん
マイナス二度　水も頭も凍みました

倉吉市　山中康子

花鉢が枯れないうちに身を退こう
とじ込めた笑い袋の出番まつ
一病に風邪までお供してござる
鼻声のつづく限りはかごの鳥
負け犬に明るさ戻る日を信じ

倉吉市　牧野芳光

本心を見せない遠慮ばかりする
弱点を見せてすこうし近くなる
白い柩に喜劇を閉じる釘を打つ
一時停止楽しむように工事する
一通の手紙元気を連れて来た

倉吉市　最上和枝

針の無い時計を持って散歩する
散歩道雪の反乱バリケード
山坂を越えて歩いた向う臑
麗わしく孔雀の羽根は自己主張
美しく老いたし広く窓開ける

大阪市　小糸昭子

魔のカーブ曲り切れない事故の数
何時か来た道にも迷う年の暮れ
天と地の交わりを見る展望台
湯巡りで溶けて癒して旅帰る
あの人は引くタイミング知っている

大阪市　安達はじめ

一枚の辞令で変わる人生譜
春雨に煙棚引く彼岸墓地
待ちぼうけやっと気付いた四月馬鹿
大阪に住んでうれしい通り抜け
風船は汚れた街を見てしまう

大阪市　津村志華子

打たせ滝しぶきに流す業と欲
本筋になると邪魔するキャッチホン
独り居の自由の陰にある孤独
ご気分は如何と見舞う赤い花
願かける母は素足で百度石

大阪市　玉置英子

ストレスの少しはあって無事な日々
暖冬の予想外れたまま立春
頂けば隣へ回す甘いもの
ナンキンは味で軍配トンガ産
人間の弱さ厄除祈祷札

大阪市　中田あい子

満ちて引く天の摂理を守る波
衿正すどんなことかと聞く十七
まあまあで喧嘩おさまるうちが花
深刻な不況に福祉の二字かすむ
風呂の日に無料の子等の来ぬ銭湯

大阪市　鈴木トヨ子

この幸が母へ届けと鈴鳴らす
喜寿越えて極楽も見え欲も消え
やさしい声間違い電話でも嬉し
ラストまで心が揺れる預金帳
汗の玉年金となり報われる

大阪市　町田達子

探梅の足大阪城へ着きました
テント村がこんなに増えた大不況
寒風に威張るようにも天守閣
膚を刺す風は詩嚢をふくらませ
お年頃の食い気たこ焼よく売れる

大阪市　井上白峰

退屈の虫に誘われ旅支度
積年の垢を落しに夫婦旅
譲られて譲って和む夫婦箸
忘却の春甦るフルムーン
長生きにカネの無いのが玉に瑕

大阪市　川久保　睦子

身のほどを悟るゴールがまだ見えぬ
雑草は泣きっ面など似合わない
チョコパフェ野暮な話はよしましょう
サクラ見にたった一人に逢いたくて
極楽だ乳房ゆらゆら露天風呂

大阪市　川端　一歩

充電でもりもりしてる朝が好き
感動がどんどんペンを走らせる
新世紀わが家の百年ふり返る
失敗がなんだあしたのバネになる
手紙なら母さん抱いて寝るだろう

大阪市　奥村　五月

同窓会寄付のトップが逮捕され
しぶ柿も愛を込めれば甘くなる
別れ話をしんみり聞いているうどん
ぼろぼろの心を癒やす独り酒
ゲンコツを忘れ子供を駄目にする

大阪市　清水　利武

関取が浪花の春へ揃い踏み
祖父ちゃんが孫へ好みのランドセル
馬買うてどないする気や外務省
蝶々も浮気している花畑
血と汗で納めた税を飲み食いに

大阪市　鶴田　遠野

伴走の妻がリードする老後
母親を虐待してる夜泣きの子
お出かけに心の化粧忘れない
初恋は消さず種火に抱いたまま
攻めてくる孫の笑顔に覚悟決め

大阪市　松尾　柳右子

どんな夢見るか腕白寝しずまる
社の空気張りつめさせる新社員
ふくらんだ財布いつまで続くやら
一斉に静かになったカニの宴
夜ざくらの宴へ月も笑ってる

大阪市　川原　章久

笹鳴きは恋の埋み火の燃える声
日の丸を揚げると目立つウチの家
お守りを自販機が売る味気なさ
五百羅漢どの顔見てもお人好し
武器だった巨体が仇になる土俵

大阪市　寺井　東雲

七福神小さい舟をはみでてる
ふところがぬくもって来たお年玉
テーマソング聞けば番組すぐわかる
成人式孫と記念に撮りました
全没も皆出席でほめられる

続くはずない新しい日記買う
新しい風になじめぬいぶし銀
新曲に挑戦しても様ならず
地球儀の点の場所より来る便り
売れに売れる何でも彼でも告白書

大阪市　田中節子

鈴振って神さまだけに本音言う
病院の赤丸多いカレンダー
修羅越えた夫婦と見えぬフルムーン
赴任したとこへも回るフルムーン
読むままに眠りを誘う本もよし

大阪市　辻川慶子

そこかしこ祝袋が飛んで出る
合格にブランド品を強請られる
善玉悪玉よい塩梅にコントロール
戦中を忘れず無駄にせぬ暮し
通り抜け川柳なびく日は近い

東大阪市　安永春

魚雷くい船共に沈み我変る
南方より命持ち帰り我変る
世界中都市地震には弱すぎる
タレントの早口言葉よく分かる
文明とは砲弾で壊し再建す

池田市　岡本吉太郎

今世紀持つのか地球温暖化
節分の鬼と仲良く酒を酌む
悩みなど無い振り気障にベレー帽
いつかしら番号背負う気味悪さ
神様はとうに知ってたハプニング

高槻市　江原秀夫

梅咲いた桜咲いたと母招く
どん底で生きて覚えた忍の文字
誤字で書く合格絵馬に神惑う
大きな願いにお社小さすぎ
指切りがはじめて触れた君の肌

高槻市　傍島克治

大鍋の煮物懐かし大家族
人いきれする盛り場がわが故郷
老人の頑固と孤独解かす愛
寄り添うてたこやきを食べまた明日
親切と思い込んでる喋り過ぎ

吹田市　瀬戸まさよ

顎マスク天井睨み飲む薬
パスポート現代的に生きる祖母
ガイド特訓　歴史街道暗誦中
東京に負けたらあかん歌が売れ
誘われた酒の琥珀に罠が浮く

茨木市　藤井正雄

茨木市　島元ふみ

おかげさま心底思う誕生日
子三人産んで育てただけの歴
存外の長寿子供も老い仕度
辞書の字がノートに移るまでに消え
一病を引きずり長生きするつもり

豊中市　安藤寿美子

臘梅の香を包みこむ雲低く
耐えがたい日はあの森へ泣きにゆく
てのひらにバーチャルラヴとはいい言葉
明日も生きようハンドクリームすりこんで
まだ消えてやるかい今日は胃を検査

豊中市　松岡久留美

風船にたくした恋文届くかなあ
冗談のような言葉で針を刺す
こだわりの取れた夫婦の笑い声
嫁のうさ風船わって我慢する
何も無い暮らし気楽でよく眠る

豊中市　田中正坊

早春のツアーをさがす日本地図
蘭の花咲いたと友にたより書く
赤い芽をつけて春待つハナミズキ
メニューには海草と雑魚欠かさない
日記帳その日その日をたいせつに

豊中市　吉田あずき

蛇口から湯が出て寒の水忘る
身の内の鬼にも豆をはずんでる
ホームレス鳥さえ塒あるものを
この枷をはずせば狂うかも知れぬ
階段を下りるとただの人である

豊中市　湯浅馬洗

北海道雪も氷もまつり好き
へっぴり腰で氷瀑まつり老い二人
滑ったら共に転ぼう手をつなぎ
知床へ流氷の道間違わず
氷点下十五度氷上花火咲く

豊中市　井上直次

しゃっくりが固い空気を和ました
もっと強く大地を踏めと万歩計
自分史のぼかしたところ突っ込まれ
立ち食いと豪華な立食い昨日今日
仕事が趣味と逃げたお返しやってきた

豊中市　岸田知香子

お客からパワーをもらう店の顔
店の顔喜寿返上し若返る
荒れた娘が母の誕生花託す
新年度目標かかげ気も新た
孫共に娘の誕生を吉兆で

枚方市　宮川珠笑

六十路過ぎ幼なじみはチャンで逢い
両替機 札の表裏は揃えない
通夜の揉め遺影の笑みにまで絡み
改装の駄菓子屋アイスクリンのまま
我意が通って今日も好日

枚方市　森本節子

幸せは日の出日の入り見える部屋
霜どけの土堤の草むら春探す
おおよその病気のもとはストレスとか
熱いお茶いれて老舗の割れおかき
石切さん細い参道なつかしき

枚方市　鈴木政子

家計簿に書けぬ機密費私にも
ここまでに来たか親子の無関心
干拓が災い有明のり不作
衿立てて雑炊啜った闇市よ
少年の乱 寺小屋でも開こうか

守口市　井上桂作

恵まれた余生と思い過す日々
儲けすぎバブルはじけて十年目
労りをいつまで欲しい現代っ子
三宅島ドラの音聞くはいつの日か
知らぬ間に世襲議員も狸顔

四条畷市　吉岡修

税務署で貧乏ゆすり止まらない
出る杭を叩かれたって自分流
箱詰めの銘酒しばらく飾り棚
ひとテーマ貫いている牛丼屋
この次の秘仏公開にはいない

交野市　森本弘風

朗々と山にこだまの寒げいこ
日溜りは湯気が出ている朝の路
来年は七十粒の豆食べる
福娘 豆より笑顔蒔きなはれ
甘いからチョコはやらぬと妻は言う

寝屋川市　岸野あやめ

生まれくるものに幸あれ天地の気
大腿骨折って遺言状作る
一張羅着ても中身はもとのまま
風邪薬八種も飲んで癒らない
満点に遠い夫婦でよう食べる

寝屋川市　坂上高栄

優勝の栄誉を汚すドーピング
天職と自負する今日の幸福よ
結ばれた絆墓石の下までも
テープ切る走者抱えるバスタオル
成人式十七歳を無事脱皮

寝屋川市　江口　度

同じもの食べているのに妻は肥え
灰皿を満足さして嫌われる
幸せなドアは何度もノックされ
いえ家の明かりが消えていく安堵
今日もまた何の不思議もなく生きる

寝屋川市　森　茜

父がいた母がいた日の麦こがし
はったい粉 干柿 干し芋口に合う
新聞紙へ包んでくれたかんとだき
水仙は我関せずと香るなり
特売日となりもビーフ焼く匂い

寝屋川市　高田博泉

子を産んで少し大人へ脱皮する
湯舟から父の機嫌の良いおなら
贅沢の度合いがわかるゴミの山
目覚しが要らぬ夫婦で朝静か
ジョギングの顔に正気が走ってる

寝屋川市　堀江光子

お互いに減った酒量を口にせず
励ましの盃を両手でしかと受け
優勝杯だけは自分で磨く祖父
降り積る静かな雪が眠らせず
雪下ろす背に舞う雪を受けながら

寝屋川市　冨山ルイ子

うっかりが続いてしまう目がまわる
金曜日深夜テレビを見るゆとり
年金を貯めささやかな小旅行
時は金なりのんびりと日向ぼこ
選挙戦 議員を料理するチャンス

寝屋川市　平松かすみ

涙くんさよならしようもう忌明け
思惑が外れわたしもガン家系
新世紀 二人三脚出来る幸
孝行な旅の計画たんとあり
連絡網一度も来ない祝い事

八尾市　高杉千歩

カレンダーどこにもマルがついてない
川柳も絵も捨てかねて春四月
昭和ひとけた違いますとも言いそびれ
新しい街 好奇心と負けん気が
回る寿司二時間待ちも苦にしない

八尾市　高橋夕花

梅一りん師の訃報を聞き洩らす（形水さんを悼む）
アルバムにポトポト落ちる涙かな
一切れのチョコと消え去りバレンタイン
琴線にふれなくなったハイネの詩
鬼は外 内なる鬼が出てゆかぬ

八尾市　宮崎　シマ子

眼の手術急にばあさん臭くなる
眼は回復次は虫歯が騒ぎだす
眼帯の眼が追う過去の走馬灯
いたわられそんな歳かと思い知る
一つの旅に一つの夢を拾てくる

八尾市　宮西　弥生

シンデレラの靴で渡って来た茨
一病を抱いて九十のもつ絵筆
転送便ぞくぞく心音リズミカル
手も足も動きたおしの春日和
一つずつ痛みが消える花便り

八尾市　神原　まさと

空の旅怖がる妻を笑えない
妻の風邪てんやわんやになる家族
無人駅ベンチのベレー詩人かも
同じ本読んでも思い食い違う
便秘とは言えずに風邪で出す届

八尾市　吉村　一風

悔しいが立つも座るもどっこいしょ
妻ありて友あり酒も温かい
お隣に百歳が居て頑張れる
新世紀笑い袋もさらにする
冬の戸を開いたまんま猫はゆく

八尾市　生嶋　ますみ

いたずらな目をして着替えのぞく孫
口げんか棚あげにしておでん炊く
胸の中恋しい人が住んでおり
うらないに少し頼ってみる弱気
寒さにもめげずに梅が笑いかけ

八尾市　内海　幸生

裸木に童唄など聞かそうか
ひとり旅 左の影に語りかけ
住所録また攻めにきた朱線
山頭火ほどにも呑めず割りきれず
被害者が身内となればはなし別

八尾市　村上　剛治

万馬券内ポケットにある温み
孫が来る妻のまな板歌ってる
ガス消してきたと思うが引き返す
大人の話 孫は何でも聞いている
いやなこと上手に忘れ達者です

八尾市　村上　ミツ子

おなかにも風邪のウイルス侵入し
出したつもりのはがきバッグの中にあり
うらの裏よんで却ってややこしい
考えず右に同じと逃げておく
反省が苦手で猿に笑われる

堺市　柿花紀美女

とりあえず寝ることにする寒の月
故郷のホームは知らぬ顔ばかり
人気女優いつもうしろが気にかかり
平凡に一日暮れて老い二人
丁寧に節目節目を越えて生き

堺市　近藤豊子

ふゆ空へ柿の木ばんざいしています
あさぞらに虹の短冊きえのこり
しゃぼん玉くるくるまわる虹のいろ
犬の眼とこころのかよう二歳です
たんぽぽの絮かぜにのり風になり

和泉市　岡井やすお

機密費へ納税者の目光り出す
何するの大学院が膨らんで
チャレンジャーよろし高校生社長
Jリーグの赤字とうとうくじを出し
元不良今の不良を救えるか

羽曳野市　酒井一壺

血液の新しい型生まれそう
棺桶の新型だけは出来るまい
パソコンの新型買ってそのまんま
義理を欠き我慢もせずに生きている
あっさりとくれた答につい油断

羽曳野市　吉川寿美

ルノワールに浸り一刻旅をする
帳尻を合わせて幕を引きたいな
逃げ足の早い鏡の中の艶
火も水もくぐり掌にしたものは何
またとないチャンスへ遮断機が下りる

羽曳野市　西村りつえ

人命救助　母に悲しい正義感
追い風にターンも出来ず罠に落ち
タイミング一歩ずれてる下戸の酌
春一番眠れる獅子も目覚め出し
豆のつる風に煽られ天を突き

羽曳野市　福田満州

うぐいすの初音も弾む新世紀
談合入札タクトを振っていた役所
雨上がりペアの雀も嬉しそう
善人過ぎて融通の利かぬ人
早よ早よとうるさい癖が治らない

羽曳野市　川口信子

古臭い義理が友情熱くする
信じ合う心の窓に鍵は無い
あくびからあくびをもらう春うらら
寂しさを力づけてる愛がある
不器用に一病を抱く冬ごもり

藤井寺市　楠　昭子

まだ何かやることありそう運命線
今年また昨年の愚を繰り返し
虫のいい絵馬にちらちら梅も咲き
長らえて あうんの呼吸になる夫婦
悩みから抜けた気配が顔に見え

藤井寺市　中島志洋

道草の味を覚えたランドセル
四月馬鹿笑ってすます嘘がよい
よういやさ都踊りで京の春
春爛漫お地蔵さんも目を細め
アルバムに貼れぬ写真が別にある

藤井寺市　鴨谷瑠美子

頑固にも見えるがすぐに動けない
ある時は傷を隠しているマスク
わが胸の喜怒哀楽が失せて来た
梅桜咲いたら汽車に乗りたがる
ありったけ色を揃えた花時計

岸和田市　原　さよ子

心まで豊かにさせる墨の彩
ぼんやりはお互いさまと老夫婦
歳なりの身だしなみする朝鏡
厳格な夫 孫には甘すぎる
冬ごもり春の日ざしを待ちわびる

岸和田市　宮野みつ江

寒いですねえ飴湯でも入れましょか
風邪予防呼びかけ天気予報官
届けたいはるかな人に冬のバラ
アルバムにあなたと宿の箸袋
憧れの自由に付いて来た孤独

岸和田市　井伊東吉

孫の歌 孫は素知らぬ顔してる
生け花の梅を咲かせた暖房機
管制官ケアレスミスで済まされぬ
謝罪より優先させる自己弁護
機密費の借りがあるから見ない振り

岸和田市　藪野ケイ子

六人で宝くじ買い少し当て
風邪引いて誕生祝い日延べする
百円の傘は使わず雨がやみ
景品に百円ショップの時計あり
朝シャンの髪型変えて靴選ぶ

岸和田市　岩佐ダン吉

太陽は同じそれでも遅い花
風邪ひくな末尾に母の五字がある
お詫びまで原稿読んではる総理
冬の風受けて背筋がぴんとなる
不安消す手の温もりを信じよう

岸和田市　高須賀　金太

静脈がコロコロ嫌がってる注射
バレンタインデー僕にチョコ来るハプニング
マイペース守り呑むのは大変だ
回り道して大輪の花となり
褒められてから狂い出す開花時期

岸和田市　原　苑子

推定の長寿　貯えうろたえる
推定線ひいて目標もってみる
打ち込んで楽しかったと成功者
末吉のおみくじ持った医者通い
旅帰り話たいから菓子配る

高石市　浅野房子

充たされているのに心うつろなり
未消化のままの言葉が胃にもたれ
公園に馴染みの猫がもういない
間の悪さ勘がにぶいと言うべきか
深刻にならずサラリと生きようよ

松原市　小池しげお

へそくりが溜ると口が軽くなる
怒られて腕立て伏せを五回ほど
宿帳に大阪と書きほっとかれ
納棺に出好きな人が入れられて
十二時に時計が合うて腹が立ち

富田林市　中井アキ

海荒れて木っ端みじんになる甘え
わたしよりデカイ五歳の知恵袋
結び目を少しゆるめて許し合う
歴史に詳しくある日多弁になる
しなやかさ残し女の列にいる

富田林市　藤田泰子

森からの使者が毎朝庭に来る
心眼を開くと裏が見えてくる
消去法　一途な心だけ残る
渡り鳥　家族の愛を学ばねば
電話無い部屋で安心して眠る

河内長野市　加島由一

いま桜どのあたりかな膝枕
春近し娘が恋人を連れてくる
ポケットの中で名刺を折ってやる
妻からの誘いいつでも受けて立つ
冷や汗を隠す煙草が震えだす

河内長野市　井上喜酔

まだ生きる約束してる手術台
おだやかな波でシコリは残さない
その意気でやって欲しいと肩叩く
軍靴もう遠くになった新世紀
たこ焼きが好きな浪速の酔っぱらい

出雲市　岡　あきら

古希祈願二回神前ご仏前
グイ呑みのほこ先下戸に向いている
道草が多く晩学捗らず
拾い手を欲しがっている福の豆

島根県　榊原秀子

聞かぬ方がいいわ口止めされるから
単身赴任とかれ大きな輪にもどる
朗報へ遠くの母がするエール
雪解けの音はひそかな春の音

鳥取県　国森武子

窓の外大雪　家はありがたい
若い日の母の写真に見入ってる
母の膝枯れてうすくて九十五
豆腐飯姑の得意な飯でした

鳥取県　乾喜与志

煮れば好し生はなお好し葱豆腐
豆腐屋に嫁いでからの夫婦鶏
雛流しひとしおに麗しい夫婦
新世紀あした百歳爺になる

鳥取県　さえき　やえ

地震のこと忘れさせます梅の花
メダカがふえる日まで伏せとくこの小川
方言丸出し友のさし出す手が温い
生きているあかしに春の音譜書く

鳥取県　津村八重子

敬老と言う字に甘えてはならぬ
大輪のボタンいとしや雨しとど
つくしん坊しっかり並ぶ春うらら
国訛り旅で出合ったあの温み

鳥取市　前田一枝

お早ようのナースの声に朝が来る
夫婦箸今日の幸せ食って居る
酒呑んで無口も吐いて虎になる
改めて指折り数えさし向かい

鳥取市　山本益子

二枚舌すごいパワーに騙される
縄のれん明日のエンジン貯めに行く
バレンタイン一個のチョコに心根を
いい種のじゃがいもの芽に期待する

米子市　中村金祥

永田町油断するなと示し合う
Eメール一本指でのめり込む
破滅へのエンジンブレーキが効かぬ
ほらごらん機密予算がザックザク

米子市　野坂なみ

寺までの距離が私の遊歩道
亡夫の隣はもっと遊んでからのこと
追い風の隙に道草してやろう
幸せよ近くにポスト菩提寺も

倉吉市　山本玲子

どか雪に今日のスタート道つくり
空間がやけに寒々冬木立
身を護るために選んだ軽い嘘
地図よりもオリンピックで知った国

岡山市　井上柳五郎

じわじわと不安がつのる物忘れ
老化かなロウ梅の香が匂わない
あっさりと残り少ない歯を抜かれ
犬　欠伸つられて貰う大あくび

岡山市　川端柳子

お呼びしていま神様と二人居る
生きていくふんばり足がもつれ出す
風のほほえみ父さん母さんみているよ
かけがえのなかったいのち鮨つまむ

倉敷市　井上富子

掛軸の文字が遊んでいて楽し
三ヶ月振りの娑婆です病み上がり
何方を向いてもきつい坂ばかり
俺もお前もベンツもやがてぽんこつに

岡山県　荻野鮫虎狼

真っ先に尾を振り熟年生きている
山野草妥協はしない崖が好き
厚底の靴が慌てる朝の雪
露地裏の草刈る鎌が錆びている

弘前市　小寺花峯

腹時計だけが揃った三次会
絵馬堂に桜が散った絵馬もある
疑問符が覗いて春の隙間風
月暦季節は芽吹く春の乱

弘前市　須郷井蛙

飲み過ぎの一人へまずい酒になり
国債の赤字は孫へタッチする
満員御礼さびしくなった大相撲
清潔な病院ホッとして帰り

弘前市　蒔苗果林

法人化して農業も空出張
握れそでにぎれぬ若い素直な掌
酒一年断って課長の芽を枯らし
五十年の法要それから亡母いずこ

弘前市　岡本花匠

真冬日の雪を軋ませ男の譜
地吹雪に脚掬われて顛末書
一抹の不安に注ぐ寒の水
ルビ付きの便り久々母許へ

大宮市　八田敏

節分に景気真冬へ逆戻り
豆提げて鬼退治だと孫が来る
家事介護これが余生と悟る日も
老いの家置き去りにして季が移る

大阪市　清水絹子

風呂加減独り暮しも板につき
天守閣おおよう来たな青テント
春はまだ三日つづきの粕汁よ
生きている鬼も涙のオペのあと

大阪市　津守柳伸

神頼み縁起かつぎの豆の数
山間の陽射しへ勇気ある下山
淡路からエール水仙宅配便
ニアミス余談　格安ツアー命がけ

吹田市　野下之男

仲の良さ見ておくなはれ道祖神
猛犬も仔犬の勇気持て余し
炬燵では気を許してる猫の顔
鶯はまだ物足りん喉自慢

吹田市　穴吹尚士

一言のはずの挨拶まだ続く
年上の部下に敬語で指図する
冷や酒が心の傷に沁み渡る
たっぷりと呑んで掏られた終電車

吹田市　古川喜美子

お茶を飲む夫婦想いを異にして
四畳半に神仏私同居する
象は鼻振って構想練っている
あれくらいの鎖で象はおとなしい

吹田市　大谷篤子

広告はしないが客の足絶えぬ
盃で飲む酒よりもワイン好き
終章のどんでんがえし笑いこけ
飾るものなにもないので優しくす

茨木市　堀良江

久し振りお互い老いに触れず居る
あわてまい良いものがある残り福
ぐい飲みへ足を伸ばした萩の里
横文字の社名に変えてツキが来る

高槻市　井上照子

発芽せぬ種に優しく声かける
誘いは甘い萌芽をみせつける
身だしなみ一応鏡にたずねよう
自立する孫正直で安堵する

池田市　栗田久子

らんまんの春は心が軽うなる
のびすぎた土筆が風にそよぎ出す
還暦を迎える友の手の暦
主の無い感謝状です氷雨降る

池田市　藤井計光

ベロベロに酔うても家に辿りつく
ドブ川もネオンともれば恋が浮く
若者は車内注意にふてくされ
マンネリの吉本笑いが消えかける

枚方市　栗林光夫

太陽が二つあったら夜がない
何もかも円で組まれた大宇宙
鶴折ってどちらを首にしましょうか
折込みは家　墓　車　家電品

枚方市　二宮山久

初孫を聞いてる今朝の空の青
初孫の話し聞かせたい祖母は無し
店長になれたか息子午前様
大惨事　首相趣味など出来ぬはず

大東市　児玉蛙

あいまいな返事ブランコ揺れ通し
辛酸をなめた命が甘え出す
お早ようが静寂やぶり弾み出す
ごますりの裏で本音がうずき出す

東大阪市　指宿千枝子

この先は素直に生きる余生とし
まっすぐな帰宅へ妻の無断留守
奥様はマスク眼鏡で犬を連れ
無愛想に話すマスクのいい娘

東大阪市　北村賢子

ふりむけば結び損ねた赤い糸
底ぬけに明るい妻の泣きボクロ
スタートは純真無垢のおさげ髪
セカンドが静かに抱いている野心

寝屋川市　太田とし子

月下美人虐待に遭う寒の月
行進曲生きるいのちを這うように
天も地もたんと毒素を溜めている
むずかしい事は言うまい御挨拶

寝屋川市　酒井勇太朗

朝ドラに過剰反応する妻で
欲目なら我が家の娘みな美人
さっぱりと全財産を皐月賞
来世では道を説く職就くつもり

交野市　山川日出子

ぽっくりと師は大寒に黄泉の旅（金井文秋先生を偲んで）
大拍手無事見つかった新生児
藁屋根と水車はとても良いコンビ
危機交差管制ミスの日航機

守口市　結城君子

おひるにはもう溶けている雪景色
逆立ちはしないよ骨が折れるから
老夫婦無言のタイム凄まじい
救助犬の顔に使命感がみえ

藤井寺市　太田扶美代

厳寒を働く顔でカッコイイ
少し拗ねてわたくしの魅力を試す
私の情熱ほどの初日の出
合図がしきり初恋のあたりから

和泉市　西岡洛酔

はぐくんだ命大事に冬籠り
人肌の燗でたっぷり冬を愛で
賞味期限過ぎるぞ孫が熟れている
自画像の汚点が消せぬ歳の嵩

河内長野市　植村喜代

一日入院あれこれ言って異常なし
ストレスを一ばい溜めて聞く小言
寝言いう辛い思いをさせるから
我儘もそこまで言えば報われぬ

岸和田市　木村正剛

四十年機械のように押した判
肩書をぶら下げてくる老人会
縄暖簾くぐると温い人がいる
坪百万とれた大根五千円

岸和田市　池田寿美子

傘寿過ぎドラマチックに春を呼ぶ
多事争論考えなおすことばかり
激動の鍵握る人期待する
凜としてあしたに生きる声の欄

泉佐野市　山本蛙城

じゃじゃ洩れの機密費というお小遣い
割勘の婦人が続くレジの列
新世紀馬に食わせる税もあり
片や事故こなたゴルフとは絶句

大阪府　籾山隆盛

お人好し他人の風邪をすぐもらう
なんの夢見てるか妻が笑ってる
駅前に磨きをかける町の顔
キャスターの二日と着ないおなじ服

大阪府　米澤俶子

変りばえせぬ暮らしこそ恙なし
美味い店　行列作る蟻の真似
ゲーム好き鬼ごっこなどしない子ら
やがて宇宙へ好みの宿をさがす旅

亀岡市　井上森生

現代の妖怪変化ハワイ沖
立春を待たず桜の芽が動く
冬の庭自分のこころと向かい合う
解脱に非ずふと空白の時に遭う

尼崎市　長浜澄子

人込みで得たアバウトに生きる知恵
バレンタイン気合いを入れたチョコ作り
粉雪舞う森繁節を聴いている
豪快な男に隙が多すぎる

西宮市　井上松煙

祭日は昔の歌が口に出る
大勢に相談をして迷うだけ
たちのよい病気と知ったＭＲＩ
健康法どれが効いたか分らない

自選集

橘高薫風

腕の無いヴィーナスの像と黄なコート
朱の社殿海の鳥居へ黄なコート
草千里馬上風追う黄なコート
顔見世の勘亭流へ黄なコート
陽炎へチーズの如し黄なコート

小林由多香

でも継ぐというから継いでもらおうか
掃除機でした掃除では気にいらぬ
豆撒いてまだ名ばかりの春迎え
片仮名の花の名前になじめない
飲み放題使い放題水安い

石川侃流洞

女神老い鬼も弱って手を繋ぎ
枯木に花咲かしてくれたボタン雪
母大事に持ってた僕の軍事便
だんだんと縮んで百を超えた母
養老の滝 単身をなぐさめる

西田柳宏子

ハンドルは妻に委せてよく眠り
雪しんしん合の手に鳴るもがり笛
恥ずかしいためらい傷が二 三ヶ所
倖せと思う風呂の湯溢れさせ
宿浴衣解放感に羽目外す

堀端三男

灯明が消えても愚痴は止まらない
今日もまた一行消した住所録
偶然が重なる神の暗示かも
スクランブル大きく背伸びして渡る
脳天へひびく感動ありがとう

西村早苗

玉子酒風邪にも効いて酔いはじめ
いい話マジと取れない四月馬鹿
言い訳をねじ伏せ強がり言うてみる
スカートを踊らせ風が柔らかい
鼻声でネェーと春の陽浴びながら

二十一世紀も難題多し黄信号
地球異変天災多し風はらむ
女性のたばこは少子化へ連動す
景気遅々明るいニュース見えかくれ
行事予定 別れが惜しい花吹雪

藤井明朗

もはや連翹も桜も春の息
錯覚をまだ崩さないシクラメン
ファクシミリの中から春が転がり出る
春爛漫と思い違いをした硝子
冬と春の通路で拾う笑い種

八木千代

合格の涙をふいて乾杯す
花手桶父母甦る空の彩
真情に殻脱がされて花芽吹く
草も木もまた花の咲く春の風
野の仏きれいに染めて桜咲く

藤村〆女

カラオケで孫に音感認められ
知ってどうする血液型を言わぬ兄
老後ゆたかで締切日忘れない
生き延びた方が書く仲追悼記
父あてのFAX葬儀案内図

竹内紫錆

特権のひとつにぼけたフリをする
颯爽とブランド嫁く気さらになし
うどんすき妻の口数多くなる
退屈はすこしもしないカレンダー
テロップの速報怖い地震国

玉置重人

賑やかなのが取り柄だという家族
玄関の笑顔にいつもほっとする
幸せな未来釣書が知っている
母の鍋やっぱり話長くなる
夢だったのかと余韻が目を覚ます

恒松叮紅

新築の槌音高く道人邸
春が来てもやっぱり痛む後遺症
コマーシャル僕もそれらを飲んでいる
小兵力士の活躍に沸く大相撲
人間の愚かさ過ち繰り返し

野田素身郎

仙人掌(さぼてん)もアロエも凍りつかぬよう
雪女郎とおったあとの雪を掻く
親鸞に縁起の恋を大切に
求む 子を産める娘を二一三人
白い道から火の海が見えるかい

土橋螢

公園のベンチ八十路の姫を愛で
デパートへ老いかき立てるコマーシャル
関心と悼みが喘ぐえひめ丸
プライドがもやもや燻る森総理
年一度税務署を訪う申告書

榎本吐来

快い目覚め一日有意義に
酸欠の町で恵みの風に触れ
通じ合うふたり寡黙でいて平和
価値観の相違で友とできた溝
タイミングずれて善意が実らない

河井庸佑

故郷のくらしに鍵の要らぬ家
湯加減の良さもう五十数えよう
駄菓子屋が無い子供らが見当らぬ
向こうから悪友笑いながら来る
小走りの女切ないものがない

月原宵明

五〇パー引き今迄儲け過ぎだった
安い米ぼやきながらも作ってる
まだ死なぬつもりで使うトラクター
百姓で食うて行けない田が荒れる
負けてられんそんな若さも隅にもち

宮口笛生

福笹にむすぶ願いに夢がある
暮らしぶり映る戎のおさい銭
トラックが運ぶ戎の大まぐろ
節分のふるまい酒が温かい
節分にスター忙しい鬼は外

芳地狸村

まだサクラ咲いております北の街
哲学の道で心中をするさくら
桜にはいつも心配かけている
わすれない忘れませんと散るまでは
もう少し待って下さい散る桜

板尾岳人

転宅へこんなに多い捨てるもの
移転先でも同じ薬を医者がくれ
同心円に妻がいるとは限らない
知ったか振りしてこそばゆい尾骶骨
老いひとりじっと小皺の手を見つめ

阿萬萬的

音立てる雪は中々積もらない
妻の頭も程よく白になりました
コーヒーも通はお代りなど言わぬ
硝子戸を敲く曽孫が来たらしい
何時出すか解らぬ妻の変化球

田口虹汀

蟹へ来てただ黙々と蟹せせる
万歩計の道だきれいに掃いておく
新式のボタンが老いの手におえぬ
ささやかな旅だが天気予報よし
二つ目の坂がきつうて転げ落ち

遠山可住

桜吹雪の中で遺言書けますか
患うた心を吊す花の棚
お別れの日から小雨が止まらない
虎落笛捨てた恨みが深くなる
結論の先は見えない天邪鬼

波多野五楽庵

七福神 錨をおろす宝船
福耳のあかしないまま昏れかかる
寒風に独り佇ってる地蔵さん
残り福小さなお手てが引当てる
ふる里の感触想う空っ風

工藤吟笑

傾いたままに凍て付く震災地
ただ顔を晒しなんぼの天下り
おふくろの味とあかぎれ思い出す
血も凍る三面記事に慣らされる
等圧線込むと落ち着く北帰行

舟木与根一

地球儀の賞味期限が切れかかる
道問えば皆振り返るランドセル
楢山に彩り添える山桜
色封筒春の便りがやってくる
でかい夢乗せて世紀の春巡る

木村あきら

震災の炎静かに目を閉じる
哀調の尺八雪が降り止まぬ
まだまだと錆びた笛吹く父の椅子
寒晒しなるほど旨い蕎麦の味
人間が人間のままいる平和

斉藤劦

悔しいが葵の家紋縁がない
泊まる気で来た吊橋の揺れ止まず
波間から魔女が踊って酔うてくる
騙し絵の中からシャネル5が匂う
多目的ホールへ今日も影と行く

小西雄々

壇上に立って歳など考えず
温泉に敗けぬ我が家の風呂かげん
積み上げて置くな地震がまた叱る
神の子と思い頭を下げている
岸壁の歌そのままの亡母でした

二宗吟平

花好きの人が住んでる路地をぬけ
しらじらと空が明けるとはかぎらない
懐にあるのはバクダンかもしれぬ
気配りがすぎる家だと靴をはく
物忘れ笑えるほどのことであり

正本水客

襟巻を直して自愛口にする
手を振って歩けば歳を忘れとり
愚痴と愚痴聞いて聞かれてそれでよし
梅咲いて民話の里で鍬の音
野水仙貧しい岬で早春を告げ

越智一水

も一人の自分の声に振り返る
笑顔だけ忘れんようにふところに
倖せか不幸か日記白いまま
まな裏の蝶がときどき戯れる
人生の割り算とてもむずかしい

川島諷云児

本音書く誤字も当て字も皆本音
ぴちぴちと若い一言じんとくる
デフォルメもあるから君の絵に惹かれ
風に叛いてぴちぴち響く青い唄
鈍感な人だ王手に気がつかぬ

野村太茂津

冬のハートへいま充電をしています
満ち潮の声を短気が聞きもらす
生きざまを見てくれ死などへっちゃらだ
冷戦が終るとスパイ失業だ
握手する右手に嘘はないのかい

両川洋々

梅一輪咲いて鶯休む枝
上目遣いの番犬が居る館
騒音の中でウロウロしてる恋
男一人女ひとり住み何もなし
一食を抜くのも生きる手立てです

黒川紫香

小言にも母の情けがこもってる
深酒で初夢を見ず終い
ほめ言葉次々とつづく披露宴
賛成の拍手で会議終了す
旅に出て本場の味をみて終い

弘津柳慶

満月の裏には亀が住んでいる
お月さんたった一つでよかったな
氷山がおいしい水として売られ
百歳でスター成田きん蟹江ぎん
アメリカの鬼門はオアフ島あたり

河内天笑

エッセー

私の教育改革論

岩津　ようじ

学校が荒れている。その荒れ方たるや、すさまじいらしい。

私は、子供たちの荒れる大きな原因の一つは、「学校の授業についてゆけない」ことにあり、それに「なんの役にも立たないことを教えている」のも一因と思っている。

私たちの時分には小学校六年間だけが義務教育であった。今は中学三年間も義務教育である。九年間も義務教育を課して、一体どんなことを教えるのか。社会に出ると大部分の人が生涯必要としないことを教えているのではあるまいか。仄聞するところでは、数学なんか難しすぎる。中学で、微分積分や集合論まで教えるという。ところが、現実は、大学生でも分数の計算の山来ない学生がいるとか。数学や物理、化学、外国語などは、前に習ったことが分からなかったら、次に習うことは先ず分からない。分からない講義を大人しく聞くほど子供たちは礼儀正しくはあるまい。

分からないことを聞かされるのは大人でも苦痛である。私は五十過ぎに職場を変わった。新しい職場では、コンピューターを導入しようとしていた。ちょうどコンピューター業者が説明に来たから、岩津さん、聞いてみませんか、と誘われた。で、うっかり説明場に顔を出したのが運の尽きだった。私は一～二時間、何も理解できないことを聞かされた。その後は、いくら誘われてもそんな説明会には出なかった。私にも登校拒否の素質がある。

私の会社の後輩にとても英語の上手な人がいた。彼の娘さんも英語はよく出来る。しかし、数学はさっぱりであった。でも、大学入試に際して一念発起し、数学の勉強をはじめた。おかげで数学も得意科目となり、一流大学に入学した。アルバイトに家庭教師をしているが、数学を教えるととても好評という。自分が分からなかった経験があるので、どうすれば分かるようになるか、そのコツを心得ているからである。英語ではその経験がないから、英語は教えない。そういえば、私もパソコンをはじめた頃、親切な人が忠告してくれた。「達人に習ったらいけませんよ。達人は易しいことは分かってると勝手に決めて、難しいことばかり教えてくれますわ」。

文部省のお役人たちは秀才揃いで、名門校を出たエリートたちに違いない。彼等に落ちこぼれの気持ちが分かるはずがない。教育改革の委員会の構成員も同じであろう。そうかといって、文部省は落ちこぼればかり採用しろともいえまいが。

昔から日本では、ヨミ、カキ、ソロバンといって、これだけ出来ればよい、それ以外のものは必要に応じて習えばよろしい、という考え方があった。私も、学校でいろいろなことを習ったが、生涯に、一度も役に立たなかった知識が大部分である。過日、友人とこんな話をしたら、彼は、いや、何でも役に立っている、無駄はなかったという。私も、意地になって、それじゃ、あんた、熱力学が役に立ったことあるか、ときいたら、相手はあっさり降参した。

今後は、ヨミ、カキ、パソコンと英会話の基礎ぐらいを小学校で教え、中学は義務教育から外してはどうか。こんな卓説、文部省に教えてやりたいが、文部省は庶民の意見を聞く耳を持つまいから、教えようがない。

さて、川柳はいつ勉強すべきか。私は、大学に落語研究会と同じく、川柳研究会を作るところからはじめてはどうかと思っている。もちろん、愛好者だけの会にすればよい。

板尾岳人選

横浜市　鈴江純子

彼が居るただそれだけの温い日々
彼あての電話に父の砂時計
嫁二人何だか得をした気分
キッチンに女二人の火花散る
ふる里の賑わいを知る火吹き竹

札幌市　三浦強一

血統を言うならうちの猫と犬
ストーカー法が恋路の邪魔をする
孫の手のお世話になっている背中
リストラの風ビル街を吹き抜ける
追い風を受けたことない父の背な

東京都　清原悦子

手料理に期待がかかる目が怖い
花好きの家で玄関温かい
嬉しくてランドセルまで笑ってる
汗かいて生きてきたこと子に残し
同じ事聞いた気がする里の母

八王子市　井上京一郎

回れ右思い直して回れ右
まかせろと胸を叩いた酒の悔い
一線を画したはずの浅い線
真っ先に逃げて当たった流れ弾
消しゴムで消える程度のお付き合い

横浜市　巌田かず枝

雪掻きの上手い隣は北の人
争いの種もペットは食べてくれ
三度ともたっぷり食べて薬飲む
泥縄を綯うて失敗くり返す
義理チョコに真面目な返事かえされる

横浜市　荒井広和

鈍行の旅で心の余白埋め
身の程を知らず大法螺吹く偽善
損得の暮らしで余生狭くする
絵手紙が先取りをする梅だより
修羅の世を生き抜いて来た自負がある

横浜市　近藤道子

冗談が言える耄碌していない
縋るため縄はかためにに編んでおく
冬のバラ長くもたせて愛終る
五円玉なぜかひっそり生きている
哀も悲もやさしい風に癒やされる

横浜市　田中笑子

勝ち力士背中踊らせ引き上げる
ホカロンの売れゆき にこり氷点下
青空を連凧優に一人じめ
消化剤だけが減ってくお正月
よく笑う仲間で歳を忘れさせ

横浜市　保田絹子

太陽に泣き顔見せる雪だるま
雪道のお使い誰にあみだくじ
産む産まぬ男は隅に押しやられ
妙薬に余命の試算させようか
吉兆か瀑布の壷にかかる虹

河内長野市　大西文次

ことがことだけに冷や汗どっと出る
満足度まあまあまあの日向ぼこ
社長にもピンからキリのある名刺
普段着でよいと言うてもアッパッパ
遺言状あけると中に借用書

富山市　松見たえ

きっとある出番待ってる赤い靴
逃げるから追いかけてみる人の性
へたな嘘 笑顔で母は受け止める
生と死の狭間で和む嫁姑
たわいない会話で夫婦泣き笑い

川口市　原沢かね子

子の見合い親も朝から落ち着かず
おふくろの味が恋しと旅便り
人気出て噂話に殺される
好物に自覚忘れたダイエット
原点に戻り度忘れ思い出す

静岡市　中西雅

礼節を心に畳む母の恩
生きざまをすべて話せる友がいる
誰とでも添いとげられるかすみ草
雲に乗り亡夫に会いたし戻りたし
ガラス靴夢からさめて寒い朝

岐阜市　平野あずま

娘より親が夢みる雛祭り
エプロンが似合う姿で嫁に出す
妻の笑み昨夜の嘘を知っている
背番号外すと空気軽くなる
居酒屋に父のポエムが満ちている

三重県　尾崎　勤

新しい靴にしばしは慣らされる
回数券の裏に平凡さを刻む
思案する顔に視線が届かない
歯車の気楽さ惰性でも動く
近道を選びガラスの顎を持つ

田辺市　大峠可動

空想の果てにごろんと怠け者
うつし世は遠いところよ四月馬鹿
春愁や春のめまいは喜劇です
極楽へゆける炎よ夕焼けよ
家相省略笑い上戸の妻といる

京都市　勝山美千代

ゆっくりと歩けば春の音を聞く
幾つものハードル越えて丸くなり
温かい笑顔を添えて友きたる
香と遊ぶ頑固な頭ほぐしたく
転ばぬよう心に杖も持ち歩く

京都府　前上英一

前向きの姿勢に風も味方する
追い掛ける夢も小振りになる余生
禁酒禁煙カルテうるさいことを言う
二日酔いゆっくりジョーク効いてくる
大きめの笑い袋に替える老い

和歌山市　木村親躋

荷造りを直し余生突っ走り
方言に戻りその人らしくなり
笑いたい時もあろうに鬼瓦
一生が二時間で済むメロドラマ
ナツメロが想い出どっと湧いてくる

和歌山市　武本碧

人材が豊かで会社病んでいる
飛んでみて初めて知った向かい風
鉢植えへ水やり愛のエッセンス
意外性求め風船飛んでいく
ファッションに遠い野良着の母が居る

和歌山県　杉山精子

キウイが熟れるリンゴと恋をして
ぐい呑みを選んであげる祝い酒
栄光も挫折もいずれ風になる
寒月へ情けを乞うている懺悔
驕りなど無い生真面目なシクラメン

和歌山県　村中悦男

変だなと思って見れば変な影
梅一輪　霜の朝をおそれない
旅毎の写真だんだんふけて行く
脳のしわ伸びて来たのか物忘れ
面の皮　相手次第で厚くする

和歌山県　中村君枝

携帯で忍耐力も薄れゆく
心機一転　細く長くをモットーに
成長期だろうか骨がきしんでる
物分かりいい父さんでいる苦労
人間臭くなつて転びも上手くなる

綾部市　藤田芳郎

日本語の分からぬ豆腐味噌醤油
蛇行して川は行く末考える
一斉に飛び立つ鳩の平和主義
新世紀　亀も兎も駈け出す気
大海へ流れ込んではまた迷い

大阪市　熊代菜月

趣味をもちボケない自信持っている
遺言に延命不要と書いておく
一直線歩く私は淋しがり
幸福ときめて心が弾み出す
若いっていいなと思う昨日今日

大阪市　中澤伽羅

目印は黄色いコート着ています
筋違い何で私が叱られる
ぴったりの助言もろても聞き流す
あっさりと白状されて拍子抜け
物忘れした話なら負けてない

大阪市　伴洋子

言い訳でがんじがらめの蜘蛛の糸
誉め言葉ああ勘違いだとしても
妥協などしない女の京言葉
一本道ただゆっくりとゆっくりと
どの道も同じ視点で見た迂闊

大阪狭山市　矢野梓

適当に驚いて見せ聞き役に
逆らわぬ主義でストレス溜めている
茶会から戻りコーヒーでほっとする
聞くだけでおいしい旅の蟹料理
義理チョコもやっぱり甘くほろ苦い

大阪府　澤田和重

背伸びした出世器にそぐわない
盗み見るカルテは読めぬ文字ばかり
うたかたの恋に翻弄されている
喜ぶのは早い九回裏がある
胸襟をひらくと敵も寄ってくる

八尾市　平川幸枝

不可能なメモを消してるカレンダー
風邪もまた気ままな余生丸くする
乗り越して解決できぬ寒い駅
流れから外れてやっと自信もつ
年ごとに身の内の鬼静かなり

和泉市　横山捷也

音程の狂った唄で安堵する
完敗の子等が夕日を後にする
世をすねた理由は聞かぬ事にする
三帖の一間で大志を抱いて寝る
嘘一つつけぬ女房がそばに居る

富田林市　中崎深雪

春の風呼びこみたくて模様替え
大和路や我待つように梅の花
終章のシナリオ書いて安堵する
漕いで漕いで坂を登れば風になる
春だから花びら色の紅をひく

東大阪市　田中美弥子

わが子虐待野性の森に恥ずかしい
厚化粧しても隠せぬ胸の疵
胸さわぎ男の嘘を見てしまう
密やかな未練を溶かすひとり酒
謎ひとつ隠れた過去の夫婦地図

奈良市　田中賢治

境内は合格の絵馬福を抜き
天の網 機密費知らぬ馬の顔
野党席水を掛けられ元気出し
投網打つ皺深き顔 川に生き
民の声届かぬ人に税納め

岸和田市　不破仁緑

梅の香が合格絵馬にふりかかる
病院を無事に出られて乾杯だ
空缶に風の強さを知らされる
どん底で拾った玉は放さない
成人式 元少年兵が嘆く

尼崎市　河津正治

自画像が本物よりもうまく出来
丸腰となって人生度胸つく
聞く耳は持たず世間に四面楚歌
若者の独りよがりの方程式
過去の事知られたくない蝶の舞

神戸市　木村忠義

ライバルの訃報にどっと荷崩れす
惜しみなくありがとう言うことにする
誤解されてもやり遂げることにする
孫の手が欲しい時には見当たらず
妻が居る幸噛みしめている老後

川西市　西内朋月

天国で刺繍してるか雪しきり
牡丹雪わが生きざまのごと積もる
人間に付けられる日のバーコード
長生きの遺伝子もらい不摂生
気兼ねして気兼ねしてでも吸っている

今治市　塩路よしみ

石蹴りもジャンプもしたい車椅子
心まで覗かれそうな子供の瞳
新世紀まだ人間を続けます
みかん摘む島のおんなは島が好き
美しい言葉が好きなイヤリング

愛媛県　黒田茂代

強がってみても虚しい花の芯
ぽんやりと人待つ窓のぼたん雪
家事苦手など思わせぬ割烹着
ちゃらんぽらんな生き方出来ぬ足袋を履く
帰る鳥来る鳥　春の雪の中

香川県　原賢

神様が絵馬に運んでくれた春
野仏が春一番に目を覚ます
坪庭で木の芽にそっと心聞く
男坂迷うて一歩踏みだせず
針穴を覗くと母の火消し壺

高知市　小川てるみ

確実に残り時間は減っている
あまりにもむごい話が多すぎる
晩学の辞書は毎日繰っている
恩一つ返せないまま新世紀
すこしだけすねてみたいな春の風

岡山市　藤原一平

父を焼く煙に空は青すぎる
毒舌が髭剃ってから出てこない
矢印はどうあれ決めた道がある
味方から思わぬ弾が飛んでくる
善人と言われ仮面が外せない

岡山県　国米きくゑ

笑うのは火の輪くぐって来た女
咲き終えた花が乱れる冬の章
失った愛を探しに来た枯野
晩学の森で大きく四股を踏む
すんなりと生き人間味欠けている

倉敷市　家守政子

底辺も気楽寝ころびテレビ見る
親展の封を開くと請求書
新生児　宇宙を向いて大欠伸
木偶の坊乾いた過疎に風と棲む
掃除機の音で逃げ出す粗大ゴミ

倉吉市　大下智子

大蛇にも姫にもなれる技磨く
環境のルール地球が泣いている
自己管理ルール年々甘くなる
苦労して身につくルール忘れない
幸せのはかりを人が噂する

北九州市　岡田幸生

目を入れたダルマの鼻が天を向く
尻尾振る軽い男と見られたか
午後三時お喋り好きなさくら餅
ルール違反はそちらと思うネズミ獲り
肝臓に詫びて付き合う祝い酒

鳥取市　近藤秋星

安々と春にはさせぬ冬の意地
隣まで来ている春が足踏みす
俺も歳呆けた真似でもしておくか
どうしてもゆくとこ急ぐことはない
鶯も春告げる日を待っている

鳥取市　田村邦昭

軽すぎた知恵が他人を傷つける
美しい声だ美人ときめている
古傷があわて心に蓋をする
凛として父は背中でものを言い
いい笑い信じてるから生きられる

鳥取県　平井栄翁

つまずいた石が知らせた曲り角
道端の花が教えた身だしなみ
貧乏と二人三脚して暮らす
長生きのおかげで香典また包む
鏡からもらう傘寿の笑い顔

鳥取県　竹森富久江

あれこれと思い過しのことばかり
厳しさを諭してくれる坂に遭う
美しい模様を醸すまで織ろう
おだてられ雲にのったり溺れたり
迷ったら影も離れていくらしい

鳥取市　録沢風花

逢いに行く道を吹雪で見失う
トンネルに入ると脈が早くなる
予定にはないシナリオをどう捌く
アイディアが浮かんで消えてそれっきり
草に寝て宇宙と語る春を待つ

鳥取市　福永ひかり

使うほうが大変と言うお金持ち
デスマスク他人に見られたくはない
善意の死　何の補償もない二人
性格は夫婦逆さまだと思う
一身上の都合でみんな括られる

鳥取市　永原昌鼓

物言わぬ地球が抗議くり返す
夢枕またも亡父が来て叱る
どうせなら明るい皺を増やしたい
袴を脱いで世の中闊歩する
孫の声　茶の間に春を連れて来る

鳥取県　藤山弘子

のびのびとプレーがしたい団地族
小心かひっそり暮らす蛇もいる
地震多く蛇もゆっくり寝ておれず
人生をゆっくり歩き幸見つけ
誤った主張もひとり歩きする

鳥取県　西沖彰雄

長老のポツリ一言後で効く
苦労した人の言葉にある丸み
八起きした人が持ってる温かさ
先頭を歩く男の持つ自信
世間体あって時どき蛇行する

鳥取県　下田茂登子

山の湯で噂話にされた花
三世帯　無口で暮らすいい家庭
それぞれに薬目的知っている
脳天に悪知恵詰めてあるらしい
賛成はしないが拍手しておこう

米子市　足立由美子

雪解けの頃には謎も解けるだろう
月明かり私素直にしてくれる
約束は月のきれいな日にしよう
寒そうに野菊が咲いて風の庭
花言葉添えて一鉢差し上げる

米子市　猪森スミヱ

悪口はよそう研が返るから
神様が揃い踏みして新世紀
新世紀担う主張を聞く炬燵
掃き溜めで鶴がほとほとつく吐息
千羽目の鶴が羽搏くかも知れん

松江市　津川紫晃

前編と後編がある雪の私語
余生なお燃やす火種はたっぷりだ
冬の海誰か相手が欲しかろう
言い訳を許さぬ冬の風の音
冷蔵庫開けると妻の顔がある

島根県　毛利幸

自分史を書いてすっきり明日を詠む
新世紀あなたの胸に灯をともす
人生のゴール地点が宙に浮き
恵まれて感謝の気持ちつい忘れ
元総理二人加えて座を守り

島根県　持田多輝子

逃げこんだ迷路で尻尾つかまれる
上ばかり見るから夢が届かない
力んでも影の長さは変らない
期待した結果が出ない日のあせり
追憶の話がつきぬ里の母

出雲市　伊藤玲子

脱皮した殻もわたくし埋めておく
機密費の財源充分あるんだね
こだわりを真白き雪に諭される
雪深々想い出だけが行き来する

松江市　三島淞丘

定年に金の成る木は枯らすまい
ちらほらと風に流れる花便り
大吉の籤は御神酒と神棚に
煩悩を忘れられない人の性

松江市　福間芳枝

針穴がいらいらしてる女の業
くずし文字自己満足で意志疎通
挨拶がかえらぬ不思議風に舞う
寒風に渋柿甘く過去を恋う

松江市　山根邦代

いい笑顔負けないように返してる
生きている良いも悪いもつつみ込み
お節介が過ぎて落ち込む老眼鏡
雪が舞うストーブ赤く唄い出す

島根県　武島ちよえ

金婚に喜寿が重なる祝い酒
ちょこ一杯だけで気分は桜色
張り合いは意見がすぐに跳ね返る
木が切られ山は涙が止まらない

島根県　福間博利

草萌えて独酌もよし春の雨
永田町の白が白とはかぎらない
走りすぎ己れの歳につまずいた
こだわりをお供にくぐった縄のれん

島根県　多々納テル子

満タンに灯油を入れて冬ごもり
日々が早いと思う古希に生き
星空とデートしながらダイエット
一滴の水にも命母の川

米子市　森脇麗

華のある女でいたい死ぬるまで
急がない時間をかけて謎を解く
心の錠をはずす素敵な友がいる
慎重にゆっくり上るはしご段

鳥取市　岡田信恵

ここだけの話が風にとんで行く
人生は当たり外れのくり返し
つまずいて他人の痛みかみしめる
雪空の三日つづいて雪見酒

鳥取市　福島庸二

リハビリのお陰で今日の日を迎え
叶うこと信じ予定に入れておく
歯に衣着せずに主張述べる仲
表には見えぬ夫婦のかくし味

鳥取市　山口千代子

親友と心の掃除する喫茶
老いてまだゴミにされたくない余生
美人薄命　私はなんと八十三
第三者入ったためにもつれだし

倉吉市　大森孝恵

ばあちゃんの小耳が噂よく拾う
路上から子等の歓声雲がくれ
決めかねて行く行かないと花に問う
表札と土間の靴とに亡夫が住む

鳥取県　山内芳江

名案がやっと浮んで来た夜明け
言い切った言葉信じて深く眠る
お膳立てしても動かぬ重い腰
みほとけに空念仏が届かない

鳥取県　山岡久枝

庭に来る小鳥少なく案じられ
山茶花が見えて楽しい窓を拭く
控えめに咲いて和ます白椿
雪溶けて出番がきたよ蕗のとう

鳥取県　橋谷静江

満開の花を夢見て種を蒔く
健康のバロメーターに笑顔ある
一日を大切にする癖がつき
愚痴を聞く夫が今はいてくれる

鳥取県　西垣美知子

おはようがすんなり言えたいい目覚め
舵取りの母のルールは温かい
七転びこれから先も甘くない
今日の愚痴洗って今日の幕おろす

鳥取県　鳥羽玲子

一針の誤算　角から狂いだす
今日の愚痴ノート聞き役してくれる
急いでも人生同じ日をめくる
吉凶の包みぐあいを確かめる

鳥取県　鳥羽直市

わがままが近い隣を遠くする
力いっぱい泳いだ過去に悔いはない
屁理屈を吐く一匹がかき回す
生かされた今を感謝し坂のぼる

鳥取県　蔵本悦子

限界を越えないために木を植える
人生の節目節目に水を飲む
御希望があれば今日だけ許します
防腐剤入っていない夢が好き

鳥取県　澤裕子

鈍行で我が人生を振り返る
謙遜の裏に自信が見えかくれ
煩悩を静めてくれる日本海
潮風に目刺しのすだれ春を知る

動機などないあなたへの恋心
新世紀白いページを開けてみる
ほらごらん地球が悲鳴あげだした
封印を解けば涙が零れだす

鳥取県　小谷はるみ

どうしても青で描きたい日本海
何ごともピエロになれば耐えられる
度忘れと気付き老化を思い知る
満たされて私だんだん退化する

鳥取県　山下節子

軒先をカールに巻いたお洒落雪
立ち止まりぽたん雪抱く母の川
真っ白い悪魔と誰が名付けたか
白雪を泥で汚した奴がいる

竹原市　正畑半覚

寒風に客走り込む縄のれん
坂道にうっかり置いた秘話一つ
わだかまり溶けて何時しか元のさや
ダイエット一喜一憂する目盛

松山市　山之内八重美

追憶の人は綺麗で美しく
きれいだよこの一言で許してる
おねだりはかあさんきれいとほめてから
しがらみをきれいさっぱりして老後

松山市　高橋宏臣

命がけ生んだ子供が横を向き
逢わぬ日の顔が気になる朝の駅
限られた命と対話する辛さ
あこがれた街は砂漠の風が吹き

香川県　伊勢八重子

思い出すのは止そう涙が止まらない
小さい傷隠す大きな傷を持つ
嫌なこと忘れなさいと言い聞かす
もの言わぬ日のストレスを文字にする

愛媛県　花岡順子

渡し船瀬戸の景色も共に揺れ
トンネルを抜け人情の機微を知る
窓ガラス拭いて芽吹きに語りかけ
どこからか声が聞こえる寒雀

今治市　中村好恵

悪口を言う口閉ざす菩薩の目
荷崩れを直し七十路を折り返す
愛深し敵も味方も抱いた海
迷いから抜け出してきた青い海

今治市　渡邊伊津志

一筆啓上IT殿へ奉る
二〇〇一年また蟷螂が斧を振る
新世紀三食食って寝て起きて
現役の頃に望んだこの惰眠

高知県　桑名孝雄

高知県　近森　功

対岸の花に気付いた万歩計
死神が順序不同で呼びにくる
もう一度咲かすか老いの白髪染
正直に生きて馬鹿だと笑われる

高知県　百田　幸

責任を取った波紋が太すぎて
祝い酒たっぷり呑んだ新畳
音の出ぬ笛も仲間の玩具箱
赤茶けた畳わたしと比例する

宇部市　高山清子

カスミ草脇役のまま映えている
プライドを捨ててやっとの二度の職
さよならの後から長い立ち話
避けられぬ老化へ月日矢の如く

町田市　土田今日子

厚底へ目が離せない老婆心
松葉杖　付点音符で通り過ぎ
春爛漫そそくさと家事切り上げる
書いて消し書いては消しの半世紀

川崎市　塩沢ひで

一刻を鬱から世辞が解いてくれ
鬼は外などは言わない佗住居
捨てる気を買った時代が待てと言う
抽斗に夢抱いたままハーモニカ

川崎市　小林久美子

みな他人悟れば肩の荷が降りる
湧き水の砂の穴には夢がある
かみしもを脱ぎ定年の箍ゆるむ
雑音を躱して年の功のどか

日立市　加藤権悟

許す気の酒だな父が待っている
蜃気楼　太古の祭りかも知れぬ
舶来の豆で日本の鬼はらい
拳骨をひらくと丸い絵は描ける

富山市　沢江和代

そこそこに手抜きが出来る人でいる
剃刀のせいにするから疑われ
砂時計　不満の糸を今日も吐く
逃げ道を断つ生き方で深い皺

和歌山市　松尾和香

仕事終え部屋の温もり独り抱く
焼きいもの包みかかえて軽い足
鎮魂の祈り捧げる白い息
虹色の橋の向かいに君の星

和歌山市　上地登美代

ひと言が春の心にしてくれる
少しずつ夢膨らます蕗のとう
待望の親のレールにある誤算
しなやかな母の翼の無限大

京都市　山本　礫

缶ビール程度の軽い男たち
上げ底のある人間が街にいる
千羽鶴　子供だましであるけれど
花にかくれて敵も味方もやりすごす

京都府　丹後屋　肇

幹線に孤独なままの一里塚
陶芸家また叩き割る自尊心
水仙を活けて独りの春を嗅ぐ
寒の堂　微動もしない座禅僧

生駒市　飛永ふりこ

夫婦でもあ　うんの呼吸乱れます
竦むような視線私を凍らせる
親子です欠点ばかりなぜ似るの
生菓子と抹茶で疲れ取れてます

奈良県　江波正純

フルムーンペアルックで勝負する
各停に乗った人生身が軽い
道楽は定年過ぎてものを言う
肩書きをみんなはずした草野球

横浜市　三村八重子

確かさは水栽培の根の白さ
関節の油をさしに孫が来る
招待のディナーの後にする茶漬
子の羽化にトーン落としたファンファーレ

横浜市　生坂サト子

勉強と称し老舗のフルコース
強張ったハート柔軟剤を買う
夕鶴に共感恩の返し方
熟睡のグッズにも飽きやがて春

横浜市　秋元和可

頭には残らぬ知識積んでいる
初雪を帽子に被る道祖神
集金が噂話を置いて行き
日向ぼこ亡母に似てきた影と居る

横浜市　芦田鈴美

紙一枚が決める男のテリトリー
ねぎらいが欲しくて少し拗ねてみる
相槌を期待している悩み事
愚痴言える友だ大事にしておこう

横浜市　伊藤ふみ

春ですよ和菓子の店に誘われる
仕来りを頑固に守り浮いている
壁に来て爪を研ぎ天命を待つ
初孫へ財布の紐は開いたまま

横浜市　川島良子

相棒もドジで笑いが止まらない
気力体力　調和のとれぬ歳となる
今できることが何かを考える
対応へしどろもどろの介護法

金木犀目より先に鼻が知る
老夫婦リクレーションの口喧嘩
独酌の酒にも春を待つ心
遺言を書いておく程財もなし

横浜市　石原三郎

冬空を仰ぎストレス深呼吸
雪の道　石やき芋ののびた声
節分に最後の願い絵馬をかけ
する事はあるが炬燵が離さない

横浜市　山梨雅子

健康は宝と知った不摂生
サボテンが恥ずかしそうに花芽見せ
喜寿よりも金婚目指す養生訓
嬉しさの一つにっぽん美と心

横浜市　平　達也

恵まれて私も猫も肥えている
思い出をゆっくり語る囲炉裏端
アルプスの夢をみている登山靴
ゆっくりと歩こうぜまだ明日がある

尼崎市　森安夢之助

老夫婦　多弁と寡黙それで丸
連れ添うて春夏秋に冬を知る
一言の寝言が話題楽しい日
二人三脚転んでばかりいる夫婦

神戸市　山口光久

多事多難つめたい水をふくみたり
カタカナ語辞典でニアミス引きました
つぎはぎの人生古希にたどりつく
介護論来る日来る日に夢託す

篠山市　倉垣恵美

旗色が悪くて誰も従いて来ぬ
いつまでも背伸びしたがる好奇心
一言がたりぬ夫婦のすれちがい
愚痴言わぬ覚悟ができて姑となる

篠山市　円増純子

元気やが困ったことに物忘れ
決心が半端で明日が見えてこぬ
新世紀　玄関に出て深呼吸
二人して一人前と思う老い

兵庫県　安達厚

正直に言えばつぶてが飛んで来る
秘密兵器は少し多めの出し昆布
ときめいて背伸びしている足の裏
一言と言うに祝辞の長いこと

兵庫県　広瀬房江

常夏の子等に見せたい庭の四季
露天風呂　枯葉に迷い問うてみる
寒椿在りし日の母連れて来る
信頼が崩れ心に雲おおう

兵庫県　徳平毬子

兵庫県　岩本美緒子

付録という老いとて芯は持っている
石の上三年座りまだ序口
間口広げ病気などする暇がない
鬱消えたらしい指示する左脳

兵庫県　山本泰子

のんびりの決心他人につぶされる
元気よい顔へ世話役ついてくる
球根の芽吹き元気に春を待つ
黙秘権使って返事のばしとく

河内長野市　水谷正子

誇り捨て立ち食いそばの旨い事
プライドは梅一輪に負けている
孫の職決まって桜美しい
突然の客に羊羹残しとく

河内長野市　木太久正一

昼食を抜いて今日から腹六分
八百円医療の行方不透明
ものつくり大学なんぞ知らなんだ
ストーカー証券保険攻めてくる

河内長野市　柏本靖子

伝統の家紋支えた細い腕
したたかに生きて女の朝の紅
質素だが道に外れぬ暮し振り
迷惑はかけぬと決めて円く住む

吹田市　木下敏子

よく食べてよくねむってる肝っ玉
底冷えのポストに温い手紙の絵
花時計 素敵な友を待っている
つまずいた時からジャンプした踵

吹田市　木村無禄

煩悩へ魔性ささやく春の宵
腰痛を撫でて春待つ渋いお茶
亡き友はあの満天の星の中
墓掃除いずれ私が主となる

吹田市　後藤志津香

福耳のホクロも聞いて新世紀
パソコンに皺の指まで連れられる
指一本詰めても困る役がある
パンと米 仲よく食べて暮らしてる

吹田市　太田昭

年金と墓の話のクラス会
妻連れて自分の墓に会いに行く
襟立てて寒さいっしょに包み込む
切れ者も修羅をくぐって丸くなり

吹田市　早川棲世

新聞の通りに怒る日の始め
平和説くそのため君は死ねるのか
ご先祖は猿だが街の隅へ越し
毎晩を飲み千円の本高し

春の陽がじっとさせない庭いじり
人の目を気にせぬ母の若づくり
早口になればとび出す国なまり
梅干しの出番は母のにぎり飯

大阪市　津守　なぎさ

指十本それぞれ個性もつ宝
引き潮へ夢を満たして生きている
裏切りは時効にしようもう余生
運不運選ばれて石光り出す

大阪市　小泉　ひさ乃

人様に上げる涙はたっぷりと
花だけは小さい頃から白が好き
ひとときを無にしてくれた茜雲
可愛い鬼を一匹大事に飼っている

大阪市　亀井　円女

美しく老いるなどとは夢の夢
神様は我慢がまんと言っており
神様に届かぬ絵馬もたんと出来
口も手も半人前で生かされる

大阪市　榎本　日の出

農業フェアなにわ育ちは遠慮がち
人嫌いけれども拾う処世術
男性にセクハラと言う日がいつか
温室で菜の花春をだまされる

大阪市　星野　きらり

美しい過去には愛を鏤める
水温む命を包む至福感
口下手の言葉継ぎ足す妻がいる
三寒四温春の序曲と位置付ける

大阪市　三浦　千津子

福引きの一等賞は前の人
人支え踏まれて耐える足の裏
良心をアミ棚に上げ席を取る
寝ることが自慢の妻が不眠症

大阪市　岩崎　公誠

おしゃれしているのになんかダサイ人
物忘れ茗荷のせいにされている
憧れの人の前では食べぬ蟹
うっかりと忘れたふりで和を保つ

大阪市　大川　道子

親の手の温もりやっと感じ取り
ロボットがペットになった新世紀
我がままを許してしまう親のエゴ
春雨に梅の蕾もふくらんで

堺市　斎藤　さくら

毎日を笑顔で古希が見えかくれ
ひび割れもあって足並み揃い出し
スニーカー履くとしゃきっと出る元気
勢揃い袴のひもが弛んでる

堺市　喜多　美波

故郷の風はミルクの和らかさ
鍋焼きに添えられて来る風邪薬
コロコロと笑う女に気が動く
退屈で猫と話をしてしまう

堺市　和田つづや

障害を克服やっと手に免許
人として無頼の徒にもある礼儀
妹逝く心ポッカリ虚脱感
専門の分野生かせぬ不況風

羽曳野市　山本たけし

手をつなぎそれぞれ携帯かけている
メカ通の嫁にレンジの舵まかせ
男結びすっかり忘れた女たち
定年の隣も盆栽党らしい

高槻市　執行稲子

笹舟に大海までと言い聞かせ
山盛りの特価の野菜不服そう
孫をもつ温もり貰う話聞く
ゆとりある暮らしのはずが今は夢

池田市　多田契子

子育ても料理にもいる匙加減
カーナビに引かれ景観見ずじまい
沈丁の香り惜しんで瓶に入れ
想い出をそっと見てますセピア色

東大阪市　笠井欣子

ゴミ捨てに行ける幸せ感謝する
心にもないことすぐに出る不思議
ストレスがふっ飛ぶような披講聞く
おかげさま貸し借りもなく金も無い

高槻市　西谷治三郎

地球発やがて日帰り宇宙旅
ありったけの知恵傾けて生きている
腹の底割ればあなたと同じ色
雑魚の目にうっかりミスが多過ぎる

高槻市　乙倉武史

新世紀すべて一からやりなおし
新しさ追うより個性磨きます
太陽もマスクをしてる寒のうち
まっ白のマスクが増える淀屋橋

枚方市　安達忠央

大臣も順番らしい燕尾服
エジプト展古代の王の何想う
順番が来れば迷わず逝くつもり
今更に恋の詩など気恥かし

大阪府　前田忠子

ふさがりし心に椿誘い水
家に居て全国名湯入浴剤
気分よく青空仰ぐ今日も無事
追憶の青春いまだ地味な色

大阪府　野田栄呼

味噌汁で料理上手とほめられる
自販機に礼を言わせて他社を抜く
家事手抜きして役につくボランティア

横浜市　福田由美子

立ってみて座ってみても神経痛
自然保護　自己満足の再生紙
雪掻きの音に炬燵が落ち着かず

横浜市　金森徳三

蕗のとう雪分け春をたしかめる
ノラよりも平凡がいい女房殿
終の家　山から山へ陽はめぐる

横浜市　布山嘉信

啓蟄だ株もむずむず動き出せ
やがて来る老後もあんたよろしくね
年金を持ってるからと生かされて

横浜市　吉田裕峰

野仏に鏡餅ある里の春
賽銭もうちは硬貨で願い事
身内からでない忠告は耳を貸し

横浜市　長島亜希子

ストーカーいびつの愛を捏ねている
ふさふさの髪でもしやと疑われ
里帰りでんと座って客となり

横浜市　北沢街湖

毎年に集まろ意見一致する
初雪にほくろだらけの雪だるま
私を守る東京五輪の玉ひとつ

横浜市　豊田羊子

万歩計ぶらり散歩の供もする
長い旅郵便受けが音を上げる
彼と我双曲線の行き違い

東京都　井上つよし

リストラはないが生活切り詰める
捨て石に焼け石に水鈍化する
躍進の年を迎える勇み足

千葉県　大川晩翠

味噌汁の湯気広がって朝動く
一言の注意がもとで無言の背
衣食住豊かになって壁ができ

静岡市　増田扶美

シルバーシート　ミニのあなたは似合わない
詫び言が多過ぎ余命短過ぎ
宇宙旅行あの世からなら近いはず

尾張旭市　三浦きぬ

使う気はないけど介護保険料
ハンドルがこわくなる記事今日も読む
年金で生きれるうちがしあわせさ

新潟県　高野不二

豪雪をジイッと耐えてる春の花　秋田県　湊　修水

宵越しの金あり余る置きごたつ
ほどほどに惚けるも老いのたのしみか　秋田県　秋野　宏

今世紀きっとにわとり飛ぶだろう
刑罰のように干鱈ぶら下がり
みの虫も生きるためにも風の唄　青森県　福士トキ

天も地も息まで凍る雪の闇
修身を知らぬ世代の成人式
七十路まで生きて人生裏表　日高市　根岸方子

無農薬　虫食いなどは気にかけず
ダイエットこんなに皺が増えるとは
亡母を超え今　青春をまっしぐら　野田市　那賀島雅子

孤独にも馴れてゆっくり飴が溶け
一杯のコーヒー　ストレス置いてくる
茶柱が二本運勢信じたい　安来市　原　煩悩児

いいことの予感に弾むオクターブ
水鳥も善人と見る僕である
自己主張マナー忘れた新成人

人間の倫理問われる新世紀
ロボットに望みと不安二十一世紀
孫のため妻宅配を追っかける　八幡市　粂野和俊

遺憾です言った口から舌を出す
節分に鬼には鬼の訳がある
見習いのミスで幕引き許されぬ　宇部市　藤本一規

リストラも神の悪戯かも知れず
向かい風行かねばならぬ用があり
ひと区切りついたところでお茶にする　宇部市　中田忠夫

帰省子の朝シャン脱皮で安堵する
庭雀　生ごめよりも飯を採り
鼻口にも鬼がおったか豆当る　串間市　山内　滝

きっかけを掴むチャンスが待っている
なおさねばならぬと決めた独り言
向き合えば鏡の中も一人だけ　唐津市　岩崎　實

元町を歩く立春あたたかい
腹七分守る長生きせにゃならん
ベルリンを伯林と書く知りました　神戸市　船津とみ子

篠山市　谷田　多美子

ガソリンは夫が入れるときめている
好い婆を演じたくなる年金日
体形を隠す術なく老年期

姫路市　北条　てる代

犬にまで愛想振りまく下心
もつれ糸解けて会話も弾み出す
雑魚ばかり釣って大物取り逃がし

兵庫県　黒崎　美紗子

岩風呂の湯気の向こうで丸サイン
カラオケで心洗濯よい気分
長い道みなと歩けば歌も出る

京都市　清水　英旺

気だてよし息子の嫁になる予感
ニュース見て聞いて憂国の念深し
春立って今が寒さの底とする

橿原市　西本　保夫

現職も安心などはしておれぬ
連呼した名前がさっと通りすぎ
候補者の歩く姿を連呼する

和歌山市　吉田　比佐子

鳥のため柿の実ひとつ木に残す
見えないと覗きたくなり背伸びする
赤ちゃんに乳房含ます満ちた顔

和歌山市　今　一歩

毎日が羽搏いているつもり靴
新聞記事読んで羽搏く老眼鏡
草枕　飛びはねていた幼い日

和歌山市　前岡　健三郎

作文の紙は立派な再生紙
風雪に年金暮らし耐えている
泣き砂と蟹で賑わう日本海

和歌山市　根田　美子

老い先の話淋しい車椅子
短気者　何故か灰皿前にある
久しぶりちょっと酔ったか老夫婦

和歌山市　芝　あつむ

合わしてるあなた一枚役が上
身のほどを恥じらいながら紅生姜
常連にママも張り合う減らず口

海南市　堂上　泰子

聞かれてもいぬのに本音口をつく
まだ青い息子の恋に母迷路
蝋梅の花を透かして見るロマン

和歌山県　森下　順子

大家族我慢する芽がよく育つ
仏さま聴いていますかくらしの音
いくじなしいつも易しい方選ぶ

ふる里の雑踏若い気を貰う
エレベーター皆おし黙り目をそらす
春の陽を編み込み母に着てもらう

鳥取市　横田春名

孫見せるだけの孝行待たされる
新キャベツ　サクサク春の音で切る
記念日の指輪が愛と共に失せ

鳥取市　有沢せつ子

セーターになって添いたいあの方と
休肝日　飲みたい酒が隠れんぼ
世紀明けピエロで生る初笑い

鳥取市　河田のり代

傷つかず脅かしもせず芋のつる
友と旅　薬の時間皆同じ
寒波止む予報に一息背を伸ばし

鳥取市　宮脇道子

心の目我が子の兆し見のがさぬ
煎り豆を箸でつまんでボケ防止
留守ですと留守電みなに言い触らす

鳥取市　田中憧子

もう一杯コーヒー入れて鬱をのむ
花活ける明日はもっと華やかに
雪の花汚されながら地になじむ

鳥取市　山宮愛恵

抜かれた歯　二度と戻らぬ生き別れ
出しぬけに顔出す乱れ髪をして
音痴でも時には大声歌いたい

鳥取市　西尾敬之介

初釜に母娘晴れ着に楚々といく
せつせつと編めば心は春の色
踏みしめつ命燃やした日が光る

鳥取市　谷岡清子

すんなりと騙してくれるコマーシャル
旅土産　夫に地酒まず確保
老人会手足動くと役が付く

米子市　小塩智加恵

病弱で日々停滞が有難い
ありがとう言葉で消えた長い道
何も無い仏壇だけは家宝です

倉吉市　西脇日出子

足るでなく足らぬでもなき日を暮す
振子時計ゆっくり揺れて明日が来る
自画自賛してストレスを解消し

倉吉市　牧田みち子

無理のないルールで張りのある余生
耳を見ていると人間らしくない
円満な家庭に強い妻が要る

鳥取県　河本照子

温かい便器に座して妥協する
転げ出てどんぐり高い空を見る
母さんの足に大根負けている

鳥取県　鹿児島　節子

大手術運良く命　地球上
大地球 静か心で葛湯呑む
地球上進化の愛児呱々の声

鳥取県　岡　嶋　金　子

健康の知識豊富と医者の言い
デジタルの体重計はシビアです
精一杯生きて終わりの時のばす

松江市　松　浦　登志子

新世紀蛇は冬眠しておれぬ
蛇年に脱皮してゆく十七歳
妻元気輝いている台所

松江市　小　川　注　湖

降り止まぬ日暮れに浮かぶ雪女
不在詫び仏に告げて子と暮らし
揃う顔幸せに酔う松の内

出雲市　加　藤　スズコ

とぼとぼと轍をぬって歩く人
新築の家に居ながら落ちつかぬ
もの好きと言われてもなおやりつくす

出雲市　栂　ミツエ

行く度に変りないかと医師が聞く
川柳詠むペンは死ぬまで放さない
代わるがわる近くに住む子顔を見せ

益田市　岡　田　たけを

働くより手持無沙汰はなお辛い
出来事を報告してます南無阿弥陀仏
可愛いね土の中から蕗の薹

島根県　松　本　聖　子

錆びてきた釘にしっかり支えられ
店頭へ温室育ちの花の列
つまずいておっとどっこいセーフです

島根県　菅　田　かつ子

中村の美学ふり切るバッティング
念のため遺憾の意味を辞書でひく
知りません遺憾に思う辞任する

岡山市　大　森　純　子

無職とは辛く悲しいものであり
治らない理由は歳のせいにされ
どん底で笑い合ってるコップ酒

岡山市　清　水　金太郎

孫叱る声はたっぷり砂糖漬
歩くこと日課に病後あけくれる
関節のきしみに注油　古希をとぶ

倉敷市　撰　喜　子

今年こそやる気を載せた年女
眠れる森も春の息吹を溜めている
花の道駆け抜けた駅今日降りる

岡山県　土居　ひでの

判決のように病名告知され
自分史のこの辺ちょっと早送り
立ち直る死にたい鬱の薄化粧

竹原市　福島　万年

不況風外にミンクの猫柳
困ったな聞いて下さい仏様
便り書く思い出辿る花菜

今治市　野村　清美

千年の未来へ残す森づくり
温かい光を放つ常夜灯
絵のような花が咲かない種袋

愛媛県　安野　案山子

冬は夏 夏は冬恋う八十路の身
軒借ればなさけを貰う寒の雨
立てかけた袋に弛む琴の糸

愛媛県　宮本　末子

世界一伸びた寿命を悩む国
バァチャンがまだ白寿と言う若さ
腹八分の仕事に肥満して困る

香川県　松村　輝夫

アンカーの闘志へ風も加勢する
価値観の違い気楽な落ちこぼれ
干し草の匂いに残る童唄

奈良市　乾　春雄

不景気でだんだん長くなる訓示
寒い朝僕のエンジンかからない
繰り返し掘って予算を使い切り

奈良県　古手川　光

車間距離共に守って金婚譜
袈裟がけの父より怖い母の針
恥かしくて嬉し夫の介護の手

尼崎市　尾宮　弘治

電線を楽譜に春の風歌う
華やかで散らぬ造花に寄らぬ蝶
塞翁が馬を信じて福を待つ

尼崎市　桑原　東園

申告書扶養の犬に欄がない
握力は妻に任せるビンの蓋
平均寿命　目安の一つもうそこに

尼崎市　軸丸　勝巳

永田町掘ると必ず出る煙
手を透かし少年の日の影を追う
半眼の仏に祈る暗き静寂

尼崎市　松下　比ろ志

風花の中で解け出す鬱ひとつ　伊丹市　延寿庵　野　靄

それぞれの壁と答えを持って生き
ロボット犬虚構の溝へ棲みに来る　宝塚市　飯　西　ミサヲ

新世紀何もいらない若さだけ
手のひらにつかんだ幸は離すまい
鬼くんよ遊びにおいで豆あげる　川西市　井　本　清　山

散歩して来た老犬の足を揉む
右向けば右へと靡くおべんちゃら
あの世での生活プラン忘れてる　姫路市　服　部　一　典

妻が逝く所得が減って税が増え
老いひとり隣を真似て布団干す
カラオケへ美人のママで不整脈　大阪市　中　村　叡　子

灯油買うメロディー車来る時刻
森総理　貴君呑気でいいですね
アメリカの羽振りのよさも影がさす　大阪市　中　川　千都子

大根は飴色に煮え外は雪
風邪ひきの掠れた声を気に入られ
言い訳を省けば中身ない弁明

白い闇に冷めた方程式がある
朱を少し添えて米寿の春の絵図
ほころびを隠す正座に意地がある　大阪市　一　本　勇　太

すき間風何処からか入りああ寒し
乗り物で携帯駄目よ顔にらむ
甘い物大好物でやめられぬ　大阪市　内　海　綾　乃

大正を脱皮ちょっとやそこらでは
あの頃は鬼も探しにきてくれた
散髪のたびに薄うくなりました　大阪市　尾　崎　黄　紅

Gパンの破れファッションとみる度量
年とれば風邪の神にもこけにされ
曲がらない膝が正座の夢を見せ　大阪市　伊　藤　博　仁

熔接がとけて美しい道になる
森林浴たっぷり受けて風邪を引く
街角のそこかしこから春の風　大阪市　榎　本　舞　夢

真珠湾六十年目緊張す
リーゼントスタイル今や写真だけ
マスクした人に一礼されたけど　大阪市　中　村　忠　敬

大阪市　平井露芳

お茶漬で御節に飽いた胃を洗い
フリースが物価下げたと国が言い
ロボットにアイラブユーと言われそう

大阪市　中井正秀

この身体錆びつかさない死ぬまでは
丁寧にご老人とは痛みいる
意地っぱり金の力を借りている

豊中市　みきわきみ

資産税が街のかたちを変えてゆく
一度しか来ないこの世だ今少し
呆けぐあい試すか主治医話しかけ

吹田市　二宮栄子

ネックレス見せた積りを娘に取られ
鯖読んだ年を鏡にしゃべられる
なまぬるい態度仏に叱られる

吹田市　須磨活恵

目に見えぬところで許し合う絆
透明がほしくてごしごし窓を拭く
身の中でさざめくものありまだおんな

高槻市　生田義一

何取りに来たのか忘れまた戻り
酔った眼に車中美人の顔ばかり
騒々し話題の絶えぬ永田町

高槻市　大崎侑子

明日こそと繰り返しつつ古希を過ぎ
無為の夜はせめて日記に身を入れて
老い二人ひそかな声で福は内

高槻市　左右田泰雄

無い知恵をしぼるとひびく偏頭痛
踊り場で一息いれた重い杖
迷い道答えさがしに引き返す

枚方市　大昇隆広

不況も良し村に戻った若い汗
初めて子に叱られた日の旨い酒
手酌の度　弱音を聞いてくれる酒

枚方市　二宮紫鳳

初孫の知らせ聞いてる空の青
年の数食べて福豆胃にもたれ
肩書きが肩に重そな午前様

寝屋川市　岡本勲

笠竹で私の未来見えますか
よい話ありそな予感春日和
春風が心を洗う六十路なか

八尾市　與田明

神よ仏よ願いはひとつ安楽死
慎重にやって失敗するつらさ
夜の駅疲れた群がおりてくる

ウエストはバストに負けずよく育ち　八尾市　中島春江

電報のような電話が息子から
若夫婦コタツの猫もそっと出る　八尾市　田中トシエ

百歳に初恋の年聞いて見る
手をつなぐそんなムードの朧月
モーツァルト聞かす苺の熟れ具合　八尾市　山本宏至

挨拶が長くて鍋が煮えつまる
理屈ではやりこめられぬ妻の耳
年重ね妻の姿に母を見る　八尾市　高橋明子

何時の日も浜の真砂や袖の下
税金を湯水の如く使い過ぎ
この歳になれば次々淋しなる　大東市　井上すみれ

我が友よいつも内気で頑固者
納得は出来ず握手をしています
今だから言えるオノロケ聞いている　藤井寺市　若松雅枝

どん底で見つけた明かり大切に
仕合せな鼻歌響く仕舞い風呂
歌舞伎座へストレスみんな置いてくる　東大阪市　今岡貞人

鶴掛軸名残をとどめ睦月去る
核兵器失せゆく日々を鶴首する
健康の秘訣笑いと旬を食う　泉佐野市　大工静子

後を継ぎ大峯登山先達を
見も知らぬ紳士の無心断った
故里はもう絶えわれは一人なり　泉佐野市　稲葉洋

赤信号みんなで渡る永田町
船長の失言癖に迷う舵
ドリンクでママの手抜きのメニュー埋め　泉佐野市　備後三代子

親子だとわかる二人の道具立て
茶髪にも慣れ色艶を見る余裕
気にかかり覗く夫の長い風呂　羽曳野市　森田四三郎

慇懃にニヤリ舌出し切る電話
スマイルの奥でキラリと光る棘
はずむ賽銭福は買うのか貰うのか　羽曳野市　永田章司

チャンスの芽摘みとっている年の功
父の愛背中で見せる戦中派
午前様自責の念で忍び足

気にもせず転び上手と自慢する
新品の包丁迷いふっ切れる
寒梅に一句一姿の佇まい

柏原市　永浜加津子

一匙で女房の味と母の味
孝行のつもりで母といちご狩り
厚化粧の下から見える鬼の面

富田林市　山原昭水

ありがとう靴をはかしただけなのに
十年も飼えば忘れること出来ず
週刊誌ダブって買うたとは言えず

河内長野市　杉谷カズエ

化粧してストレスちょっと脇に置く
ひとり居はほんに気楽でまた寂し
足腰の元気な友にちょっと妬け

河内長野市　印藤智子

友の訃を聞いたひと夜の走馬灯
励ましたつもりが友を責めていた
骨拾う顔の火照りは忘れない

堺市　梶本哲平

共稼ぎ寝だめするぞと日曜日
自転車のサドルを下げた老いひとつ
心機一転コラム欄から得た勇気

堺市　矢倉五月

飴ばかりしゃぶらせ甘い子が育つ
最近はエンスト起こしがちな脳
ためらいがあって一歩が踏み出せぬ

堺市　村上玄也

出産の見舞いに応え大欠伸
この名前お腹の中で聞いてたよ
病院の暮しよろこぶ母独り

堺市　大橋錦

妻が酌その手にのらぬよう注意
長い列　女知ってる特売日
惜しみなく景色遮るハイウエー

堺市　荻野像山

車間距離あけて事故などない走り
古希過ぎていろいろあると言う人生
青墨を溶く老残の白い皿（水墨画）

岸和田市　亀井皎月

プライドが名刺時代を抜けられぬ
いくら臍曲りでも蛇には負ける
散歩道世間の様を見て飽きず

和泉市　小坂凡英

身も凍る朝の静けさ渡月橋
紅梅のほのかな薫り誘われて
切ろうにも金婚式の腐れ縁

大阪府　藤井郁代

福の神待って居ますよ豆煎って　大阪府　東　文江

我が口で吐いた言葉をすぐ忘れ
家族愛みんなでつつく祝い鯛　大阪府　望月遊美

国頭謝罪どころか無反省
責任転嫁右へ習えとええ見本
神詐称 ニホン木の国紙の国　大阪府　小栢こずえ

死ぬるより生きることにはなれている
降る雪もちらほらなればよい景色
花一輪 心浮き立つ春みつけ　大阪府　桑田ゆきの

政界も地震のように揺れている
パソコンの時代となって出る吐息
甘い夢見過ぎ人生から回り　八尾市　鷲見章

琴の音遠くに聞きてお正月
部屋に灯がともり夜食近くなる

水煙抄選

五句高からず四句三句低からず

板尾岳人

第12回　時の川柳交歓川柳大会

日　時　5月6日（日）10時半開場　正午締切
会　場　兵庫県民会館9Fホール
会　費　2000円（記念品・発表誌呈）
懇親宴　5000円（当日受付60名）（昼食は各自お済ませ下さい）
兼　題（2句）「汚れる」和田恭子選・「辞書」大家風太選
「カード」田頭良子選・「錯覚」中林酔虎選
「送る」板尾岳人選・「真似」福島直球選
「読む」平山繁夫選
特別課題（1句）「尻尾」井床芦蘭選
特別課題の入選句に景品呈、欠席投句拝辞
講　演「柳歴五十年の中で」　小松原爽介
当日、平成12年度時の川柳作家賞ならびに第21回ときせん賞表彰

川柳会梨花　吟行会

日　時　13年4月21日(土)　10時開場　締切11時　欠席投句拝辞
会　場　鳥取県県民文化会館
会　費　4000円（昼食・お土産）
宿　泊（懇親会費を含む）10000円　レーク大樹
兼　題（2句）「阿」橘高薫風選・「道」濱野奇童選・「鶴」斎藤大雄選・「梨」久保田半蔵門選・「悪」奥山晴生選・「桜」夕　凪子選・「夢」松　彬選・「彩」辻　葉選・「豊か」小林由多香選・「筍」白根ふみ選・「地図」牧野芳光選・「友」大角幸代選・「湖」上田宣子選
連絡先　坂田和歌子　0857―23―3248
選者辻葉さんの題に変更がありました。御注意下さい。

秀句鑑賞

同人吟　奥田　みつ子

―3月号から

久しぶりの秀句鑑賞を仰せつかって、じっくりと川柳塔欄の句と対峙しましたが、今まで『川柳塔』誌で見たことのない「ノータリン」という言葉や、また、「馬鹿」「アホ」に何回か出合って面食らってしまいました。

大臣の玉虫色の長い舌

穴吹尚士

総理大臣をはじめとして、政治家は実に上手に話をする。決して言質をとられるようなことはなく、また、自分の意見であるようなないような…。それを「玉虫色の長い舌」とは言い得て妙。

朝刊が雪の匂いをつれて来る
水仙を活けて孤独を昇華する

鷲見正子

今年は暖冬の予報と異なり、雪の多い年となった。朝刊が雪の匂いをつれて来るというのは、雪の少ない地方の人にも何となく感じとれる。また、後の句の「孤独を昇華する」という巧みな表現が嬉しい。

老いてなお生きる下絵に朱を流す

高橋岳水

「老いてなお」どころではない、句全体に漲っている力を感じる。特に「下絵に朱を流す」という言葉の凄さ。

冗談で投げると石はよく当たる

和泉あかり

真剣に的をねらって投げているのに、はずれてばかり、冗談でヒョイと投げると見事命中。石に限らず、世の中のこと、案外そんなものかも知れない。

娘の気持ましてや孫の心理など

藤田泰子

母娘は大抵、二十歳以上の差がある。いくら親子といっても感覚も考え方も、隔たりがあって当り前。その上、孫の心理まで分かるわけがない。「ましてや」がよく効いている。

今も良い昔も恋し老いの春

菊池トミヱ

老いて昔を恋しがるのはよくあるが、この句は「今も良い」と現在をも肯定している。

正直も良いけど少し生きづらい

牛尾緑良

何でそうシャカリキになるペンの先

宮尾みのり

そう、正直は確かに生きづらいと思う。辛いなァと思いつつ、また何時の間にか正直になってしまう。そして、正直な人は一途になりやすい。「シャカリキ」の語で一人の人物像を見事に浮かび上がらせている。緑良さんの後の一句のように「転んでもいいさ　もう一度起きる」と余裕を持てたらいいが…。

体温のある言葉には嘘がない

夏目健一

自己弁護寒い言葉を重ねだす

川上大輪

「体温のある言葉」と嘘、自己弁護と「寒い言葉」。言葉の温度差に気付かされた。真実を話す時には、自然にその人の温もりが伝わってくる。それに反して、自己弁護の言葉のなんと虚しく寒々とひびくことか。

たった一つ電池がなくて利器止まる

富田蘭水

IT革命とか、便利でオールマイティーのように言われている。しかし、一つトラブルが起ると全面ストップ。家庭でも電池一つで文明の利器が使えないということに…。

食べ終えて鴉スキップしているよ

福士慕情

かうかうと白鳥鳴けば雪が降る

西谷大吾

小鳥来る山の言葉を嘴に

長谷川春蘭

鳥三句。ゴミ置き場を荒して、鴉は満足そうに本当にスキップをしているようだ。白鳥の鳴き声を聞いたことはないが、さもありなんという気にもなる。また、小鳥の表情の可愛さ。それぞれの鳥を的確な言葉で、ユーモラスに、句品高く、愛らしく詠んでいる。

小判に変る木の葉一枚ポケットに

舟渡杏花

くやしいが札が優しい顔にする

林はつ絵

杏花さんの句、どんな「木の葉一枚」なのか想像をかきたてる。はつ絵さんの「くやしいが」に実感がこもる。確かに札は人を優しい顔にする魔力があるから…。姉妹の小判・札とお金にまつわる句を並べてみた。

初春へ家族揃うた窓明かり

小林周信

何でもないお正月の句であるが、入院して命の瀬戸際に立たされた人の感慨がにじむ。家族が欠けずに揃っていることの有難さ。

聞いてきた話へちょっとシオコショウ

早川盛夫

「シオコショウ」が佳い味をつけ、ほほえましい一句に仕立てられている。楽しい話、または一味違うピリッとした話題で、その場の雰囲気を明るく盛り上げたことだろう。

雨になり隣も静か老夫婦

宮崎シマ子

平素から親しくしているお隣同士。晴れた日にはお互い庭の手入れなどしながら話が弾むことも多いが、雨の日はひっそりと静まり返って、少し物足りない佇まいである。

雨の雫落ちる真際が美しい

川端一歩

「真際の美しさ」に気がつく目もまた美しい。何事にも好奇心を持っていればこその一句。じっと目を凝らしている横顔が浮かぶ。

凜として一本の枯葦である

風の音人が小粒になってゆく

原みさを

この二句の前にも「一匹として啓蟄の空仰ぐ」があり、一本の枯葦となったり、一匹の虫になったりしながら、あくまでも凜として空を仰いでいる。それでもなお、風の音に人が小粒になってゆくと自省している。いずれの句も格調高く人間を謡っている。

良いことがあったね他は忘れよう

後藤早智

どんな良いことがあったのだろう。良いことが一つでもあればいい。それだけで声も顔も明るくなるのだから…。くよくよと何時までも昨日の失敗にこだわることはない。忘れ上手になることも大切。

無駄少し削ると寒い風に会う

竹治ちかし

無駄の効用とか、無用の用とか、傍目には無駄に見えていることでも、簡単に削るとあちらこちらに差障りが出てくることになる。「寒い風」がうまい。

滝のごとき男を男恋しがる

三宅不朽

「滝のごとき男」にいろいろなイメージが広がる。女性もまた、そんな男に憧れると思うが、この句は男性が恋しがるのだから、なおさらインパクトが強い。

沈む陽よ明日があるから美しい

山門タミ

観る人によって、また、日によって夕陽は物悲しくもなれば美しくもなる。そして希望も与えてくれる。「明日がある」が心強い。僅か十七音字の川柳、一語一語を大切にしたいと、自戒をこめて改めて思う。

特集

ご当地桜自慢

桜と私

江口　度

桜には山桜、ソメイヨシノ、サト桜、八重桜、垂れ桜等あるが、一番好きなのはソメイヨシノです。青葉がなくて白一色の満開に心を奪われます。

特に花見は寝転んで上を見て満開の間から青空が見え、風もないのにひらひらと一枚二枚、花びらが散っている時が最高と思う。

日本中には花の名所が多いが、遠出をやめて近間ですましています。

眼が覚めて青空であれば、何はさておいても弁当を買って出かける。場所は

一、大阪城の花見

休日の人の混んでる時に行く。わいわい騒いでいるのを見ると、人が混んで初詣での実感が湧くようで、今年も花見を済ましたなと思えるから。

二、石清水八幡宮の花見

下でさば寿司を買いケーブルカーで上り、椅子で仰向けに寝転び、満開の花から青空を覗ける静かな花見の出来る所。

三、太間の花見

京阪寝屋川駅から太間公園行きのバスに乗り太間口下車、点野までの川沿い。

退職前の会社と故宮尾あいきさんの家が近かったので、あいきさんとよく行った思い出の場所。樹齢百年位の老樹が両岸に並び、肩の辺りまで咲き降りていて鼻唄の一つもひとりでに口を出る、一度行ったら病みつきになる所と思います。

右の三ヶ所は必ず行く。

近頃はいつも一人で、携帯ラジオをぶら下げ、春の選抜高校野球の実況を聞きながらの花見です。

あいきさんと花見をした頃の句。

桜吹雪見ている隣の奥さんと　　度

白鳥町桜の名所案内

川崎　ひかり

西に栗林公園、東に徳島眉山公園の桜の名所を控え、丁度その真ん中あたりに位置するのが白鳥町です。海と山温暖な住みよい土地に恵まれ、山桜からボタン桜までの期間、桜さくら、サクラ、のうれしい毎日が続きます。その中で、町民に愛され親しまれ、また誇りとする町の桜の名所を紹介します。

まず「温泉や座り羅漢に寝る羅漢」故西尾栞先生の句碑のある白鳥温泉。ライトアップされた桜を湯に浸りながら、温泉三昧、桜三昧と洒落るのもまた乙なものです。栞先生のお人柄のように身心共にほっこりほっこり幸せな気分になれる事保証致します。

次に「島一つ買うて暮せば涼しかろ」薫風先生の句碑が、先生の立ち姿の如くすっくと建つ中央公園。まだ若桜ですが、瀬戸内海の絶景をバックに、ひとひら、ふたひら、句碑

に散りかかる桜を見ながら、チビリチビリと飲むなんて川柳人として最高の贅沢な花見かと思います。

最後は、阿讃山脈から瀬戸内海まで流れる湊川の上流にある五名ダム、花見時にはダムの両岸にロープを張り、三百余匹の鯉のぼりが春風に泳ぎ、その下両岸の千本桜の桜花爛漫の様は勇壮さと優雅さと両々相俟って、絵巻物を見るようです。夜ともなるとボンボリに灯が入り、老若男女ひとつになって、飲んで唄っての宴がくり広げられます。

白鳥町はどこにでも桜が植えられています。桜の季節は、どの道を通っても桜と出合えます。皆さまも両先生の句碑と桜を見に是非白鳥へおいでなさんせ。

弘前のさくら

櫻庭　順風

お城と橋と桜と言えばなにやら三題噺めきますが、私の故郷にはそれがあります。

皆さんは弘前城と朱塗りの下乗橋、絢爛と彩りを添える桜の写真やポスターを目にして旅情を誘われたことがありませんか。

弘前公園の桜は津軽藩時代一七一五年に京都から二十五本植栽したのに始まり、明治十五年、明治三十四年～三十六年に各々ソメイヨシノを一千本、大正三年にシダレザクラ、昭和三十一年にソメイヨシノ千三百本、昭和四十年にヤエベニシダレを植栽し、その他を含めて現在五千本と言われています。

明治十五年植栽のソメイヨシノは日本最古で弘前市民の誇りであります。

大正七年から「観桜会」昭和三十六年から「弘前さくらまつり」として、四月下旬から五月上旬に開催され楽しまれています。

桜の寿命は人間と似て戦前は五十年、戦後は七十～八十年。明治十五年植栽の枯死寸前の桜を見事に再生させましたが、管理技術が進歩確立したからです。弘前の桜が日本一と言うのは、この管理技術で公認されています。

ソメイヨシノの日本一の古木、日本一の大径木、幹周五一五センチ。幹周三メートル以上のもの五十本も健在です。シダレザクラの樹形が横にばかり広がっている、花弁が五枚から八枚ついて華麗なのが自慢です。

平成十二年五月六日の東北大会では森中恵美子先生をお招きして、弘前城の絢爛豪華な夜桜を楽しみました。

姓に櫻がついているせいか私はことのほか桜に愛着があります。皆さんもどうぞ弘前のさくらへお出掛けください。

堂々とお花が渡る下乗橋　順風
夜桜の含羞月の沈むまで　〃

伽藍とサクラ

中原　比呂志

奈良には古き仏とサクラが歴史を問い、語りかけてくれる。私の住む町に法隆寺があるが、ここにはサクラの樹があまりなくマツである。これは聖徳太子が幼少のころ、父用明天皇がウメとマツのどちらが好きかと問われた折に太子は、マツは年中緑の葉を繁らせているので好きだと答えられたという伝えによるものである。

芭蕉は壮年から晩年にかけて五度、奈良を訪れて九句詠んでいる。

奈良七重七堂伽藍八重ざくら
（東大寺二月堂に籠りて）
水とりや氷の僧の沓（くつ）の音
（西の京・唐招提寺の鑑真和上像を拝して）
若葉して御目の雫ぬぐはばや

ところで奈良七重…はどの寺を詠んだのであろうか。七堂伽藍とは、金堂、塔、講堂、経堂、鐘楼、僧坊、食堂（じきどう）の七つをさす。この体裁を完全に残しているのは法隆寺だけであり、世界文化遺産にも指定されるゆえんでもある。他寺院は残念ながら兵火や災害で何かが欠落している。あの東大寺でさえ大仏様のおられるところが金堂で、北に講堂、食堂。南に塔が建っていたが、今は遺構のみである。芭蕉はかつての壮厳で巨大な東大寺の栄光を回想して詠んだのであろう。

古都奈良の県の花はもちろん「八重ザクラ」である。他都市では、東京＝ソメイヨシノ、京都府＝シダレザクラ、山梨県＝フジザクラ、埼玉県＝サクラソウを県花としている。

ワインに酔う桜

藤井　明朗

人生しみじみ喜怒哀楽を追うて行く。〝朗報しきり〟の言葉は長らく聞かない。いい事の少ないこの頃の世相である。

失礼であるが、人間の心が冷淡になったような気がする。自分の幸せのみを考え、親・子の区別がつかなくなったのか、不思議でならない。

戦後教育の個人、自由主義の強調のせいかあまりにもひどい変りようである。こんな愚痴を言っている間も、自然は一秒一刻変化してゆく。待望久しい春の声である。

凜とした観梅の季節からやがて桜花の季節へ。桜の風情はひとときの不況の世情を忘れさせ、老若男女を陶酔させ、夢幻の境地に誘われる。西から東へ桜のルツボが展開して、日本列島を桃色に包む春！桜!!病身も忘れ、しばしひとときの桜に心預けたいもの。

毎年桜の季節を心待ちにして、観桜会を開き川柳の縁を大切にしている。ワインや酒の匂いに桜も酔うて、人間模様を堪能しながらさようならをする花吹雪―。まだ余韻に浸っている。

一句一句生まれてくる桜……。

けんらんと桜は人を退らせる　水客
山脈が呼吸ととのえ春の肌　(故)緑之助
老樹なお春の姿勢を崩さない　千代
百選の花と地酒に酔うて春　叮紅
散るさくらやがての岸の花筏　(故)荒介
わが胸に桜舞わせたのは誰方　瑞枝
さくら咲く花より白き蝶の夢　早苗
さくらさくら語り終った色で散る　青湖
さくら散るああ輪廻転生思うとき　きみえ
新しい学生帽に散るさくら　紫香
宇野千代のさくら模様をあたためる　秀子
さくら満開木次五十周年祝う　れいじ
ほろ酔いの色に桜花の緋ぼんぼり　幸
さくら百選名所歴史のある木次　明朗
振り向けば苦労も花の五十年　晴子

—水煙抄

秀句鑑賞

—3月号から

山本三郎

肩の凝る愚痴に付き合う縄のれん

荒井広和

夕方、退社時になると一寸一杯と言うサラリーマンで何所の縄のれんの店も満員である。会社のこと上司のこと仕事のことと飲む程に酔う程に気炎をあげて、日頃のストレスを解消している。その内段々と愚痴となりだすと止まらない。愚痴を聞いている方はストレスとなり肩の凝る愚痴に付き合うサラリーマンの悲哀が滲み出ていて秀句だと思います。

生き甲斐をいつも支えてくれた妻

岩崎公誠

ありがとう妻よ私を此処まで支えてくれて感謝しているよと口に出して言えないのが男です。でも口に出して感謝の心を伝えたらどんなに奥様が喜ぶことでしょう。私も寝屋川市議会議員として六期いつも支えてくれている妻に感謝していますが口に出すのは未だです。

百までは生きると母は竹を踏む

田中笑子

今や長寿社会です。お母さんが毎日竹踏みの健康法の実践で百まで生きると頑張っている様子が微笑ましく目に浮かぶようです。昨年九月三十日厚生省発表では日本の百歳以上の人は一万三千三十六人で高齢社会到来です。

積み立てる介護ロボット買うお金

中澤伽羅

核家族化で少子高齢化の時代、子や孫も老後を見てくれるかどうか当てにならない。介護ロボットを買うお金を積み立てる侘しさよ。

平穏な暮しで今日も米を研ぐ

国米きくえ

今日も米を研ぐ、平穏で幸せな家庭生活がしのばれます。平穏な暮しが大切です。

長電話受話器に犬の吠える声

生田義一

いつまで長電話しているのだ、早く散歩に連れて行って下さいよと犬が痺れを切らして吠えているのが受話器から聞こえてきます。

なんとなく不安年金介護など

與田明

永田町は政争続きで政治不信です。年金や介護など老後の生活が保証されるのか、少子高齢化の時代を迎え何となく不安な日々です。

年金に感謝しながら膳かこむ
幸せだおでんと妻が待っている

鳥羽直市

年金に感謝の日々の生活と、おでんと妻が待ってくれている幸福を噛み締めている老後です。不安の思いをするのは感謝が足りないのです。感謝の生活は幸福を呼びこみます。

老眼に新芽が見える冬木立

多々納テル子

寒い寒いと思っていたが自然は確実に動いている。ふと気が付けば春を待ちかねたかのように冬木立に新芽がと驚く老眼の作者です。

自分史は未完まだまだ翔ぶつもり
天翔ける夢膨らますかたつむり

三浦強一

前句は自分史はまだまだ未完のままで翔ぶつもりと元気で前むきに生きる心意気が伝わって来ます。後句も天翔ける夢と、大きな夢に挑戦しようと夢膨らましているかたつむりの心意気。まだまだ元気いっぱいの作者です。

手品なら許しもするがひったくり

土屋起世子

ひったくりにあった人にしか解らない悔しさと腹立たしさ。それにしても手品の様な早業だったと感心しておれないこの頃です。今大阪府は全国一ひったくりが多いのです。

川柳太平記 (275)

川柳の群像

菊地炭吉

東野大八

菊地炭吉という名を書いても、知る人はあまりいない。しかし、彼はレッキとした川柳人であり、漫画家であったことは間違いない。

明治44年9月15日（つまり敬老の日）に生れただけに筆者より三歳年上、平成11年12月13日に老衰で死去したから享年88歳ということになる。本名菊地和一。

兵歴のことは詳しくは聞いていないが、なんでも満州独立守備隊で5年も兵役をつとめ、現地除隊後は撫順炭鉱の現場に就職。昭和20年3月一般の引揚者として帰国、どこかの会社で駐車場守衛として暫くは米飯の資を稼いでいたらしい。

「前文略―一昨年六月に脳出血で倒れ、一年半の入院生活でございましたが、呼びかけると少し反応する程度で、ついに言葉を交わすこともなく逝ってしまいました。九月十五日に満八十八歳の誕生日を迎えたのに、誠に残念でございました。元気な頃の父は、日々大八さんや奥原雨人さんのことや川柳の話をすることが何よりの楽しみな様子で、食事の時などはかならずそんな話をしました。

昔、父のことを書いて頂いた記事などをとり出し、そんな思い出に涙いたしておりますが、一月二十三日栃木のお墓に納骨いたしました。（以下略）＝菊地延之＝」

以上は彼の御子息からの手紙の一部だが、よく彼の人柄が出ている便りであった。

満州からの引揚げ川柳人の会合で、昭和40年結成した〝大陸川柳人同窓会〟には、時折顔を見せていたが、その仲間の一人が前記の奥原雨人で、彼とは地域的に近くよく顔を合わせていたらしい。雨人同志の留守に、炭吉同伴で、老妻と仏壇回向をした日のことを今だに鮮明に記憶している。

昭和10年頃だったか、筆者を初めて川柳句会へ強引に勧誘してくれたのもこの炭吉先輩であった。このことからいつか川柳の魅惑にとりつかれ、川柳人に成り終せた契機ともなったのだから、彼の名は忘れ難いのである。

拙宅へも二度ばかり宿泊していったが、その庶民的な人ざわりは、徹底した兄弟ぶりで筆者の一家がマクラを並べている中へ無雑作に割り込み、こちらへ密着したのには閉口したものだ。

筆者の同僚だった月刊満州社の、本職の漫画家佐久間晃とは、兵隊仲間でツーカーの間柄なので、彼のマンガ家としての技量は、このことで大部得る処があったらしい。東京の漫画派集団の出した〝まんが大特集〟という大きな本に、彼は佐久間を押しのけて、四頁にわたる開拓地スケッチを特集していたのが忘れ難い。

彼の作品は、技巧よりむしろ素人に近い稚拙な画風なのだが、どこか人なつこい人肌の温みに溢れていたのも彼の人柄のせいらしい。

撫順琥珀川柳会の古参同人で、その機関誌

『琥珀』に毎号マンガスケッチを載せていたので、柳号を炭鉱マンらしく〝炭吉〟としたらしい。主宰者の福井天弓を敬慕し、〝ヒゲの天弓先生〟という一頁にわたる漫画漫文は、炭吉畢生の名作—と激賞された折の得意の顔は今も忘れない。

『川柳大陸』（石原青竜刀主宰・大連市・川柳大陸社刊）の常連寄稿家だが、正面切った柳論よりも余白解消用のチョコマカした雑文によく健筆?を振るっていた。川柳の方も至極手軽でインスタント句が多い。

世界地図改訂版が間に合わず　炭吉
ウインドウに見る七七はこれでもか　〃
団服の故郷訛りもなつかしい　〃
山東の埃の儘で苦力来る　〃
無遠慮に食って後から不好吃　〃

川柳大陸の一般吟地平線は常連の一人であったが、これは—という句はなく総て平凡なのは、彼の人柄からきたものらしい。

「前線の勇士と開拓団員に歓迎される本誌を〝前線慰問号〟と特集してどさりと寄贈してみてはどうか。それにはコント・笑話・漫画を盛り沢山にして肩の凝らない編集で一貫しワッといわせるものにすべきだ—炭吉生涯賭けての提唱なり」

岡山県高梁市で何年か前に「懐かしの琥珀同人集会」が催された折、彼と筆者はピッタリと寄り添うようにして参加し、愉快な思い出の初句会のだいご味を満喫した。

「おれは川柳で有名になろうとは毛筋も考えたり思ったりしたことはない。マンガもそうだ。ごく自然で人間もただのしらふで居た方が気が楽だし、おれに向いてる。」とそういった言葉を今も忘れない。

彼の奥さん芳子夫人は、目下足腰を痛めて起居不自由だが、川柳の方は彼より大分上手で、いかに気張ってもこの道では歯が立たなかったことだ。

齢も上だが川柳でも先輩の彼とは、兵隊仲間という意識もあって共によく旅をした。長野の渋温泉や善光寺も歩いたが、その道中にいわく。

「おれはストリップが大好きで、それもかぶりつきに限る。時折、舞台に上がって姫君のお相手を勤めることもあるからな。だから、かぶりつきで二時間、三時間待ちは平気さ」

「炭吉は大陸の兵隊時代から女郎買いに行っても最下級の女を相手にするのが好きで、除隊後ももっぱら野雛相手が大の得意だったな。野雛とは最下級もいいところの最低の売笑婦で、民家の軒下が稼ぎ場というシロウト女郎のことで、一発最低賃金の稼ぎをする女だよ。雨催いのある宵、今日はお前さんといい目を見たいといい出し、カネもないのに野雛買いを二人でやったが、そのもとでは、彼の着ているレインコートをまげたものだった。今だにこの一件を忘れないよ」（佐久間晃の話）

▼次号は「大坂　形水」

番傘わかくさ川柳会創立55周年
藤原一志句集「風」発刊　記念川柳大会

とき　13年5月6日（日）午前10時会場
ところ　フェイセス月華殿　JR環状線寺田町
事前投句　「流れ」（4月1日締切）藤原　一志選
宿題　「ライバル」　鈴木　如仙選
「脇　役」　杉森　節子選
「個　性」　住田英比古選
「会　う」　定本　広文選
「輝　く」　戸井田慶太選
「　新　」　橋高　薫風選
「はがき」　森中惠美子選
各題一句（出席者のみ）出句締切11時半
会費　三千円　懇親宴　七千円
事前投句送り先　〒545-0001大阪市阿倍野区天王寺町北2-5-21番傘わかくさ川柳会事務局
TEL06—6719—1917

誹風柳多留二四篇研究 28

伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・粕谷長生
橋本秀信・山田昭夫
清　博美・佐藤要人

215　**人がらをぐつと見下す大三十日**

伊吹　日頃高尚な事ばかり言っている手習いの師匠も、何時も泰然自若としている剣術の先生も、掛取りの顔を見るやいなや、急に卑屈な物腰となる。なんだ、こんなに小さな人物だったのかと、その評価が地に落ちる大晦日。

清・佐藤　賛。

216　**金の有顔がけいせい上手なり**

伊吹　豪華な衣装や家具調度に取り巻かれてはいるが、裏に廻れば日常の出費に苦労の絶えないのが傾城の実情である。しかし、俗世間からかけ離れた別世界に居ることを演出しなければならないので、金など有り余っている様を上手に演じなければならない。

打見にハ何不足なき女郎也　傍三27

―打見は一見したところ。

清・佐藤　賛。

217　**浦嶋はかくても書たやうに成り**

伊吹　「額」は、魏の韋誕が凌雲観という二十五丈の高閣に書いた額。その高所の恐怖から、韋誕が地上に降りた時には、白髪となっていたと伝えられる。

浦島太郎は竜宮から持ち帰った玉手箱をあけて、高閣の額に書いた魏の韋誕のように白髪になってしまった、という句。

浦嶋程に年の寄ル額を書　宮四23

橋本　賛。『徒然草』一二九段に「凌雲の額を書きて白頭の人となりし例なきにあらず」が見える。

清・佐藤　賛。

218　**娵に花もたすあばたの侍女郎**

伊吹　痘痕の侍女郎は、まさに花嫁の引き立て役で、これ程の適役は他に無い。

侍女郎おはぎて娵に花か咲　五三18

侍女郎すかほハ娵にちさうなり　四八19

清・佐藤　賛。

219　**塗りこめた日ヶ左官ハしらぬなり**

伊吹　古論、古論語、または古文論語と言われるもので、始皇帝の焚書を逃れて、孔子の旧宅の壁中から発見された二十一編からなる論語。その論語を塗り込めた当時、仕事を請け負った左官屋は、何故このような事をしなければならないのか、知らなかったであろうという句。

しかうしてのちをかんがへぬりこめる　四四36

壁にいわくの有る事が後に知れ　三九26

清　『論語』の「曰く」と事情の意の「曰く」

の両意を掛けている。

佐藤　賛。同右。

220　**六十万石傾城おふぜう**

伊吹　仙台六十二万石伊達綱宗を振り通した吉原三浦屋の傾城高尾太夫は、綱宗のために三つ又で吊し斬りにされ、川へ投げ込まれた。その事件を詠んだ句。

橋本　賛。まさに六十二万石の城を傾けた。

清・佐藤　賛。

221　**御ふられあそバすげなよと奥でいゝ**

伊吹　前句に引き続き高尾の句。

伊達家上屋敷での奥女中達のうわさ話。「殿様は吉原三浦屋の高尾太夫にご執心で、夜毎日毎お通いになりますが、どうやらお振られになるそうですよ」。「げな」は推測の意を表す助動詞。

御朝寐の御つぎ高尾がうわさなり　一一30

清　「奥」で綱宗を暗示。

佐藤　賛。清兄説の諷意賛。

222　**りんじうをほめ〳〵　薬礼受納**

伊吹　「さすがにお人柄だけありまして、眠るがごとく安らかな大往生、ご立派で御座いました」と誉めて、臨終に立会った医師が、薬礼を受け取る時の景を詠んだ句。

医者衆ハじせいをほめて立ヲれたり　二5

清　賛。医者は人の死に立ち会っても冷静である。

佐藤　賛。

223　**ぬえ時分迄ハわる気のないおとこ**

伊吹　頼政は平治乱の初め源義朝に味方したが、のち源氏方としてはただ一人平清盛側についた。晩年以仁王の平氏追討行動に同調して挙兵、戦死する。鵺退治の頃までは悪気の無い男とは、あくまで平家側からの頼政観である。

ぬえ切りておけばよいのに哀也　二37

橋本　平家方のというより、謀反を企むような男としては書かれなかったのに、くらいの軽い意味。

清・佐藤　賛。

224　**かぞへ日に杓子当リがいゝをんな**

伊吹　「数え日」には、利益が多い日という意味もあるが、無難に残り日数の少ない年末としておく。「杓子当り」は食物の盛りつけ具合、転じてサービスの度合という意味である。年末、新春を迎える楽しさから、杓子で飯や汁を盛る分量も多くなり、急に周囲の人達に対して愛想も良くなった下女などとしておく。

小栗　年末で忙しいので上品に盛っておられず、お代りの回数がすくないようにてんこ盛にする意か。

山田　杓子当りは礎の通り「食物の盛りつけ具合、転じてサービスの度合」。本句は、飯盛女を思わせる趣向で、下女等の年末大サービスというところであろう。

清　小栗説が妥当。サービスを詠んだのではなく、多忙を詠んだ句である。

佐藤　礎稿のようなことかと思う。

225　**出ハ出たが二条の后立ヲのまゝ**

伊吹　在原業平と二条の后の駆け落ち。

館を出るには出てきたが、突然のことだったので二条の后は着の身着のままであった、という句意。

あくた川とつちもにける形リでなし　九6

清・佐藤　賛。

愛染帖

波多野五楽庵選

蕗のとういい口実で酌み合える　米子市　政岡日枝子
大吉に又騙されてぶうらんこ　堺市　和田つづや
冬銀河もしや阿弥陀のハンモック
一辺の長い図形でもてあます　和歌山市　西山　幸
凍蝶のあしたを見たし見たくなし
あそび欲しくて門を開けてみる　和歌山市　木本　朱夏
寒波来るマリオネットの糸切れて
七十五日の視線にわたくしは木乃伊　和歌山市　川上　大輪
ひらがなの果し状なら受けてやる
矢印が消えると風になる私　鳥取市　徳田ひろ子
ジーンズの膝で見ている蜃気楼
半熟の卵が弱いとこを突く　和歌山市　楠見　章子
消しゴムできえる程度の翼です

日溜まりの縁でわたしを丸洗い　富田林市　池　森子
連弾の一人が逝ったピアノソロ
沸点はもうモノクロの戯画の中　西宮市　門谷たず子
父の樹を点景におく画布がある
ひたすらに妻を演じてゆきくれる　藤井寺市　太田扶美代
繰り返す事の哀しさだってある
気がつけばも一つあった足の枷　大和高田市　鍛原　千里
曇天にひとり善がりが乾かない
言葉尻しっかり握っている女　和歌山市　青枝　鉄治
どん底で組むスクラムに芯がある
エリートのヘルメットには傷がない　富田林市　藤田　泰子
花衣　しばらく冬を忘れよう　藤井寺市　高田美代子
絶交状すでに切手も貼ってある　羽曳野市　吉川　寿美
等身大の愛を育ててつま　おっと　吹田市　石原　靖巳
耐えて来た愚痴がポロリと落ちて冬　弘前市　宮崎ヒサ子
雪と書き仇なすものと書き添える　弘前市　櫻庭　順風
新調を七人姉妹潜り抜け　弘前市　斉藤　劦
言うなれば父の背中の眩しさよ

真夜中の駱駝を見てる雪蛍　黒石市　千葉　風樹
虹の色いつも何かが不足する　唐津市　仁部　四郎
ほんとうの嘆きは仮面取ってから　鳥取県　岩崎みさ江
よく怒る鬼だ善人かも知れぬ　松原市　玉置　重人
人形の家より少しだけ自由　西宮市　奥田みつ子
ゆっくりと疑問湯ぶねの湯があふれ　西宮市　牧渕富喜子
合掌のかたちで受ける豆礫　和歌山市　福井　桂香
憂きことを流す小川が涸れている　尼崎市　春城武庫坊
忘却の扉をすこし開けておく　横浜市　鈴江　純子
馬鹿だなあ地雷どこにも埋めてある　東京都　後藤　早智
春惜しむ昭和生れの皺の数　弘前市　高橋　岳水
私の旅の終着駅はきっと雪　吹田市　山本希久子
九合目あたりでランプ振ってくれ　松原市　小池しげお
満開の桜へ急ぐ救急車　枚方市　海老池　洋
赤ワイン女のゆくえ知れたもの　八尾市　高橋　夕花

飽きられた私が入る玩具箱　岡山県　富坂　志重

換え下のない命などお忘れか　岡山県　小林　妻子

なにもない一日だった寒い日暮　米子市　青戸　田鶴

咲く時期を間違えたっていいじゃない　愛媛県　中居　善信

嫉妬する人の哀しい目を見たか　愛知県　早川　盛夫

一途に生きる目にシグナルの赤はない　和歌山市　山根めぐみ

躓いた石に老い先試される　尼崎市　内田美也子

単調な日々うろうろとして埋める　鳥取市　植田　一京

司馬遼を菜の花だけの部屋で読む　米子市　白根　ふみ

心臓のメトロノームはまだ確か　愛媛県　黒田　茂代

冬籠り抜けて地蔵の深呼吸　弘前市　一戸　ツネ

野に下りて疑い深くなるシッポ　米子市　鷲見　正子

ひとすじに生きて少うし悔いている　富田林市　中井　アキ

横からの風はひやりとする本音　松江市　川本　畔

代役はだあれもいない母の役　鳥取県　西原　艶子

汁椀でポタージュ老いはいきなもの　和歌山市　榎原　公子

消しゴムにいつも本心覗かれる　和歌山市　福本　英子

早春譜うたった土堤も花ざかり　鳥取県　土橋　睦子

種を蒔きまた秋までの雨蛙　広前市　相馬　銀波

あの世での一句は川の上で書く　唐津市　田口　虹汀

カルチャーで歳を忘れてみませんか　大阪市　三浦千津子

いつも一緒に働く影が妬ましい　愛媛県　花岡　順子

陽を浴びて脳よボツボツ起きてくれ　羽曳野市　徳山みつこ

静かなる仮面の並ぶ遺産分け　西宮市　緒方美津子

路地裏のネットワークが温かい　大阪市　鈴木トヨ子

真冬日の陽だまりに寄る待ち合わせ　寝屋川市　森　茜

木漏れ日とおんなが跳ねる春の径　香芝市　大内　朝子

自分だけの世界に浸るコンパクト　東大阪市　北村　賢子

ときどきは背すじ伸ばしているからす　尼崎市　春城　年代

晩学へ挑む巳年の辞書を買い　日立市　加藤　権悟

欠点をさらけ出されてからの乱　倉吉市　山中　康子

おとなしい妻の噴火は予知できぬ　黒石市　相馬　一花

寄り添って傘は一本畳まれる　弘前市　福士　慕情

疑ってごめん鏡を信じよう　富田林市　大橋　鐘造

トリックはいらぬ素顔のままで良い　和歌山市　武本　碧

迷わずにじゃんけんぽんに賭けてみる　米子市　光井　玲子

疑いも知らずに渡る母の川　寝屋川市　江口　度

名所ではないが故郷の山桜　泉佐野市　稲葉　洋

人間の終着駅となる大地　八尾市　村上　剛治

花盗人を見ていただろう細い月　今治市　塩路よしみ

雪降れば雪の日課が待っている　安来市　原　煩悩児

洗脳された蟻が休んでばかりいる　鳥取県　石谷美恵子

梅の香へフッといのちをいとおしむ　西宮市　西口いわゑ

写経するざんげひとしお罪の嵩　弘前市　岡本　花匠

出稼ぎの父を迎える休耕田　青森県　西谷　大吾

和泉市　横山　捷也
振り出しに戻って同じテツを踏む

吹田市　早川　棲世
転居くり返し故郷は早く捨て

鳥取県　土橋はるお
留守電が明るい話受けている

横浜市　清水　潮華
義理でとる新聞コラムだけを読み

倉敷市　家守　政子
張り替えた襖で猫が爪を磨ぐ

八尾市　宮崎シマ子
悪い杭二度と出ぬよう叩いとく

藤井寺市　中島　志洋
三浪の手垢で光る広辞苑

鳥取県　西沖　彰雄
ありのまま話して下駄を子に預け

倉敷市　小野　克枝
まっすぐに歩くと影も裏切らぬ

鳥取県　田村きみ子
男には見せぬサンマを焼く姿

鳥取県(故)　乾　隆風
都合では耳がきこえぬ時もあり

和歌山市　桜井　千秀
猫柳に招かれて行く無人駅

鳥取県　小西　雄々
泊まる気へドライフラワー炎えてきた

八尾市　村田巳代一
他人様を入れる器が小さすぎ

横浜市　保田　絹子
家の恥書いて三途の川越せず

岸和田市　池田寿美子
インターネットに心の的を見失う

米子市　林　瑞枝
日本刀の光を見せて香魚が釣れ

宇部市　平田　実男
私のオアシスとなる縄のれん

鳥取市　岸本　孝子
車座で話せば角がとれてくる

鳥取県　上田　俊路
ここからは空気がうまい無人駅

海南市　三宅　保州
衰えを感じる父の怒り方

岡山県　矢内寿恵子
歳時記の中に生き抜く亡母がいる

倉吉市　牧野　芳光
学校の便所を探し回る夢

米子市　木村富美子
悲しみに傾く船を助けねば

美祢市　安平次弘道
運のない男にたまる不発弾

鳥取市　岸本　宏章
ふところへ大事に持っているやがて

大阪市　川原　章久
自販機よ僕にお酒は売らないで

大阪市　津守　柳伸
あの時と同じ和服で竜安寺

唐津市　樋口　輝夫
免罪符片手にボトルキープする

今治市　月原　宵明
新世紀何か言わねば納まらぬ

尼崎市　田辺　鹿太
さざなみも立たない歳になりました

横浜市　菱田　満秋
帰心矢の如く飛行機遅すぎる

川崎市　和泉あかり
また元へ戻る話は鮮度落ち

富山市　舟渡　杏花
落し穴の中でふくれる知恵袋

大阪市　神夏磯典子
雪も消え幻も消え元の街

堺市　桑原　道夫
男老いて樹氷の夢を見ていたり

堺市　矢倉　五月
風除けと知ったは散ってからのこと

奈良県　渡辺　富子
反論へ妻ゆっくりと向き直る

箕面市　出口セツ子
生きてゆく嘘ポケットに溜めている

富田林市　片岡智恵子
プレイオフ本音まだまだ見せられず

大阪市　小林　周信
剪定へ楷書のような冬木立

横浜市　田中　笑子
褒められた声に時どき化粧する

鳥取県　橋本多哥由
口裏を合わせる嘘で汗をかく

岡山市　井上柳五郎
落葉舞う一期一会の吹きだまり

唐津市　久保　正剣
機密費で外遊出来るいいポスト

エッセー

雪の一日

園山　多賀子

新世紀と言っても、私の家では静かに過した喪正月だった。

気の早い家ではとんどの竹を伐り出しているらしい。

とんどの火風邪の子も出て手をかざす

私が昔に創った川柳など想い起される。

昨夜からの冷え込みが朝方からちらちら雪となり、十時頃には本格的な雪となる。暖冬と決め込んでいただけに、今日の雪は驚きだった。寒に雪の降るのは当然のことだけれども、人間は勝手なもの。特に老いに寒さは苦手だ。

今日は「川柳塔まつえ」の新年句会。出席するつもりがこの雪では無理らしい、と諦めていたところ、孫が突然送ると言ってくれ、渡りに舟と心も弾む。

十一時半頃孫の車で出掛ける。風もなく降る雪で、辺りは見る間に雪化粧。葉の落ちた道端の樹々は、雪の花で桜の花盛りのような錯覚におちいる。美しい雪景色に目を奪われる。

この雪にめげず句会の出席は意外に多くて盛会。やっぱり趣味に生きる人のたくましさを感じる。日程終了そこそこに孫が迎えに来てくれ、雪の十センチ程も積った中を徐行運転。雪に霞んで宍道湖も望めず、車は途中倒れた竹の下を潜るありさまである。五時半頃家に帰着した。孫の親切に感激一しきりであった。

風呂に入って温まり、今日の句会の成果をノートに整理にかかると、ふと目の前のノートの端に、一匹の小さな物体が動いている。

何かしらとよく見ると、何と一センチ弱の褐色の虫が体をくねらせて、自分の丈くらいの歩幅で前進しつつある。紛れもなく尺取り虫だとわかった。この突然の訪問者の行動に私は目を見張った。何としてこの時季、こんな処にこんな小動物が現れたのかどうにも合点がいかぬ。

この頃は、寒さのため外の仕事は小休止している。（山茶花の赤い花びらが一面に苔の上に落ち、このまま朽ちさせるわけにも行かず、一片ずつ丹念に拾っていたけれども、この寒さでは風邪をひいてもつまらないので、見過している。）

閑に任せふと書庫から源氏ものがたり上・中・下、裏話など引き抜いて見ることにする。

主人が学生時代に勉強したものらしく、背文字も褪せ、朱線と書き込みで随分汚れた痕がある。主人生前は手にも触れなかった古い本を、探して読む気になったことは、私にも説明できない。けれど、今にして平安時代の古語に触れることは、やっぱり主人の導きだったかと、懐しく貪り読む。

尺取り虫はもしかしたらこの本の行間に棲んでいたのではなどと、空想か幻想かともつかぬ想いがしきりであった。主人の遺影も何憶うか俯いている。

ふと我にかえって見ると、さきほどの尺取り虫の姿はない。きっと源氏物語の中に消えたのだろう。

これからも私の夢はまだまた続くことだろう。外の雪は余りにも静かだが、障子を開けて見る気にもなれない。この分では気分が昂って眠れそうにもない。

あ、今日はまだ夕刊を読んでいなかった。

女性コーナー

黄香の忠

西出楓楽選

鉛筆五本削るとファイトわいてくる　西宮市　門谷たず子
装身具はずすと嘘が言えませぬ　あきる野市　佐藤　季穎
割れ茶碗ピタリ合うても割れ茶碗　堺　市　志田　千代
時効になった話盛ってる夫婦皿　倉敷市　小野　克枝
ぶきっちょで本気で生きる外はなし　和歌山市　細川　稚代
一歩ひくみんな優しくしてくれる　香川県　池内かおり
年金に無駄をするなと叱られる　今治市　塩路よしみ
真剣に鼻唄うたうひとりぼち　川崎市　小林久美子
雛飾り男児三人畏まる　大阪市　津守　柳伸
ロボットになんか負けるな哺乳瓶　八王子市　播本　充子
近頃の言葉ハートをよく抉る　横浜市　清水　潮華
本を読むこころが荒まないように　和歌山市　福井　桂香
冷や飯になってもやっぱりこしひかり　富田林市　藤田　泰子
決め球を上手に夫打ち返し　八尾市　生嶋ますみ
ほどほどの欲が私を支えてる　大和高田市　鍛原　千里
余命表の中に男手が足りぬ　和歌山市　古久保和子
流行は追わぬが好きな色がある　八尾市　村上ミツ子
おとし蓋 禅問答がまだ続く　和歌山市　西山　幸
長芋もぬらり私を馬鹿にする　米子市　政岡日枝子

肩胛骨わたしに翼あったはず
その昔鎮守の森は父だった
生き方の答えは風の中にある
大空にみつめてくれる星がある
欠点の一つがあなたの味ですね
何はともあれビタミン剤は飲んでおく
ハーブティー心で飲んで落着こう
この橋を渡ると消える蜃気楼
悔しいが男結びに敵わない
疑心暗鬼 蓋半分は開けておく
地蔵さまお頭の先に春匂う
清姫に勝る巳年を持て余す
春日遅々ここらで欲しい句読点
その内と言う約束を待つポスト
今度こそ誘ってみよう老いの靴
炊飯器ぶつぶつ愚痴が炊き上がり
初恋の人まだ住んでいる老いの胸
馬鹿になりきれず蛇口を開け放つ
忙しい方がやっぱりありがたい
時どきは夫と歩く市場籠
和簞笥を今日は開けましょ春の風
屋根雪は隣家目安にしておろす
ストレッチ体の空気入替える
母さんの語気に呑まれてはいと言う
弥次喜多の三組夫婦がやかましい
幸不幸 気の持ちようと籤にあり

和歌山市　木本　朱夏
富田林市　中井　アキ
池田市　栗田　久子
西宮市　西口いわゑ
鳥取市　植田　一京
藤井寺市　高田美代子
横浜市　山下　省子
大阪市　川久保睦子
熊本市　永田　俊子
和歌山市　吉村さち子
弘前市　一戸　ツネ
和歌山市　田中　みね
吹田市　山本希久子
大阪市　三浦千津子
鳥取県　西原　艶子
八尾市　宮崎シマ子
大阪市　鈴木トヨ子
和歌山市　山口三千子
東京都　後藤　早智
八尾市　高橋　夕花
東大阪市　笠井　欣子
弘前市　宮崎ヒサ子
横浜市　巖田かず枝
横浜市　保田　絹子
東大阪市　安永　春
横浜市　長島亜希子

慰めは黙って注いでくれる酒　寝屋川市　堀江　光子
立ち止まる一言心洗われる　岡山市　川端　柳子
自己嫌悪　頬刺す風が心地よい　西宮市　奥田みつ子
仲直りの握手にことばなど要らぬ　尼崎市　長浜　澄子
泣けるだけ泣いて素直になれました　東大阪市　北村　賢子
木枯しに松のみどりが温かい　富田林市　片岡智恵子
楽ですヨ一年中を冷や奴　鳥取県　吉田孔美子
ときめきを運んでくれる靴の音　岡山県　山本　玉恵
羅漢寺で父母兄姉の顔探す　大阪市　町田　達子
訳などは何にもないと子がすねる　横浜市　豊田　羊子
幾許の余生まだまだ磨かねば　岡山県　矢内寿恵子
バラ千本　私の庭に咲かす夢　奈良県　渡辺　富子
おおい雲よ呑気そうねと鳳仙花　米子市　林　瑞枝
陽当たりが良すぎて掃除ばかりする　堺　市　矢倉　五月
あたたかい心を渡しあう握手　香芝市　大内　朝子
天から誰か見ていてくれるだけで良い　大阪市　本間満津子
偶然が重なり白が黒になる　富田林市　池　森子
冬ごもりペンとノートは仲よしに　鳥取市　録沢　風花
ジグザグでも歩いた跡を道とする　鳥取県　岩崎みさ江
独り居る至福の午後へ茶は香り　町田市　土田今日子
油断すると梯子から振り落される　米子市　森脇　麗
箱庭に小っちゃな秋をありがとう　倉吉市　米田　幸子
対岸が揺れて大波寄せて来る　鳥取県　西川　和子
母というお陽さまに照らされている　倉吉市　山中　康子
冷めていく愛を知るのも愛である　横浜市　近藤　道子
しきたりはうすれかけても節分会　川崎市　和泉あかり

顔よりも姿勢が歳を物語る　横浜市　福田由美子
時々はこんな自分へ褒め言葉　藤井寺市　太田扶美代
冬をぬぎ捨てて木の芽吹く街へ　八尾市　井尻　民
モノトーンどっちつかずも心地よい　芦屋市　黒田　能子
命乞い鬼がのこした豆のかず　米子市　白根　ふみ
虹一匹の羽音かすかに春を呼ぶ　和歌山市　桜井　千秀
お日様に笑われるほどよく眠る　愛媛県　黒田　茂代
約束に針千本を飲む覚悟　岸和田市　池田寿美子
千両に母の姿を重ね見る　和歌山市　松尾　和香
満ち足りた花の素顔が美しい　今治市　野村　清美
言いたいがひと言明日へ残しとく　鳥取県　さえきやえ
ひと言の弁解もなく椿落つ　鳥取県　石谷美恵子
他所行きの顔はたやすく崩れだす　横浜市　秋元　和可

たず子さんの句―数詞を使った句はよく作られている。しかし、語数合わせであったり、その数字に必然性がない場合が多い。この句は五本という少し多すぎる数が、ゆるぎないファイトを如実に代弁している。**季顕さんの句**―よく考えてみれば、装身具をつけることは自分自身をよりよく見せる、つまり嘘的部分が大きいのに、その上まだシャアシャアと嘘をつくと言う。これだからいにしえから男は女に勝てないのである。**千代さんの句**―すっと句を読み流すと至極当然のことが詠んである。ところが読み方によっては実に含蓄に富む。上五、下五に同じ言葉を持ってきたことで、言葉遊び的になる危うさが、かえって句作りのうまさを際立たせている。**克枝さんの句**―平凡に暮してきた夫婦も、それなりに明暗の歴史を持つ。そのうちの暗の部分はお互いに胸に畳み込み、食卓に向かい合っている老夫婦が、一幅の絵になって浮かんでくる。

生まれる

川本　畔選

わたくしの春が生まれるコンパクト　朝子
泣き声に涙あふれた第一子　笑子
巳の年に生まれ脱皮も五十回　淞丘
生まれたかそうか男か　でかしたぞ　盛夫
生まれ故郷気取らぬ風が温かい　登美
生まれたと誇るおしめが風にゆれ　勝巳
もうすぐに生まれる土筆へ雪の刑　英子
生まれくる子に間に合わぬ毛糸針　庸佑
初孫の産声壁を突き破る　大・吾
偏差値は問わず生まれた子を愛す　ちかし
孫誕生蔵の隅から鯉を出す　喜子
長男が生まれ揺がぬ老舗の灯　(松)輝夫
天寿まで生まれた限り掃くつもり　(麺)輝夫
大正の生まれだ背筋ピンと張る　玄也
東京の生まれで変な大阪弁　俊子
橋の向こうで生まれ変っている女　保夫
アイデアが生まれる妻が口を出す　煩悩児
職退いて生まれ故郷の青い空　たず子
恋が生まれたらしい笑顔が美しい　保州
おかあさんになりたい生まれ変ったら　(清)玲子
ロボットの手で再生へ動き出す　政勝
合掌をする子に温い風生まれ　清山
古希が見え生まれ変った志　権悟
職安で妻の誕生日が出ない　政良
牛の仔がやがて生まれる雪あかり　弘一
新生児どれもキリスト様の顔　俶子
日本に生まれ良かった桜咲く　和枝
まだ逢わぬ命が浮かぶ温い海　周信
ストロー二本恋が生まれてくる予感　風樹
父母は胎児の日から服着せる　今日子
退院のおくるみ皆に囲まれる　よしみ
輪廻かな雲は流れてまた生まれ　孝雄
生む権利育てる義務が揺れている　順子
店先へ生まれたままの新刊書　ヒサ子
根雪の下でもぞもぞ春が生まれ出る　順風
音たてて記録生まれる日のカルテ　大輪
ぬるま湯の中で生まれた怠け癖　佳
文豪を生んだ小さな木の机　由一
介護法生まれ老人考える　一壺
アイディアが生まれる馴れた回り椅子　ただし
ろうそくを吹き消し切れぬ誕生日　圭二
男の子ばっかり生んだ腰の幅　しげお
人
流し雛生まれを聞けど笑うのみ　雄々
地
臨月のお腹を摩るシューベルト　慕情
天
呱々の声父となる背が棒になる　高橋岳水
軸
分身をするり生みそう朧月

影

長谷川　淳選

木影から黄色い声の草野球　正雄
街の隅手職に老いた影をひく　棲世
ポリシーがないから影も薄くなる　靖巳
暗いとこあったと影の声が言う　不二
父の影残る背広が吊ってある　(清)玲子
なあ影よ自信持ちなよ背を曲げず　(川)睦子
亡き父の影がわたしを離れない　省子
世相からこぼれた影の置きどころ　ツネ
心の影を春の大地に解き放す　紫晃
蓋しても死の影が差す核のゴミ　順風
夜遊びへ妻が仕込んだように影　像山
しみじみと父に似てくる影法師　劦
忘却の森へ男の影を追う　雄々
つかれても愚痴をこぼさぬ影法師　志重
影武者の印籠借りた金バッジ　(麺)輝夫
影になり日向になって孫かばい　文江
ロボットの形になった俺の影　慕情
シルエットみんな美人に画かれる　降盛
人影でドラマがあけるサスペンス　肇
逆さ富士あなたはいつも平静だ　みつこ
割り切って影の男で生きていく　次男
影の薄い男に笑い顔がない　善信

職安の前に並んだ薄い影　尚士
影と妻だけは迷わずついてくる　剛治
影絵遊びが美しい白寿の手　風樹
ランドセル影もスキップして走る　由一
影武者のように寄り添う女秘書　一花
影法師お前の癖も爪を噛む　政良
病巣の影もうすれて出る笑顔　朝子
逢いたくて影ともつれて走る道　たえ
ファイルからぽろり落ちた僕の影　巳代一
私と言う枷が外せぬ影法師　活恵
兄嫁の味方になっている遺影　しげお
どの鬼も角は見せない影法師　鉄治
母の手と重なる幼い日の影絵　晴翠
ライバルもすてきな影を持っている　ミツ子
やさしさか影は美醜を語らない　あずき
佳

セールスへ居留守がばれたシルエット　盛夫
気取っても影の背中が曲ってる　アキ
日の丸の影で泣いてた召集日　徳三
暗闇で迷子になった僕の影　大輪
若い影一つになってまた二つ　あらた
人

飯茶碗たったふたつの影になり　ますみ
地

薪能　恩讐の影乱れ舞う　清芳
天

影法師ここから先は内緒だぞ　久保正剣
軸

丑三つに機織る鶴の影法師

移る

山下省子選

虎の威を土産に移る天下り　(稲)洋
どこへ移っても督促状が来る　重人
移り香をもみ消すように雨が降る　圭一郎
釣り銭に魚の匂い移ってる　よしみ
借金を増やして移り行く世紀　象山
世紀も移りロボットが介護してくれる　(伊)玲子
目移りは値札の方になりました　哲男
新住所子どもも一人ふえている　實
遠景の移るドラマが慰める　邦昭
花の下　時が移ろうのが見える　正子
移りゆく世相へ眼鏡替えて見る　さち子
うす味に移り塩から夢に見る　登美
日向ぼこ欠伸と背伸び移し合う　正雄
焼肉の匂いが移る一張羅　東吉
臓器移植神秘の鼓動甦る　幸夫
移り気な患者が選ぶ今日の医者　(樋)輝夫
歳月の移り子等とはもう住めぬ　シマ子
移る世へ私よたよた従いてゆく　めぐみ
移り気が輪の中に居る不安感　清史
黒枠で転居届のハガキ来る　ツネ
移転地の住所知ってた請求書　あずま
栄転の名で泥舟へ移される　旋風

移転先嗅ぎ回ってるストーカー　孝雄
移る世にネジ巻き直す古時計　りつえ
仁王にも欠伸が移る春の午後　周信
窓際へ移ると不況よく見える　一風
スロースロー愛はステップ踏み替える　銀波
窓際へ移るリストラ免れて　倫子
移り箸祖母の厳しい目に出合う　庸佑
宴会へ席を移してから本音　盛夫
二幕目へ移るジョークを用意して　扶美代
移動済み仲間と和む猿の群れ　笑子
夫から育児に移る妻の愛　武史
移り気な気温に心まで乱れ　純子
プランターに小さな夢を移植する　劦
悪戯を繰り返す子に情移る　宗明
植えた花咲くのを待たず転勤し　あらた
佳

窓際に移り机にうすいお茶　徳三
相槌がきらい窓辺へ椅子移す　日枝子
友達が欲しくて癌は転移する　風樹
世の中は変らないのに新世紀　満秋
ふるさとに移り余白に色を足す　ひかる
人

二次会へ移る本音が伏せてある　可住
地

どの星にしますか移住できるなら　保州
天

探さないで下さいとある転居先　川上大輪
軸

泣き出した母に息子の貰い泣き

初歩教室

題―甘い

吐田公一

擬人法とは人以外のもの（動物・虫等）を人に例えて表現する方法だが、この表現方法は間接的ではあるが、短詩文芸にとっては非常に効果を発揮する。今回の「甘い」で、

○蛍さえ水の甘さを知っている　煩悩児

○甘水を好む蛍は本当かな　謙次

の二句（蛍と甘い水の句は多かった）を例にとると、両方共本当に水が甘いと言っているのでないことは明白だが、この句の主体はあくまでも蛍そのものであって、そこには人間が詠まれていない。

▽甘い水好きな蛍が陥ちた罠

とすれば、甘い暮らしを求めた人間の姿が詠めるのではないだろうか。

添削句

○甘い汁少し吸うたか低姿勢　きらり

少しを省き、対象を明確にすると

▽甘い汁吸うた議員の低姿勢

○妹の甘い蜜柑今日もくれ　静子

下五のために表現不足となっている。

▽甘い蜜柑とれたと妹からの便

○子供には塩加減して飴一つ　和香

感動が見えない句。言い古された表現だが、飴とあれば鞭で

▽英才へ使い分けてる飴と鞭

○罠だとは思いつ甘い蜜に酔う　彰雄

蜜＝甘い（同義語）でどちらかを省略。

▽献金を罠と知りつつ蜜に酔う

○甘くみて自我を通してきずだらけ　悦子

理屈を述べているような句。句意は異なるが、

▽わがままを通せた頃の七光

○甘言の裏読めず高い授業料　英旺

言葉が固いのでリズム感が悪い。

▽甘い水飲んで高こつく授業料

○携帯でソッとささやく甘い恋　文江

原句の内容では携帯でなくてもいいはず。運命のいたずらを想像してみれば―

▽つまずきのもととは知らぬ甘い恋

○暖冬と甘く考えカゼをひき　錦

中八になるが

▽甘くみた暖冬異変でカゼをひき

○甘えん坊親を手玉に大あばれ　㈢美恵子

中七以降の表現が単純

▽家庭内暴力という甘えん坊

○肥満の元甘い物には眼がないわ　綾乃

○甘い物についつい手が出体重計　郁代

同想句。他にもこの種の句が多数

▽甘いものに眼がない性質で肥満体

○老い独り自分に甘い暮しする　㈭美代子

「自分に」は冗句

▽老い独り甘い暮しになれてくる

○三世代孫の味方を甘い祖母　政子

原句では三世代は不要と思う。

▽小遣いを祖母は甘いと見透かされ

○水仙を活け家中が春となる　㈱雅子

同じ内容だが、活けを省いてみると

▽水仙の甘い香りに家は春

○豆を煮る甘さ遠い日引き寄せる　喜代子

やや俳句調を感じる。

▽豆を煮る亡母の甘さが偲ばれて

○甘言に乗って買わされ悔いている　欣子

この場合悔いているを使わなくても

▽甘言でにせブランドを買わされる

○甘口にだまされ呑み過ぎ千鳥足　てる代

中八がややぎこちない表現になっている。

▽甘口につい呑みすぎた千鳥足

○つい乗った甘い言葉の保険危機　智加恵

保険会社の倒産などを想定？しかしここでは詐欺の方がピンと来るのでは

▽つい乗った甘い言葉の保険詐欺

○甘い顔見せるとペットつけ上がる　君　江
下五を一考してみると
▽甘い顔見せてペットにひっかかれ
○子を叱る若い母さん甘すぎる　志　重
ストレートに詠みすぎ。こんな場合は対比的に作句すれば―。
▽夫には強いが子には甘い母
○血糖値気に掛けながら和菓子買う　千　代
そのままずばりの表現。下五を省略しては
▽甘党でいつも気になる血糖値
○進めた駒甘い罠とはつゆ知らず　た　え
将棋とすれば上六をあの一手とし、時事吟とすれば上七になるがKSDのとすれば
▽王手飛車甘い罠とはつゆ知らず
○甘く見た過信運転事故起し　四三郎
特異なニュース性を採り入れては
▽警官が甘く見ていた飲酒事故
○紅い爪甘い香りの事務職員　千都子
事務職員では句が浅い。
▽紅い爪甘い微笑み撒くマダム
○老い独り甘い言葉もう聞けぬ　一　典
上五を代えてみると
▽先立たれ甘い言葉も聞けぬ日々
○ホステスの甘い声にはしごする　すすむ
はしごするではインパクト不足
▽ホステスの甘い誘いで使い込み
○温泉宿甘さが違う金払い　輝　夫
原句の情景の想定がむずかしい。業者との癒着で金払いがいい人達と一般人（個人）との差異を詠んだものと思うが―。
▽ただ酒のツケが回ってきた誤算
○延長線守備の甘さが目立ち出す　サト子
下五に結果を持ってきた方がいいのでは
▽延長戦守備の甘さで負けいくさ
○握らせた飴で老人会席次　裕　峰
老人会席次では穿ちがない。
▽握らせた飴で比例区の当選
○うま過ぎる甘い話と後で知り　芳　江
下五が安易
▽うま過ぎる儲け話へ乗った悔い
○甘い汁目ざとく見付ける虫と人　洋　子
見付けがいい。時事吟として具体化すると
▽甘い汁よってたかったKSD
○意味ありの甘さ包んだチョコレート　敏　子
バレンタインにかけるのであれば
▽義理チョコを本気にとったおめでたさ
○幸うすく甘い言葉にすぐかかる　よしこ
「甘い言葉にひっかかる」の句は多かった。
▽幸薄い女で情に甘くなる
○甘くみて離婚せまられ慌ててる　朋　月
下五で説明句に陥った。
▽甘くみてしっぺ返しの花の乱

佳句

十代の子等は世の中甘くみる　宗　明
原潜の甘い規律で蕾散り　賢　治
少子化の甘い躾が悪の床　トヨ子
セールスの甘い言葉の奥を見る　深　雪
甘い言葉にうっかり乗った青二才　恒　雄
機密費の甘さにたかる政と官　圭　二
永田町秘書が秘書がと甘ったれ　方　子
甘い汁政官界を汚染して　侑　子
乗りかけた甘い話に鳴る鼓動　ゆきの
寝たきりの甘えてくれる母がいる　宏　子
看護して甘い絆がもどって来　舞　夢
甘い声とかくこの世は騙される　志津香
チョコの日のハートに微笑む仏さま　幸　枝
美しい化粧の下の甘い罠　美弥子
医療ミス甘いチェックのおぞましさ　好　勝
もたれ合う花と蝶との甘い仲　あつむ
おとんぼを甘く育てた悔いがある　栄　子
甘い水飲んだ蛍の灯がやさし　半　覚
（えてして甘い水を飲むと逆だが）
ナツメロが甘い青春連れて来る　㊀八重子
（青春の想い出が如実に）
母の皺酸いも甘いも刻み込み　つよし
（着想がよかった）

私の句

考えは甘いが急所突いてくる

本社　三月句会

三月七日(水)午後五時半
アウィーナ大阪

啓蟄も過ぎたが、春の足音は止まったまま、寒の戻りのみられた七日、三月雛の句会は、主幹を除き女性選者ばかりで、百名の出席者を迎え定刻開催された。

お話は副理事長の西出楓楽さん。御主人を二年半に及ぶ癌闘病の揚句に亡くされた辛い体験から、癌告知の問題について話す。

死亡原因の第一位を占める癌であり、本人にどの程度まで真実を話すか、重いテーマを淡々と、自身の体験を重ねながらの話に、一同、他人事でなく聞き入った30分であった。

健康人を対象のアンケートによれば、76%の人が告知を望むと言う。しかし、現実ともなればそう簡単に受け容れられる筈もなく、自己防衛本能から、聞いたことを、否定して記憶から消してしまうことさえあると言う。

月間賞は角野仁清氏（寝屋川市）に輝く。

（司会―遠野）（記名―澄子・月子）
（受付―月子・森子）（清記―義）

席題「咲く」　鴨谷瑠美子選

梅が咲き桜が咲いて空青し　利武
欠席の人の噂に花が咲き　尚士
ぽっちりと咲く雑草と呼ばれてる　真理子
明日咲く椿のひよを追い払う　度
こぼれ種思いもつかぬとこで咲く　三男
時期が来てほったらかしの梅が咲く　寿美子
いじめっ子みんな泣かせて咲いている　茜
咲ききって婦人会長やっている　しげお
お隣もハーブ咲かせている癒し　茜
はんなりと咲こうと蕾時を待つ　武庫坊
花の咲く駅に臨時停車する　紫香
ぱあっと咲いてダイナミックに散る桜　達子
おめでとう向こう三軒サクラサク　かすみ
ロマンスグレーまだまだ花が咲きそうだ　和香
笑うたら鼻が大きく咲くお方　天笑
今年こそ造幣局の通り抜け　あやめ
集まれば総理の首に花が咲く　典子
死ぬまでは女を咲かす花であり　弥生
ジョギングで咲いたロマンス春に散り　朋月
襖絵のバラは百年咲いている　洞庵
三分咲きまだ楽しみが残ってる　典子
散るいのち生まれる命さくら咲く　隆盛
コーヒーで花を咲かせる恋もある　靖巳
売るための花味気なく咲いている　梨里
十年目咲いたサボテン見せまわる　伽羅
百歳を生きて咲かせる華もある　たもつ
咲き誇るバラに懺悔をする男　岳人
咲き出して水やり励むプランター　伽羅
無理やりに咲かせた梅がすねて枯れ　菜月
沈む時陽は大輪に咲いてみせ　真理子
咲いて散る花の悟りに負けている　昭子
人情の花咲くやさしい輪の中で　シマ子

佳

スニーカー山に咲く花見つけたい　ふりこ
一瞬に咲いた何にもないように　ダン吉
身のうちに咲かせてならぬ蕾持つ　楓楽
大輪を咲かせてからも低い腰　周信
散るなんて思ったこともないサクラ　美代子

人

咲くことをためらっている恋の花　鹿太

地

おだてたら梅もさくらもわっと咲く　美代子

天

ひとことでハートにキュンと花が咲く　いわゑ

軸

根を張って咲いてすみれの強さだな　螢

兼題「ロマンス」　藤田泰子選

風花にロマンスを追う愛を追う　太茂津
一輪差しにロマンスの花枯れてくる　充子
ロマンスカー別れ話が進まない　扶美代
目礼で始まる熟年のロマンス　重人
午後のお茶昔むかしの艶話　周信
ロマンスのムードを消したサロンパス　洋敏
テレクラにロマンスなんか落ちてない　楓楽
無機質なロマンスを生むEメール

自分史にロマンスが無いさびしさよ　寿美子
ロマンスグレーの鬼に油断をしてしまい　洋
ロマンスグレーにハローワークの風寒し　楓楽
履歴書にロマンス一つ二つ書く　岳人
ロマンスを運んでくれぬこうのとり　瑠美子
ロマンスはもう葬ってひとり住む　あやめ
ロマンスは空気となった二人にも　かりん
たそがれのロマン見ているおぼろ月　朋月
茶をすする元ヒーローとヒロインと　仁清
ロマンスが枯れゆくバラに花咲かす　公誠
ロマンスやいまドンナは花粉症　美代子
ロマンチストで頼りないけど憎めない　一風
ロマンスの舞い丹頂の白い息　隆盛
シャガールの絵のロマンスは空を翔ぶ　萬的
ロマンスの果てはアダムとイブになる　雅文
銀河鉄道ロマンスシート予約する　洞庵
どなたにも言わぬロマンス桃の花　伽羅
風化したロマンス秘めてある文箱　倫子
悠久のロマンス金と銀の鞍　鐘造
ロマンスを追えばあの世に辿りつく　とし子
ロマンスはいつかコントになっていた　千代
ロマンスに七つ釦が似合うひと　洞庵
ロマンスのやがてに罪がこぼれ落ち　森子
ロマンスシート年齢不問の影ふたつ　希久子
ロマンスカーに乗るといつでも眠くなる　三喜夫
ロマンスに程遠い妻よく食べる　瑠美子
ロマンスを追う頬っぺたはピンク色　天笑
佳
ロマンスは十指で足りぬほどの僕　かすみ

夫には言えぬロマンス温める　洋敏
ロマンスは実ったけれど冬のまま　月子
ロマンスカー妻とおにぎり食べている　ダン吉
想い出せば泣きたくなってくる恋よ　天笑
人
他人さまのロマンスばかり見てるバラ　月子
地
ロマンスの終り扉は開いたまま　伽羅
天
ロマンスはもうモノクロの視野に棲む　森子
軸
シンデレラにガラスの靴のその後など

兼題「紅」　神夏磯 典子 選

鉢に咲く紅梅に鼻奪われる　剛治
あなたに会うといのち紅になる　螢
春うららよちよち歩く紅の靴　五月
燃えすぎて周りが見えぬ紅いばら　はじめ
子に甘い話聞いてる紅生姜　しげお
尼僧にもつましやかな紅のあと　鹿太
寝たきりの老母にも春の紅をさし　尚士
復讐をする口紅の色を選る　雅文
少し紅赤くてもよい春だもの　春
嬉しさに頬っぺ紅潮させながら　かりん
祖母の雛紅鮮やかに過去語る　武庫坊
紅指が昔の恋をおぼえてる　千里
決心がつき口紅の色を選る　正坊
紅椿　短い命咲き誇る　欣子
お茶を摘む祖母がはなさぬ紅だすき　シマ子

紅くらいつけろ言われる日曜日　賢子
いっぱしの抱負を語る紅生姜　靖巳
OLに自信がついた紅の色　澄子
単身地薄紅色の妻が来る　哲男
ひらき直ったピエロの紅が赤すぎる　美代子
忌が明けて少し明るくなった紅　昭子
紅白粉つけぬはたちの匂う肌　達子
やっと紅さす気になって癒えを知る　茜
古稀すぎてまだ捨てきれぬ紅を選る　英子
寂しさに少し濃くかく紅の色　洋
紅顔の少年の目が凍ってる　修
脱皮する少女初めて紅を引く　雅文
愛されて自信過剰の紅いバラ　希久子
よだれ掛けの紅が春呼ぶ野の仏　英子
口紅をかえると心覗かれる　洋敏
紅生姜ここ一番にある主張　ダン吉
虚と実を上手に遊ぶための紅　森子
春衣一期一会の紅椿　柳弘
ほどほどに紅を忘れず母達者　かすみ
極楽へ行きやとうすく頬に紅　洞庵
佳
喪が明けてうす紅いろの風が吹く　森子
どっぷりと女をたのしんでいる紅よ　弥生
もう一度あなたを試す紅の色　扶美代
身のふり方をわきまえている紅生姜　楓楽
紅ほのか白木蓮にあるこころ　文
人
ほほ紅を塗って勢いつけてます　ふりこ

地　洋

いい子感幸せ色の紅をひく
天　楓　楽

紅椿やさしい風に会って落ち
軸

退院の日女に戻る紅をさす

兼題「笛」　大内朝子選

いとしさをメロディーにして笛を吹く　金　太
尺八の音は故郷の風だろう　蛍　剛　治
望郷の想いを誘う祭り笛　雅　文
草笛を吹き少年は風になる　武庫坊
草笛を吹くと心は少年に　月　子
朝の笛低血圧は起きてこず　一　風
SLの汽笛別れを泣いて出る　千　里
鳩笛が遠いあの日を連れてくる　弘　風
妻が吹く笛にこの頃逆らえぬ　仁　清
総理まだ調子外れの笛を吹く　舞　夢
笛吹けど誰も踊らぬ父の笛　天　笑
恋人の笛の音いろが深くなる　いわゑ
響き合う笛があるので生きられる　章　久
妻の吹く笛に踊って日々元気　倫　子
もがり笛鳴るふるさとは老母ひとり　いわゑ
笛吹けば悪友たちが来てくれる　隆　盛
世直しの笛を吹く人待っている　鐘　造
もう誰も踊ってくれぬ僕の笛　睦　子
自分史の音譜で笛を吹いてみる　三　男
笛吹けば太鼓を打ってくれる友　希久子
麦笛は遠く返らぬ少女の日　洋

風物詩も生活かかる海女の笛　柳　弘
草笛の思い出父の肩車　真理子
踊りましょう神様の笛止むまでは　つづや
笛吹けば踊る男が傍にいる　弥　生
スランプの雲去る日まで笛を吹く　ダン吉
たかが笛僕に踊れと言いますか　弥　生
笛吹くと母星だけがよく光る　泰　子
ハーモニカ春の小川が流れだす　森　子
草笛の亡父が戻って来る春だ　泰　子
ナベサダの笛国境を越えてゆく　森　子
笛ばかり吹いてるてっぺんのカラス　洋
少年Aに届きかねてた母の笛　洞　庵
草笛に童謡たんと詰めてある　みつ子
合格の口笛空に溶けてゆく　佳

花は狂気で笛一管に散り急ぐ　美代子
口笛の一番似合う一輪車　たもつ
先頭で笛吹く癖が直らない　靖　巳
葬ひとつ父さんの笛鳴り止んで　美代子
口笛を吹いたら開く窓がある　正　坊
人

天と地がひとつ宗次郎の笛　雅　文
地

喘息の喉笛ならし生きている　たもつ
天

天女吹く笛に黄泉路を辿るなり　薫　風
軸

天からの笛に誘われ老母は逝く

兼題「並ぶ」　桜井千秀選

要らぬもの並んで貰う開店日　清　山
予約して行った歯医者でまた並ぶ　清　山
春物が並ぶと街が活気づく　充　子
チョボチョボの知恵チョボチョボの顔並ぶ　萬　的
白黒の石を並べて我が余生　かすみ
胆石を並べて自慢などするな　大　輪
肩並べ安らぎくれる道祖神　澄　子
バーゲンに並ぶ主婦の目逞しい　和　香
取り敢えず並んでみよう福袋　房　子
椅子取りゲーム並んでいたら停年だ　三　男
独り居も表札二つ並べてる　千　代
預金出す長い列だな春うらら　かりん
安いのはみんな知ってる並んでる　笛　生
ハンサムの横に並ばぬことにする　重　人
雛段に並ぶ弥生の絵空事　美代子
人形も三つ並ぶと姦しい　靖　巳
並んだら嫌だと妻が目で合図　靖　巳
どんぐりも並ぶと大きく見えてくる　たもつ
体温が伝わってくる横並び　泰　子
ツーショット邪魔な男に並ばれる　天　笑
矢がつきた男が並ぶ縄のれん　弥　生
献血に並ぶ 十七歳光る　茜
スーパーの並びは味で勝負する　修
悲しみに並ぶ樒は順不同　遠　野
不揃いを並べて旬はいらんかねー　仁　清
愚痴ばかり並べて幸せ遠くする　楓　楽
家族バラバラ茶碗並べて待つひとり　とし子

並ばれてトップの貌がゆがみ出す　柳宏子
ブランドの皿を並べて料理下手　泰子
並ぶにも序列があって揉める席　庸佑
表彰状以下同文の列に居て　柳弘
広告のカニが並んで呼びにくる　春
社員名簿並べてリストラ考える　とし子
タイムカードへ並ぶピエロの貌になる　雅文
嘘を並べる淋しがりやの盃だ　希久子
佳

国の借金並ぶ数字にある恐怖　武庫坊
名優は序列変えても人目ひく　澄子
宣伝につられて並ぶ好奇心　舞夢
目立たない位置に並んでいる策士　鐘造
兵馬俑並ぶと挙がる鬨の声　正坊
人

追い上げて並んでからの底力　庸佑
地

背く気を抱きまん中に並んでる　ダン吉
天

名人の並べた駒に血が通う　隆盛
軸

居並べばみんな一物ありそうだ　満津子

兼題「達人」　河内天笑選

手品達人わざと失敗して見せる　寿美子
達人につきあいかねている凡夫　賢子
達人と言われる人にある一途　真理子
達人になれず孫子に愛される　伽羅
カーナビより裏道を知るドライバー　睡蓮を聖地の如く描くモネ
達人がこんな所に眠ってる　ふりこ
達人の筆さらさらと色紙うめ　五月
達人は孫でわが家のIT化　欣子
芸ごとの達人もいるホームレス　真理子
達人の失敗談が面白い　鹿太
波乗りの達人チャンス逃がさない　しげお
散らかしの達人をかかえています　泰子
達人の顔で胃薬のんでいる　千代
達人と呼ばれ迷惑しています　朝子
陽だまりで達人ハトを見て飽きず　大輪
パチンコで生計たてている隣　美代子
生きぬいた達人ぎんさんの背中　森子
達人の料理火を吹き宙返り　典子
国宝のおしゃべりをきくかぶりつき　一風
百歳を越えた辺りの達観視　美代子
主役より一瞬光る切られ役　たもつ
達人もやっぱり筆は選ぶらし　弘風
生き方の達人だろう聞き上手　楓楽
達人の語り心胆ゆすられる　修
ハンドルの達人ふっと眠うなり　希久子
達人は己の世界持っている　洋敏
達人のメスを信じて目をつむる　いわる
一芸を語るとき人間が光る　森子
達人の三食僕と同じもの　一歩
達人と呼ばれ孤独に耐えている　利昭
達人の構え力まぬ象の鼻　洋
ありがとう客に言わせたプロの腕　大輪
達人は喋り名人物言わず　薫風
達人にいつも備わる自然体　洋敏
佳

火の車妻は自在に乗りこなし　尚士
達人の寝顔がいともあどけない　かりん
満足はひとつもないと言う巨匠　雅文
達人の船に魚が寄ってくる　義
出来悪い男と添うて達観す　月子
人

ソロバンの達人だったのに破産　かすみ
地

お金など無くてもちゃんと生きてます　寿美子
天

達人の域に達した物忘れ　角野　仁清
軸

瓢々として達人の顔をせず

第9回　風のまち川柳大賞募集

募集内容　「風」をテーマにした川柳

選　者　大野風太郎・橘高薫風・斉藤大雄・尾藤三柳・森中惠美子
（大賞・準賞は町民投票）

応募規定　官製ハガキまたはEメールで
一人3句以内、住所・氏名・年齢・電話番号を明記

締め切り　**4月30日**　7月下旬発表

発表誌　希望者のみ千円

応募先　〒030-1393 青森県蟹田町
「第9回 風のまち川柳大賞」係

老地柳壇

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

八尾市民川柳会（前月分）　宮崎シマ子報

別人が息をひそめている日記　ダン吉
昭和の物価母の日記でよく分る　剛治
真実のこころは日記だけが知る　一風
木戸日記平和の部屋で読み返す　とみを
峠越え日々好日の日記帳　宏
あの時のページちぎってある日記　ばっは
日記には書かずにおこう憎い人　柳弘
木守柿子の帰る日を待ちわびる　民子
友達を褒めて我が社へ迎え入れ　東雲
愛も哀も越えて迎えるフィナーレ　扶美代
年寄りの犬が捨て身のお出迎え　年人
古稀迎え今ひとたびの賭けに出る　のぼる
心経の中へ迎えている仏　欣之
冷えびえと奥の一間のお姑　弘直
日本列島ようやく冷えてきましたな　太郎
マイナスの感情論と冷えている　森子
大きな夢抱いてふるさと出たまんま　たもつ
まだ女夢の続きを見ています　千里
王様の夢を見ている青テント　度

初夢であなたわたしのものにする　弘一
流れ星さっきのことは夢うつつ　美代子
生き生きと夢が溢れる母子手帳　緑
赤ちゃんのにぎにぎ夢がどっさりと　加津子
夢なんか吹っ飛ぶ成人式の乱　柳宏子
むすんで開いて隣と同じ老夫婦　春蘭
ワクワクと句報を開くまでの夢　頂留子
口開けて世相を叩く阿形像　半蔵門
その人の心開けたくなる酔いよ　弥生
嫁やさしにぎりこぶしを開かせる　ますみ
戸を開けて入って来たのは恋泥棒　シマ子

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

夢がなくなった人間どないする　香住
青春の夢を見ていた宝塚　会美
新世紀余生たのしい夢新た　慶子
もう泣くなと妻を励ます夢枕　欣史子
つぎはぎの夢をみてきた深い皺　アキ
古希すぎて女の夢のまだ涸れず　あずき
ひとつの旅で一つの夢を拾ってくる　シマ子
蛙の子やっぱり蛙の夢をみる　喜美子
ふくらんだ夢もてあます戎市　弘直
風紋を掃いて砂丘の風走る　清芳
初春のカラス明るい声で鳴く　能子

川柳塔みぞくち　小西雄々報

友達へ鬼も蛇もいて楽しいな　智恵子
新春風にルンルン脱皮したい蛇　豊枝
初夢に白蛇福の神を連れ　久子

軒先に蛇のぬけがら血の気引く　和代
白蛇は金運よぶと喜ばれ　鈴枝
初夢に蛇が出てきて語りかけ　公美枝
小心かひっそり暮す蛇もいる　弘子
蛇皮の縁起財布で金貯める　静江
池の神美人大蛇の悲話があり　康女
十二支の巳が新世紀への幕あける　正光
冬眠の蛇も地震で目が覚めた　雄々

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

老人会やがて行きます気が向けば　無禄
やがて喜寿残りの生命考える　ルイ子
あまりにもやがてが早くきて一人　よ志子
掌中の珠にやがては背かれる　尚士
人は皆やがてははてる風の音　〆女
小さいが心落ち着く椅子がある　比ろ志
新世紀やっぱり去年と同じ席　高栄
定位置に父が座っている安堵　澄子
嫁ぐ朝父は立ったり座ったり　武史
難問を解く鍵ドラマから拾う　庸佑
裏話の方が興味の湧くドラマ　スミ子
乱気流の中で終わりのないドラマ　泰雄
ぼくに似た顔がドラマで騒がしい　節子
此処だけをドラマにしたい薄明かり　満寿蔵
一枚の名刺でドラマ動き出す　靖巳
百歳の皺台本にないドラマ　しげお
花一輪ささやく如く無人駅　義一
黄昏に酒がささやく縄のれん　五月
ささやかれ高なる胸を抱きしめる　吉之助

おみくじは神のささやきかも知れぬ　あやめ
ささやいて幸せ通りを探そうよ　礫
ささやきの甘さに油断してしまう　重人
耳もとで春を知らせる風の私語　鹿太
若さには勝てぬパソコンが笑う　稲子
気紛れな女と猫はよく似てる　活恵
似た顔が三代揃い屠蘇祝う　治三郎
年金で人工呼吸する二人　秀夫
こころから笑うと涙転び出る　紫香
寝姿を大事に紅椿は落ちる　晴美
日本のシンボル日の丸翻る　柳宏子

岸和田川柳会　長谷川呂万報

幸せね友の指摘をかみしめる　弘子
幸せを願う茅の輪をくぐり初め　盛之
背伸びせぬ暮しに温い春の風　仁緑
何はあれ幸せ顔の棺の中　美智子
最高の敵といわれたうれしさよ　すみえ
LLの幸せためている脂肪　松風
朝の陽に幸せ思う病み上がり　基
幸せか時どき猫に聞いてみる　ダン吉
推定の話に花が咲く床屋　洋
推定で人出かぞえる初まいり　昭二
推定の楽しさ詰めて福袋　みつ江
列島に人口ゼロの日が来そう　蛙城
推定でも事実と大差ない自信　甚一
推定の歳より若いおばあちゃん　狸村
成功のあとに欲しがる名誉職　俶子
グライ粉の痛さ知ってる成功者　愿
失敗のおかげで摑んだノーベル賞　東吉
成功をすれば親戚急に増え　穣一
美しい汗光らせてある成功　路子
押して押して引かずデートがうまくゆく　呂万
馬券買う大吉引いて有頂天　東雲
若いのに相当前からアデランス　さよ子

三幸川柳教室　三宅　保州報

身を飾るよりも心の鏡拭く　マリ子
お互いに飾って負ける人情味　健三郎
少しだけ飾って嫌味申し上げ　正一
粉飾の秘密を洩らす梯子酒　伸二
戦いがすめば飾りも泡と消え　豊太郎
終焉を飾る下絵はまだ白紙　三千子
飾らない寡黙の一矢胸を刺す　鉄治
冬には冬の花で飾っている矜持　公子
ちょんちょんと笑顔で飾る新世紀　正甫
飾るものない裸木が凜とする　昭枝
渦巻いた水底にある浄土かな　美智子
政局の渦中で主役腰砕け　嘉平
新聞のどこ開いても黒い渦　和子
情報の渦に自分を見失う　保州
インターネット渦巻き地球眩暈する　千秀
激動の渦に埋もれている史実　桂香
三人の姫たくましくかしましく　義雄
靴のサイズ姫のものとは思えない　和代
玉手箱おと姫様にしてやられ　章子
親指姫命の次にiモード　美子
まだ女妬心小出しに姫鏡　さち子
愚痴を吐く姫を宥めて小芋煮る　登美代
キムタクよ姫の涙が止まらない　町子
新婚の時は呼んでたねえ貴方　み ね
北風も春風もあり新芽吹く　碧
新世紀ついてくるなよ影法師　栄之進
ITに乗れず古新聞を読む　当代
新聞を取りに行くのはお父さん　キミエ
ニューイヤーコンサートから年が明け　孝子
捨てるもの捨てて待ってる新世紀　起世子

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

野の一樹誰にへつらう事もなし　ひかり
考えを変えれば笑い事で済み　よしみ
職退いて義理が年金食い荒らす　まさる
紅少し引いて女の貌にする　あきら

佳句地十選（3月号から）

山本玉恵

うたた寝の小さな母の小さな咳　美弥子
飲み込んだ文句が喉に引っかかり　千秀
和やかな顔のままでは戦えぬ　汎美
伸びきった輪ゴムお前も定年か　はじ芽
鶴一羽おりて枯野が狂い出す　節子
可能性まだ捨てきれぬ火種抱く　賢子
阿吽の形で化石になってゆく夫婦　輝子
百までの予定ゆっくり日を紡ぐ　清子
炎の橋をまっすぐ渡る炎の一途　欣之
宇余りの余生を如何に生き抜くか　武庫坊

ためらいの紅が濃くなる三回忌　マツエ
踏まれても雑草舗装路突き破る　吟笑
物心ついた時から猿芝居　坊太郎
ホロ酔いの男は口が軽くなる　文仙
クラッカーを鳴らし世論に火を付ける　八重子
待ち切れず積雪割って蕗のトウ　放任
岸の草焼くなツクシが火傷する　治延
言い勝った嫁に姑が手なづける　輝夫
宴会を終ってからの千鳥足　いさむ
苦労した老母と手相がよく似てる　勝
自分史の処どころに泣いた痕　かおり
割れ鍋にとじ蓋夫婦長持ちし　奴凧
四十余年職場の椅子も軋み勝ち　寿々女
此の年で何が師走だ急ぐまい　貞月

大原川柳社　矢内寿恵子報

さまざまなニュースの中の新世紀　あやこ
夢かたく抱いて踏み出す新世紀　さちこ
新世紀かすかな夢の宝くじ　みづえ
新世紀心のたすきしめ直す　玉恵
新世紀夢満載の船を漕ぐ　辰江
除夜の鐘合図新世紀へ渡る　妻子
躍進を続けて行くぞ新世紀　南花
新世紀三世代にもある一歩　悦子
雲行はどうあれ変らぬ新世紀　喜美子
老いの身は忘れ進もう新世紀　巴子
年とれど夢追い続ける新世紀　しず
新世紀踏み出すドラマ幕が開け　こふゆ
新世紀期待と不安交差する　敏子
三世代住んで感謝の新世紀　美佐子
もう予定びっしり詰まる新世紀　みさえ
賑やかな孫と語ろう新世紀　たづ子
新世紀支える愛のいい門出　ひでの
四股踏んで気負う老父の新世紀　はるみ
山海の珍味で祝う新世紀　昭子
新しい歴史始まる新世紀　絹子
健やかに迎え頑張る新世紀　静子
惚けてなどおれぬ取りたて新世紀　あすなろ
百八つの余韻で明ける新世紀　はじ芽
未知数へ夢がふくらむ新世紀　寿恵子

ふくべむら川柳　橋本多哥由報

癌的中延命手術など要らぬ　洋々
関ヶ原今なら天下誰がとる　寛子
白は白今なら言えぬ辞表抱く　はじめ
ダイエット食生活に的しぼる　健二
泣いたこと今なら亡母の愛と知る　依子
夢だったハワイ今なら行けそうだ　和甫
変化球今なら軽く受けとめる　春恵
難聴で老母の返事が的はずれ　信子
物忘れするが今なら字も書けぬ　つね
適齢期今なら花よお嫁入り　操子
やさしくて美人を嫁に的を射る　多哥由

川柳塔唐津支部　久保正剣報

しゃがみ込み寝っ転がって買いたがる　兵八郎
手の届く先までころげ木の実独楽　實
老斑の顔なつかしき同期会　輝夫
妻知らぬ預金口座を別に持ち　高明
語り部に耳貸す者の減る平和　勝視
非婚化に出雲の神のティータイム　水笑
初雪や雑炊温し老妻と居て　幸夫
裸木が新芽纏って季は移る　晴翠
昔式消火器嬉し出初式　タミ
福引きで貰ろた上衣で若返り　虹汀
代診が一部始終を聞いてくれ　四郎
婚の荷をゆらゆら運ぶどんこ舟　正剣

川柳塔なら　坊農柳弘報

屠蘇祝う去年は去年のこととして　理恵
悔いいくつ獄舎に泣いて雑煮餅　たけし
新世紀祝って巫女の鈴が冴え　富子
数の子も雑煮も茶髪義理で食べ　真理子
新世紀雑煮の味はオリジナル　カズ子
年おんなは二千一年祝います　美和子
袖触れたご縁うるさい子沢山　佳子
息子と飲めば良薬なりし祝い酒　さと美
雑煮よりホットドッグと孫が言い　博一
カネに縁遠いが厚い人の情　あやめ
宇宙への話も弾む雑煮餅　春雄
お祝いの手締め一本景気よく　むつみ
一町の田が縁談の邪魔をする　秋泉
男と女の線を引いてきた縁　茂雄
祝福のシャンペンの音飛んで行く　春蘭
現なまの薬が効いた口封じ　とし子
母の敷くレールに乗らぬ子の縁　美恵子
這い這いの孫も仲間に祝い箸　絹子

慶びの酒は樽から汲むが良い　良一
振り向けば人のご縁の数珠の跡　眞生夫
知らぬ間に歳をとってる祝い酒　卓
結局はお餅一つという雑煮
雪国の雑煮は冬の彩を盛り　洋子
お医者には無縁早起き万歩計　道子
五十年阿吽で越えてきたいのち　和夫
小さめに丸めて老いの雑煮餅　秋雄
片減りの靴で出世に縁がない　美千子
三人で止める合意の避妊薬　一風
屠蘇祝うまだ続編のある限り　總一
歳月にすべてを許す雑煮餅　章久
　　孝子

川柳大阪　坊農　柳弘報

消えてから威勢よく来る消防車　潔
しなやかに私の時間抱きしめる　民子
人じゃない鬼畜の一家皆殺し　隆司
熱い風呂そろりと浸る寒い夜　剣山
この妻を選んだ自分誉めてやる　喜楽
ワンランク落として選ぶ進学校　照月
年明けてきばるあんたが好きやねん　宏
出動に憲法九条横たわる　司
好きやねん何が何でも大阪弁　かよこ
大声で笑う所が好きやねん　美花
悪い事しません選挙近いから　利昭
ダメ親父目方で物を言っている　信酔
母さんの笑顔が一番好きやねん　洛酔
警察と暴走族と野次馬と　青道
好きやねん皿まで食べてやるさかい　柳昌

雪国の除雪の大役ラッセル車　川童
愛情の深さを計るロゼワイン　秋雄
計量の針を疑うダイエット　聰一
選ばれて殿堂入りの老投手　一風
公約を信じて選び裏切られ　鉄心
現ナマを積むと出動する検事　希久志
口惜しいが自由選べぬ紙おむつ　章久
新世紀どうってことない青テント　本蔭棒
好きやねん隣の猫の主さんが　一歩
核ゼロを計のトップにする世紀　ダン吉
訓練の時の出動速すぎる　柳宏子
レスキュー出動子猫一匹保護される　まつお
各停を選ぶゆったり生きたくて　金太
父の背の大きさ後を継ぐと決め　重人
一年の計も初荷で持ってかれ　柳弘

川柳高知　川竹　松風報

母さんが僕を点取り虫にした　佳風
肩書きが取れてこんなに軽い肩　愛宏
取り敢えず酒で濁しておいた嘘　孝雄
冬の陽はストンと音をたてて落ち　快風
かさこそと音が私を追ってくる　幸
泡の音までも美味い大ジョッキ　圭風
補聴器をはずし平和の音を聞く　功
元気よくお古ばかりの三男坊　今子
まだおんな古傷疼く夜もある　千鳥
古代史は埴輪が語るほうがよい　美々
何時からか数えで歳を数えない　和江
古い知恵借りて子育てホッとする　京香

金貯めてゆうゆう自適とは古い　京子
ライバルへ心の鍵は開けてある　てるみ
ライバルに会うネクタイを締め直す　良雄
ライバルも私も同じEカップ　哲史
悪酔いをしたライバルの祝賀会　三郎
ひと昔ライバルだった友と酌み　松風

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

若くして護国の鬼となりし友　隼人
うかつにも鬼の服薬見られたり　順風
大漁旗畳んで帰る艫が重い　慕情
一匹の鬼定款を食い千切り　銀波
風花の冷えに揺れてる顛末書　花匠
鬼の面つけてリストラ言いわたす　愁女
灰ならし鬼の泪をみてしまう　黙人
鬼の面外してもなお鬼の顔　花峯
平成の鬼はピーナッツ怖がらぬ　一花
裏庭に鬼を一匹飼っておく　劦
反乱の狼煙をもやす鬼の面　五楽庵

竹原川柳会　時広　一路報

あったかい部屋で犬と一緒に昼寝する　(大1)千枝
やがて尾は消える飛び立たねばならぬ　蘭幸
大きさに捨てがたくなる鯛の尾も　孝枝
凧の尾のバランスもよく恋女房　万年
生きのよさ尻尾立てる鯛さしみ　千年枝
尾を立てる事もなくして七十路行く　正宏
尻尾振り芽の出る時を待っている　蝸牛
リハビリで箸が持てたとはずむ声　敬子

箸袋に一句をそえる趣味を持ち　房子
しあわせは家族みんなで祝い箸　笹舟
亡父さんの箸は一番長かった　年子
旅先の名残り楽しむ箸袋　慶子
左利き箸の握りが気にならぬ　節生
森林が慟哭してる箸もある　節夫
割箸をうまく割っても一人部屋　笑子
おなじ夢追いかけた日の夫婦箸　栄恵
割り箸の先に広がる新世紀　眞由美
男女平等箸を見習えないものか　半覚
どこもかしこも禁煙固まる愛煙家　夏喜
気の合わぬ煙たい父も親なるぞ　喜久恵
部屋中に禁煙デスと貼ろうかな　汎美
壁に家具に亡夫の紫煙こびりつき　貞子
煙草好きの祖父は九十まで生きた　勲
諸行無常煙の中の亡父と会う　菁居
初恋の煙もまじっている焚書　不朽
享年三十三母を偲んでいる煙　静風
湯けむりの中で喜寿じゃよ傘寿じゃよ　力
永田町煙の中が好きらしい　一路

城北川柳会　川久保睦子報

大和路は足の踏み場もない遺跡　秀夫
祖母の腕計ったような味を出し　東雲
半衿に色香を残す喜の祝い　求芽
白星に自信体が炎えている　一枝
スリップもジャンプもあって生きてきた　静枝
日記帳昨日も今日も以下同文　登美子
歩くたび風に落ち葉がついてくる　八重

土壇場をちゃんと切り抜け母強し　達子
背中をかいてもらえる絆もっている　春蘭
政局が揺れておでんといい仲間　とし子
飛行雲シスコの空の深き青　昭子
はらはらと落葉の私語も世を嘆く　高栄
横向きに咲いた花弁で憎めない　睦子
いいすぎた口を両手で蓋をする　はじめ
万札の羽根も切りたい師走風　トヨ子
大学は出て職業はフリーター　倫子
たそがれていても一応髭を剃る　ただし
一病を宥めすかして旅支度　白峰
法善寺恋の愛のと苔深む　志華子
母譲り娘の夫操縦法　順三
ゆっくりとその日を想う仕舞風呂　久留美
熟れ過ぎて落ちた柿にも青い頃　典子
みえすいた世辞もうれしい歳となり　道子
大赤字福祉のせいにされている　一歩
フルムーン　シルクのスリップ火照る妻　柳弘
うっかりともらす本音に四面楚歌　あい子
九十九折女のいくさまだ続く　千里
ひとり炊きひとりで食べて事もなし　あやめ
世紀末ベートーベンも忙しい　綏子
新世紀の光見たくて竹を踏む　公一

うぶみ川柳会　上田宣子報

ポケットの石は無口なままである　ひろこ
無口な子するどい爪をかくし持つ　華子
無口だが先を読んでる三男坊　雄人
失敗から得るものもまた大きいぞ　天雀

激論も損得ないと知らんぷり　くにお
躓いた石から礼を心得る　螢
金でない得るものもあるボランティア　ユリ子
切磋琢磨理想の椅子を得るために　黙光
もう取ってやりたい落ちそうなボタン　健一
これ以上叱られるのはもうごめん　あづま
もう一度くしゃみをしたら風邪ぐすり　葉士人
控え目ももうこれまでにしておこう　登美枝
もう少し入ると思う酒の瓶　良男
神様に無許可祭日改める　天人
改心の兆しが見えた丸坊主　芳江
もう一度話し置きたい事だった　一枝
カーナビはすでに私の手の内に　宣子

倉吉川柳会　松本よしえ報

米寿まで良し乗ったるぞ新車買う　重忠
酔うたんび箒立てても泊る気だ　みち子
二代目の家紋を抱いて修羅つづく　睦子
たじろがず家紋を守る女傘　きみ子
家紋継ぐ若者なくて過疎の村　智子
良妻賢母知るや知らずや若いママ　(前)喜美子
火も風も呑んだ家紋に今がある　雄々
通信簿父の目けわし良二つ　都子
お師匠の良しのひとことすぐ天狗　松盛
立春にもうもぞもぞともぐらの子　よしえ
食うも良し喋るも良しの姉妹会　和枝
紋聞かれさあと言っている我が息子　久子
芸術家のつもり狂気の沙汰も良い　瑞枝
死んでから良妻でした遅過ぎる　秋草

聞かれても我が家の家紋せせらせら　日出子
葬式の時に家紋を知りました　一夫
少しぐらいの貧乏がちょうど良い　螢
旧婚で泊る山合湯のけむり　小生
家紋提灯今はあの世の道案内　克枝
眉唾の家紋やたらと振りかざす　節子
家紋なし笑って生きることにする　賀寿恵
立春を過ぎて杜氏の父帰る　幸子
鼻先に家紋ぶら下げよく喋る　芳光
娘の部屋に泊る覚悟で彼が来る　ゆり子
ゴッホ家の家紋はヒマワリである　石花菜
長の逗留乙姫さまは美女だった　季芳
家柄も家紋もないが税払う　次男
私もまだヤゴなのよ土筆殿　和歌子
あやまれば良しとするのか成人式　天雀
立春へこころの雪も溶けて来る　由多香

川柳塔打吹　米田幸子報

四畳半もの凧あげる風まつり　玲泉
青畳何かあるぞと村雀　孝恵
法律の網目スマートに潜る　和枝
口コミの法にはまった落とし穴　善江
畳にコタツ日本情緒にどっぷりと　龍枝
気分よく飲む居酒屋の指定席　松盛
法律が涙流して叱ってる　しろう
濡れ場面畳が薄目あけて見る　季芳
背き始めてからの法律では遅い　きみ子
自分だけ許す法律持っている　睦子
少年法変えても悪の芽が摘めぬ　かつみ

その昔アンタ アタシの四畳半　セツ子
ムードには弱い淑女のロゼワイン　よしえ
法律は成人式にやぶられた　一夫
根棒が好きな私を裁けまい　和歌子
なまめかしいムードに酔って人生はずし　幸香
新世紀ムードきびしく幕が開け　禎元
盛り上がるムードのコツを熟知する　勝見
フルムーン二番煎じの良いムード　克枝
出迎えた顔に畳の跡がある　芳光
低齢化した犯罪が法を変え　京子
古畳みんな見て来た聞いて来た　定明
畳には大の字僕は日本人　玲坊
貧すれば鈍するムードから逃げる　螢
退院を青い畳が待っている　由多香
化粧して倦怠ムードから抜ける　美ッ千
六法の網を潜ってよく泳ぐ　節子
法律はどうあろうともホームレス　雄々
憲法をこねくりまわしトテチテタ　石花菜
法の網潜って金を貯めてきた　幸子

京都塔の会　都倉求芽報

ぐんぐんと育ち明日を担う子等　美智子
見て見てとぐんぐん上がる孫の凧　葉子
叱られたけれどぐんぐん好きになる　礫
亡き母の歳にぐんぐん近くなり　益子
成人式ぐんぐん娘らしくなる　ルイ子
へび年は脱皮重ねて年をとる　英旺
蛇の皮入れたが増えもせぬ財布　庸佑
雪しんしん街角で逢う蛇の目傘　友熙

年賀状 蛇は可愛い顔ばかり　満子
とぐろ巻く程には飲めぬお小遣い　幸代
脱皮して家は脱けがらだけの妻　宏子
出方次第で鬼にも蛇にもなるわたし　百合子
脱皮して泣かない蛇になってゆく　諷云児
男手の包丁らしい鍋の味　英一
反省をしているらしい子の便り　典子
水面下どうやら始末したらしい　ただし
隠してもお目出度らしい腰の振り　高栄
春らしいが何故か淋しい北の宿　波留吉
お孫さん来ているらしい笑い声　啓子
あの噂 本当らしい女傘　芳子
親子らしいぶっきらぼうな温かさ　輝美
行間を読める眼鏡を探してる　美穂
片想いその一途さが怖くなる　福子
愛一途 純情だった若かった　正坊
共に老い影が一途について来る　吉之助
修正がきかぬ一途な向う脛　求芽
ソウメン干す腕に一途な冬がある　〆女
たそがれに去る人追うている一途　紫香
追い越してゆく秒針にある一途　慶太
恋一途 父母さえ視界から消える　柳宏子

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

左遷され鬼の課長で迎えられ　東園
子鬼には甘納豆を投げてやり　純
子供らの鬼おう声に雪がまう　節子
抜け落ちた角のありかを探す鬼　久子
まち針を綺麗に差しかえ二月かな　しづ子

恋人待つ時計の針のもどかしさ　千恵
麻酔針ふわりと過去を消してゆく　和子
返し針過去の歩幅を確かめる　満寿蔵
黄信号焦らずのぼる八十路坂　十四郎
黄色の声が飛んでいる応援席　夢之助
蠟梅に母を重ねて春を待つ　郁子
枯野まで春を探しに水の嵩　年代
夢幾度洗い直して現在地　比ろ志
卒業期鳴りを鎮めた楽器たち　光穂
焦げぐせの付いたお鍋をやっと捨て　正子
アクセルを噴かした足がなえている　寛之
一人暮らしだから不言実行　弘一
街に住む鴉昔の貌がない　武庫坊
ナンバンギセル良い芽が出たと里便り　糸子
お互いに考えている冬の蠅　紫香
木瓜咲きぬ老犬の後蹤いてゆく　薫
ひっそりと揺れる元旦のブランコ　静
海鳴りへ折れた鉛筆を数える　芳子
冬の雨歯医者の予約七日前　昭三
わが家にも疲れをためた年男　恵子
風花に時間ひとつのバスを待つ　義芳
燃え落ちた椿弔うワインは赤　孝一
傍目より傷ついている夫婦箸　澄子
三糎の雪が制圧した都会　沙置子

川柳ささやま　酒井　靖子報

開帳の御仏に会う杖をつき　純子
せい一ぱい伸びて輪ゴムは耐えている　恵美
赤い靴はいてジャンプをしたくなる　多美子
憧れの都会を捨てた四季の幸　美智子
生き甲斐という風船にジャンプする　八重子
残り火を抱いて初心の春を呼ぶ　とみ子
夢を追う初心に架ける橋がある　つや子
初心者の作る菜園虫もつく　かほる
愛の杖借りてジャンプをしてみよう　君代
新春が初心にかえし研ぎ直す　毬子
明けまして初心に還る深呼吸　房江
わたし流のジャンプK点視野におく　寿子
パワージャンプ私は老いた回り道　美緒子
老化する脳もジャンプの時を待つ　美紗子
門標も初春の顔なり新世紀　冨美
くたびれた背広に消えている初心　可住
もう一度憧れを抱く返り花　靖子

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

大御所が人形だったとは知らず　紀久子
大御所で居させてあげる定年後　輝子
妻という大御所の喝逆らえぬ　あき子
大御所と煽てにのった三枚目　三男
大御所の任せなさいに救われる　和重
発車ベル鳴り駅長の顔になる　幸
駅長はお猿さんです花電車　大輪
駅長の頭に詰まる時刻表　正博
駅長の胸を飛び出す縄電車　英子
妻は駅長走り続ける僕を待つ　(榎)公子
駅長にいらいらさせる酔っ払い　豊太
駅長の帽子に刻む時刻表　和子
駅長の帽子の下はどんな髪　呑天
駅長の祈り引きつぐタブレット　めぐみ
SLと生きた駅長自負がある　冨美子
ビルの森ぬけ駅長へ手弁当　真弓
終列車送り駅長風に立つ　利治
真っすぐに歩こう乾燥剤すてて　稚代
乾燥剤たっぷり吸ったお雛様　精子
無味乾燥で終らぬ父の意地がある　さち子
人畜無害無味乾燥もいやですわ　克子
保湿機がほしい私の独り部屋　信子
巳年生まれでなかなか乾燥しない鬱　射月芳
わが家では強い味方の乾燥機　三喜夫
乾燥注意予報官の喉も涸れ　和香
札束に無味乾燥の寒い風　紀美女
病室で乾燥してる千羽鶴　千寿子
乾燥した心で愛が見えますか　(柏)優子
ドライフラワー恋のうわさを抱いている　寿子
老いにつれ人も乾燥嵩が減り　佐一

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

友情に少し悲しい嘘があり　はるみ
降る降らぬ占う如し雨蛙　かつ子
占いに右も左へも動かれず　聖子
決めたのは占いですともう言えぬ　恵美子
花占い最後の花びらもったまま　好栄
占い師自分のことはわからない　ちよえ
哀しきこと多き氷雨降り止まぬ　民子
友情は貴様と俺も一ツ星　博利
占いは凶でここまで辿りつき　清泉
ヤミ金で生まれた医者に殺される　白汀

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

新世紀人間らしく生きたいな　武子
ぼちぼちと春の準備をする冬芽　弘子
窓いっぱい開け不景気を追い払う　はるお
跪く祖母の作法が偲ばれる　みどり
膝小僧やせてきたって音をあげぬ　茂
お偉方ばっかり膝など崩されず　八重子
膝を折り声を落してする無心　英夫
膝小僧抱いてすねたい昨日今日　茶子
やさしそうに仏間に写る母の影　久枝
立ち聞きの影が映って話変え　房子
青春の影絵に恋の二つ三つ　くに子
寄り添って水面に映る影ふたつ　かつ乃
張り替えた障子明るい新世紀　幸枝
膝頭たたいて無理を聞いてくれ　和子
膝の上に抱いた娘もやがて嫁く　きみ子
喝采に届かぬ影と心得る　盛桜
よく我慢したなと影を振り返る　睦子
影のある男がうまい事を言う　実満
仏壇へせがれの影が呼びに来る　(故)隆風
うるわしく五人囃が引き立てる　喜与志
麗しく樹に寄り添っているわたし　小鹿
黒髪へ霜おりている麗しい　富久江
一族を束ねる老父の麗しさ　野草
麗しい系図も知らず荒れている　孔美子
言うなれば豆腐のような君が好き　節子
銘水の豆腐いつもの膳になる　汲香
湯豆腐の湯気の向こうは沈黙戦　公子
豆腐には雪花菜(おから)になった母がある　諷人
許そうと決めて豆腐を真っ二つ　螢

西宮北口川柳会　亀岡哲子報

娘かとはっと見とれた菊人形　哲嗣
竹人形わたしの父も頑固者　しげお
目を入れてそれから人形血が通い　千代
居て欲しい嫁いでも欲し雛飾り　澄子
人形は人を侮ったりしない　諷云児
天窓がいちばん早く春を呼ぶ　富喜子
魂がひっそり一つ天へ飛ぶ　美代子
天を眺めて楽しい夢を描いてみる　武庫坊
真っすぐに天まで伸びよ杉の苗　松煙
天命と思えば楽しマイウエイ　みつ子
起承転それから先は秘密です　哲男
秘密ばれなぜかせいせいしています　いわる
話したくない秘密マスクをしておこう　能子
大笑いすると秘密が転げでる　義子
当りくじ秘密に出来ぬ我が家系　てる
此の秘密いつかマグマとなるおそれ　無禄
コピー機に二重丸秘の忘れもの　造
秘密など無くて愛妻しています　光久
暗号が解けたころには一人きり　求芽
少年の迷路に血気あふれでる　比ろ志
手弁当母の愛情あふれてる　春蘭
産声に思わず涙あふれ出る　江美
情報があふれる社会におぼれます　高栄
美辞麗句あふれる舌をもて余す　靖巳
あれこれと夢があふれる母子手帖　周信
住所録消すと涙があふれ出す　正坊
姑が留守で大声鬼は外　五月
骨粗症贅は望まぬさんま焼く　トミヱ
寒い日も陽はぬくもりを忘れない　鹿太
まだすこし登り坂あり靴の紐　たず子

岩美川柳会　石谷美恵子報

婦長には弱い研修医の自信　忠良
日本海の底には夕陽埋まってる　公乃
癌で死ぬ自信があって煙草喫う　螢
助手席にスピード狂の妻がいる　たぬ
人間の醜さ包む日本海　季芳
コメントはどうあれ愛のスピード婚　きみ子
寄り添って歩いてくれるお月さま　完司
ぬるま湯の男を扱く日本海　孝男
添うことは忍耐ですか愛ですか　一瑶
のどが渇いた日本海を飲むまいか　蟹郎
もういいよ寄り添う母に鶴の声　和歌子
先進の文化渡来の日本海　圭一郎
生意気で自信過剰が命とり　一夫
顔ぶれが揃うと日本海に出る　睦子
笹ゆりを百花咲かせて自信もつ　重忠
添ってみて七癖みんな知りました　一京
玉串の中に隠している野心　大漁
一串のダンゴにもある主義主張　節子
添え書きに一句が入れてある賀状　静生
真っ赤な陽今ビーナスを飲みかかる　克枝
添うことも出来ず明日の橋渡る　多哥由
添う事に馴れて人目をはばからぬ　かつみ

子を五人育てた自信母の背に　裕子
寄り添って歩く本音は別らしい　徹
法守り走る車は邪魔にされ　喬水
一本の串に残ったのは私　雅女
私を癒やす日本海のいい香り　美恵子

川柳会梨花　石上悦子報

パラパラのこん平糖がほろ苦い　(最)和枝
高い種パラパラと粗く蒔き　美恵子
パラパラの歯ぬけ爺が豆をかむ　重忠
ぱらぱらと聞いた拍手は忘れない　一夫
木枯らしよそんなに真面目に吹くでない　求芽
ポスターに俺の名前がもれている　修
劇はもう終わったらしい棺の中　幸子
二千年終りは蛇に化身する　螢
鬼になり仏になって両成敗　蛙
朝日射す孫の顔には春が見え　宏
禁断の蟹のフンドシ食った熱　蟹郎
正月を待った世代は老年期　はじむ
影以外誰も付いては来ない冬　よしえ
小さめのパパに大きなママがいる　行男
笑いがお目は三角だ怒ってる　まさ子
きつねうどんのあげ三角かいや四角　章久
三角に豆腐を切っていた悲劇　忠良
心の底から怒っている眼の色だ　真砂
三角の消しゴムで半分生きる　和歌子
三角の角でちょくちょく悪さする　睦子
蒔いた種必ず生える因果の芽　高栄
生きてれば必ず逢える時がある　東雲
必ずの約束詰めるカレンダー　典子
月光仮面必ず来ると思い込み　ただし
必要な時だけ利用された顔　(前)一枝
極楽で必ず待っているという　芳光
必ずはふところを出る娘を思う　きみ子
電話では必ず行くと言っていた　(明)かつみ
辛くても必ず過去になっていく　(石)悦子
必ず止まる心臓と腕時計　石花菜

かわはら川柳会　上田俊路報

ジャンプへの助走はじめる新世紀　一薫
我が家にも新世紀にはITを　静子
銃捨てた重さをつなぐ新世紀　泰良
新世紀春待つ梅も節づいた　悦子
開かれたホームページも出来ぬ歳　登生
あなたにもいつかは開く技がある　余吏子
開かれた棚田の崖に祖の思い　聰
玉手箱開けて余命を聞いてみる　俊路

川柳塔まつえ吟社　恒松町紅報

自転車が凶器に見える凍る道　俊一
凍る道選んで歩くランドセル　(安)幸子
一瞬に凍る鮮魚の目が哀し　房子
雪達磨さえ着脹れる凍てた夜　多賀子
幸せな色で凍っているお鍋　たけし
しんしんと凍る夜道の千鳥足　政子
凍らせた精子目ざめる母の海　茂美
凍る夜は丸い笑顔が囲炉裏ばた　ちえこ
滑り台下りて大きな深呼吸　久枝
滑らかに出ない言葉に息をのむ　邦代
雪晴れというまぶしさを滑らかに　螢
潤滑油足しては命走らせる　昌枝
なめらかな肌ね幸せなんですね　日出子
滑らかな話　炬燵が盛りあがる　雪代
滑らかな口調で病告げる医者　淞丘
さりげない言葉の中の気の配り　桂子
わたくしの一句賀状にして配る　義良
なんとなく気配り多くなる同居　秀子
宅配便嫁の真心福袋　(米)幸子
気配りが過ぎて小石にけつまずく　昭二
気配りの母の思いが今わかる　保子
借金も貯金も無いが笑顔あり　注湖
財産は無いが負け犬にはならぬ　煩悩児
思い出を無くして割れるシャボン玉　すみこ
ドラマから夢を気ままに盗んでる　紫晃
もう後が無いと気付いた底力　静恵
何事も無くて夫婦の紙相撲　章峰
気まぐれな子猫を飼ってくたびれる　太泡
庭に来る鳥と気ままな午後すごす　知恵子
何もかも気ままにさせたつけが来る　叮紅

はまゆう川柳会　中後清史報

コンビニのおせちで明けた新世紀　雄造
コンビニの店を覚える妻の風邪　泰作
お隣にコンビニ出来てママ昼寝　サト美
コンビニのレジに茶髪の美少年　苗子
暗闇に灯りコンビニ眠らない　佳子
コンビニでうるさい人に覗かれる　さだ代

美味しいと言えばコンビニ食と言い　国彰
コンビニのおでんチンして独り酒　登
割り勘も下戸から見れば不公平　清史
そっと立ち勘定先に済ませてる　恵美子
割り勘で気楽に呑んだ千鳥足　平和
気兼ねない割り勘でいくおつき合い　生米子
勘定が入ると錆びてくる絆　利ぼん
人生の勘定はまだわからない　悦子
ゼニ勘定だけは達者なうちの姑　てる坊
損得の勘定などはない握手　修也
ちぐはぐな弁解してる脂汗　太一
うそ一つそれから話ちぐはぐに　すみれ
ちぐはぐな夫婦を歳が巧く染め　公治
ちぐはぐとぼやいてみても世の流れ　光
悪気ない嘘がちぐはぐ掘る墓穴　雅視
ちぐはぐに会話進まぬ遠い耳　美佐子

尼崎尾浜川柳会　田辺鹿太報

紙人形母の乳房をかいまみる　その
ハンドルに鼻唄つきで彼が来る　幸子
人柄が良くて何でも引き受ける　江美
お多福にそっくり母の笑い顔　鹿太
顔つきも似てくる夫婦の温かさ　房江
親に似てわがまま通す孫娘　保夫
レントゲン山ほど脱いで芯が出た　昭三
遺伝子のいたずらだろうへそ曲り　義芳
花時計もう春ですよスカーフは赤　孝一
似て非なる双子の動き見て飽きず　尚利
犯人の似顔そっくり疑われ　哲嗣

古里の目覚めは母のお味噌汁　まさ
味噌くさい女で今日を突っ走る　イサミ
孫娘私に似たか美人です　亀与子
自家味噌で育って老いた祖母卒寿　弘治
入れ替えをしてもらいたい脳味噌を　夢之助
絶妙のハンドル捌きで世を渡り　正治
似ると言う恐さを知った子の仕草　満寿蔵
ハンドルを持つ手で対話する聖書　澄子
ハンドルの捌きで分かつ明と暗　十四郎
ハンドルを握ると若い血に還る　諷云児
宅急便母手造りの味噌匂う　柳宏子
ハンドルも命も貴方なら預け　紫香

南大阪川柳会　吉川寿美報

両手添え一品ほめている茶碗　幸子
この一品あれば二合は飲める父　遠野
まだ来ない一品を待つ残り酒　三男
一品追加幹事の腕の見せどころ　洞庵
あと一品は何かとおでん長い箸　庸佑
出発の露地のアパート懐しむ　重人
露地を出て知る露地裏のあたたかさ　修
名所より心ひかれる京の露地　憲太郎
軒つたう露地の噂に彩がつき　たもつ
太陽を丸ごとかじる露地野菜　章久
人情が迷い子になった今の露地　ひさ乃
露地裏は花も陽射しも分けて住む　直子
露地の奥おでんのうまい店がある　宏
縁台も露地も消え去る新神戸　久子
タコ焼きをしっかり抱いて露地抜ける

羽振りよい方へ傾く花の首　楓楽
セパードの羽振りに負けるうちのポチ　志華子
割り勘へ羽振りよいのが酔いつぶれ　柳伸
夢にまで大盤振舞する羽振り　柳宏子
シャンデリアの下で羽振りの総しぼり　雅文
頭から足までシャネルかためてる　東雲
フレッシュな愛がニコチン寄せつけず　千里
ニコチンの軽さを競うコマーシャル　とみを
ニコチンが少し入って冴えてくる　のぼる
ニコチンの毒知っているか十七歳　千梢
ぼちぼちと行きまひょ余生の白い地図　寿美
ぼちぼちと大阪弁は如才ない　萬的
頑張ってふたりぼちぼち生きてます　叡子
親ばなれぼちぼち自立考える　信治
老い支度ぼちぼち呆けが同居する　なぎさ

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

きっと咲く蕾だお金貸してやろ　直次
いい出会い蕾ふくらむ心地して　桂子
伸びる蕾芽のうちに摘む塾教育　吉太郎
深呼吸してから蕾ぱっと咲く　蛍柳
蕾でも予定通りの花見宴　まみ子
雪に耐え力を溜めている蕾　セツ子
枯れたかと見た枝先に蕾あり　禄骨
まだ蕾と言ったセリフが気にかかり　長一
未だ春の嵐を知らぬ蕾たち　黒兎
蕾たち梅だより聞き気を遣う　信男
南から桜前線まず蕾　幹治
寒空に蕾ふくらむ沈丁花　賢次

三歳児蕾の口でいけず言う　須美子
疑いの目にあどけない埴輪の目　敞子
オカリナは疑い知らぬ里の歌　ただし
お坊っちゃん疑い知らず損ばかり　正三郎
上出来に疑われても嬉しそう　雪子
疑った事を恥じ入る時もあり　契子
堂々とメカには弱く生き抜こう　保子
パソコンで句会を開く新世紀　昭子
オッハーと液晶でするご挨拶　祥風
ITは縁なき衆生将棋指す　よしろう
せっかちに世をITが変えていく　久子
ITって何かと訊けば皆黙る　見清
ITを負うた子供に教えられ　千里志
ITが使いこなせて二度の職　陽子
ご破算で願いましては新世紀　柳童
不思議です妻がお酌をしてくれた　正安

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

日向ぼこ安楽椅子は祖母の席　庸佑
ヤングから頼られている知恵袋　頂留子
着膨れて走る仔犬にせがまれて　文子
自転車の泥一生懸命走ってる　東雲
ゴム手袋同じ方だけ穴があき　三代子
何度見ても何も分らぬピカソの絵　のぼる
楽しみと欲で買っている福袋　晴夫
終章は少し荒れてる走り書き　萬的
弱い子に合せて走る縄電車　晋吾
お袋の味煮つまって午前二時　柳宏子
リストラ告知ハローワークに父走る　三重子
雑念を払う静かに墨をする　美弥子
生き残る椅子へ泣くひと笑う人　朝子
左遷地でゆっくり見てる雪景色　太郎
丸い背の恩師見つけた古書のまち　とみを
山高く男黙って座る椅子　英一
舞子はん匂い袋に秘めたひと　左代子
親と子が逆方向の道走る　千里
縄文杉を見て少年は大志抱く　猪太郎
雑念を握りつぶして炎を孕む　愛論
山頭火の思いは深し頭陀袋　湖風
走り去る秋を詩嚢が追いかける　度
私を醱酵させている走り　雅文

いずも川柳会　佐藤　治代報

飄々と生きて仲間のはしっこに　栄子
ほどほどで白黒つけぬ仲間内　まこと
ロボットが仲間はずれにされている　昭二
仲間かも知れぬ蹄の音がする　彬
寝返りを打った仲間に矢がささる　満江
びっくりのトンネルいくつ抜けたやら　久子
びっくり四十五愛妻孕んだと言う　蘭水
騒がせてごめんヒューズがとんだだけ　すみこ
ムツゴロウびっくりした目でとび跳ねる　茂美
すれ違いびっくり潮が満ちてくる　美江子
いま頃になってびっくり花が咲く　ひろし
もう爪は噛まぬと決めて殻を脱ぐ　安子
脱皮して白を黒だと言ってみる　サダエ
脱皮して過去は知らないことにする　ちかし
七変化名刺に脱皮の跡がある　圭詩朗
菜の花満開わたしも脱皮したくなる　寿美
下半身だけがスリップして困る　草丘
あざやかに私の影が脱皮する　芙佐子
未だ炎える残り火抱いて脱皮する　多賀子
スリップへ駐在さんの手も借りる　房子
前向いた足がスリップばかりする　きみえ
スリップの跡がわたしの道にある　多喜
スリップに負けまい一歩前へ出る　叮紅
水門を開けて下さい海苔の夢　陽子
温い手だ転んで拾う夢一つ　玲子
もう夢は見てはならない寒椿　文子
ふくらんだ夢にびっくりしてあげる　章峰
夢を追い面影も追い鳥になる　治代
嫌なこと皆夢にする部屋がある　昌枝
良い夢はいつも獏に食われてた　れいじ

横浜あおば川柳会　清水　潮華報

寒くても季節はや取り春を着る　街湖
衛星を通じ世界が語りあい　サト子
鮮やかに舞台で見せる七変化　広和
半日で諭吉が去った空財布　徳三
明暗を分けるテストの早とちり　絹子
物忘れだんだん早くなる不安　敏
バスツアーいつも遅れて乗車する　政勝
見なれない靴でゆうべを思い出す　句多留
こだわった秘伝の味に長い列　笑子
苛立ちは捨てて静かに爪を研ぐ　二郎
おふくろの味が人気の店はやる　道子
淋しげな友に義理チョコわけてやる　雅子

また流行る気がしてコート捨てられず　鈴美和可
正月のハワイタレント鉢合わせ　為佐子
行列ができた頃から味が落ち　裕峰
うつされた人ほど重い流行り風邪　三郎
見習いに職人の技盗ませる　純子
嫁ぐ日も近づき習う隠し味　かづ子
亡夫から習った通り子を叱り　嘉信
看板の字で書道塾客を呼ぶ　かず枝
子に習う事がだんだん増えてきた　良子
習いごと人生観を変えられる　亜希子
見習って欲しくないことばかり真似　早智
足踏んで詫びて覚えるダンス靴　ただお
カルチャーの挫折が怖い前払い　潮華
生前葬すませ夫婦の日向ぼこ　満秋
妃殿下は美人でないと務まらぬ

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

走攻守老いも頑張る草野球　たけし
足一歩出してるつもり後一歩　明子
生かされてこれからうんとがんばるぞ　敏
癌告知俺の生き様見せてやる　章司
頑張ってみても越せない父の影　志洋
つかむより逃がしてしもたあの機会　昭平
この時とばかりに愚痴の機関銃　桂子
機会みて彼の反応たしかめる　敦子
チャンスにはめっぽう強い妻といる　ダン吉
機会ある毎に所在の鈴を振る　獏沓
不況こそチャンスと励むど根性　一壺
二位に付け追い抜く機会じっと待つ　庸佑
翔ぶチャンス無くして羽が萎えてくる　泰子
チャンスには遠い窓辺の陽が温い　絢子
折角のチャンスに鼻緒ゆるすぎる　重人
絶好のチャンス眉毛が知っている　吐来
パートから妻の波乱が始まった　聡
札束で叩かれた頬荒れてゆき　専平
この嵐やんだらきっと春が来る　みつこ
やわ肌を荒らして逃げる空っ風　りつえ
荒れた手で苦労重ねて生きた亡母　さとみ
やりくりも荒れも知らない赤い爪　美代子
荒れるほど見応えがある北の海　かつみ
テーブルを叩いて孫のドレミファソ　美喜
一期一会テーブル囲み和むお茶　忠宏
テーブルを叩いてきたとホラをふく　洞庵
テーブルセンター替えて迎える新世紀　昇
卓袱台もテーブルとなり共白髪　久仁子
出発は親に叛いたリンゴ箱　一知

川柳クラブわたの花　吉村一風報

ほめられて輝き出した落ちこぼれ　剛治
浄土へのひとつ手前の駅にいる　ミツ子
夢かない孫も明るい新家庭　(二)道子
子の夢に枕をぬらすホームレス　君江
初日影生きてよかった風あらた　春子
夢買いに往ったまんまのはぐれ鳥　一風
駅までをおっとりがたなで母を抱く　幸枝
百病のもと百薬の長で斬る　隆盛
大文字炎ともえて夏が行く　美千子
立食いのうどんで済ます駅の朝　恭一
ついつられ買うてしもうた叩き売り　奈良司
新世紀らしく輝く皆の顔　友甫
同じへま同じ小言がついてくる　正純
震災を越して輝くルミナリエ　朝子
乗り越してローカル駅のながいこと　一道
輝いた日を偲びつつ散る枯葉　賢子
内定でやる気輝く子の瞳　ますみ
桃色のときめく頃の古日記　トシエ
振り向けば僕を見ている目に出合う　まさと
ライバルに首の差苦い水を呑む　いつふみ
食べ放題カニ殻山に笑顔です　春江
駅前でたこ焼き買って手で包む　知佐子
お留守番パッと輝くママの声　美代子
午前様夫の風邪が治らない　民子
初夢の画布いっぱいの宝船　明
梅の香に寒々とした駅和む　(増)道子
日記帳ぬすみ見て知る子の心　八寿子
バージンロード夢に見ている貸衣裳　宏至

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

お受験に狂い人生踏みはずす　弥生
彼女のママと初顔少し酔うている　一風
終点をやっとみつける答案紙　年人
面接日花がやたらと赤かった　千里
閻魔さま一番怖いテストする　修
試験官の立派な髭にまずビビリ　弘直
朝もやの刈田斜めに駈けて駅　春蘭
故郷の駅の匂いが変らない　のぼる
童心に戻り鐘つく小樽駅　柳伸

特急の止まらぬ駅の青い風　昌子
懐かしさ思わず下車の峠駅　宏子
風邪ひとつ引かぬ男の訃報聞く　祥一
彼女からじかに貰って風邪をひく　弘一
一番早く風邪ひきそうなキリンさん　度
豊かさになれて心の風邪をひき　ますみ
薬局のおばさんの咳とまらない　ダン吉
風邪ひきの学級閉鎖あと一人　晋吾
もうアカンおんなじ事を言う夫　ばっは
バレンタインおんなじチョコが二人から　太郎
ペアルック君が逃げたりしないよう　扶美代
円周ポクポク回転木馬眠くなる　信治
愕然と鏡見直す同い年　加津子
可能よりここ迄くれば意地と見栄　頂留子
大丈夫やればできると子に暗示　剛治
お前なら出来る案定乗せられる　柳宏子
可能性つぼみは春にかけている　宏
機密費に同じムジナが寄生する　柳弘
無限の可能性持った若さに賭けてみる　とみを
不可能を可能にさせる母の知恵　シマ子

川柳ねやがわ　江口度報

生かされた今日が満足望の月　高栄
欲抜けた顔がほころぶ結願寺　時弘
満足な顔が出てきた試着室　一風
満ち足りてひ弱な葦にしてしまう　茜
お年玉満足そうな孫を抱く　三郎
母さんが居るただそれだけで泣き止んだ　弘一
満足を絵にかいたよう妻眠る　忠央
良妻賢母何も言うことありません　仁清
気を揉んだが五体満足呱々の声　波留吉
百歳の笑顔満足してるよう　紫香
占いの通りにならぬ手をながめ　博泉
ご先祖を引張り出して占い師　かすみ
占いができてホステスよう流行る　三峰
占いの良いとこだけを信じとく　順三
占いの通りにしたらこの始末　利昭
占いに心の奥まで見抜かれる　亜也子
信じたい晩年よいという手相　洋
花弁で恋占いをする少女　日出子
抱いて下さいな占いは大吉　ルイ子
占いを信じて強気押してみる　庸佑
小説のモデルになってからの不和　勇太朗
ヒーローがときおり小説から抜けて　亜成
芸術というチャタレイをそっと読む　修
名作がお宮の松を世に残し　度
小説の魅力美人は謎のまま　雅文
小説家見て来たように嘘を書き　吉之助
続編がある私の冬物語　冬葉
マディソン郡の橋を渡って炎えようか　たず子
小説の中で私も生きている　とし子
めしの字が街から消えて芙美子の忌　良知

川柳塔おおとり　原みさを報

東京へ行くと二十一世紀が匂う　真一
形見分け亡母の匂いに手を通す　せつ子
騙し絵の中からシャネル5が匂う　雄々
歯みがきのかすかに匂う朝のバス　伝住
寄り添うて座ればバラの香が匂う　艶子
幸せがいっぱい匂う窓明かり　庸二
古里の匂い栃餅よもぎ餅　彰雄
本棚に亡父の匂いの古日記　野草
春匂う重いコートよさようなら　和子
ウインドに一足早い春匂う　登美
政治家の疑惑新聞記事匂う　小生
リストラが身近に匂う窓の際　一弘
菜の花の匂うお店で春の夢　道子
犯罪の匂い刑事の目が光る　千秋
ストーブにおでんの匂いつつまれる　仁子
水仙のほのかな匂い春を告げ　冨貴子
ありがとう一日一度言って寝る　孝子
窓際で三時のお茶を苦く飲む　由多香
午前五時母の日課が動き出す　紀子
スナックにキープしている出勤簿　雅通
ご馳走のつけが日課の医者通い　黙光
朝ドラで今日の日課が始まった　敦子
手を合せ亡夫に語る今日の事　清子
朝仕事愛菜園をひと回り　義弘
夫婦別姓低い垣根があるような　風花
おしどりの夫婦も違う夢をみる　宏章
夫婦箸嘘と誠が同居する　舎人
四十年中古品です夫婦です　邦昭
古びても捻子巻き合っている夫婦　幸次郎
夫婦というもろい絆にしがみつく　みさを

富柳会　池森子報

風花に乗って来ましたラブレター　春蘭

過去などは消し白無垢を着て嫁ぐ　満秋
罪を抱くいのちを晒す雪の白　信子
でことでこ母のやさしい体温計　宏
生き甲斐の何のと妙に熱を上げ　みきを
ふる里の風が漂白してくれる　ひろこ
熱燗にほろり昔がこぼれ出る　冬虹
ミレニアム足場の釘を打ち直す　萩乃
ITまで年齢格差を拡げ行く　一夫
情熱を使い果して好々爺　誠
純白の娘の晴れ姿感無量　勇
泥水を飲んだ男の熱い貌　紅紫朗
五歳児とグーチョキパーをする平和　昭水
カクテルの甘さ不覚の夜が白み　義清
猫舌の上司へ熱い茶を煎れる　亮幹
孫誕生真っ白い命抱きしめる　夕子
いい人に囲まれているおもちゃ箱　扶美代
揺すっても揺すっても白くなる記憶　アキ
白からピンクへと生き方を変える　登子
平和への熱き思いをいつも持つ　深雪
平熱になって安堵の缶ビール　けい子
ワイシャツを洗って干して詫びている　和子
点灯を待って熱気のルミナリエ　文子
熱こもる話の結論金を貸せ　たかし
過去すべて消してしまったボタン雪　花梢
人間を一枚脱いだ日の鱗　欣之
まっ白い恋を画布の隅に置く　森子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

牧水の旅情にふれる飛驒の宿　萬的
九人の御霊の宿かえひめ丸　高栄
駅弁を抱えて午後の汽車に乗る　紫香
三十六計午後から私出かけます　求芽
あさっての午後は不倫にあけてある　しげお
一日の真ん中だろう午後三時　正坊
定退にジョークも入れてご挨拶　慶子
進むより退いた勇気を褒められる　靖巳
引退を引止め役が居てくれず　柳宏子
さっぱりと退く花道を視野に入れ　庸佑
流行も流れる如く消えて行く　絹子
流行ってる訳を訊いても判らない　見清
薬づけ流行らぬ医者の処方箋　正三郎
流行に親子二代が無頓着　知香子
拝まれたとこから肩が凝りはじめ　ただし
過去はもう変えられないがある未来　(玉)英子
車椅子疵の深さを語り合う　つえ子
黙っとくこれも立派な返事です　博子
雛まつり女系が誇る段飾り　〆女
泣く孫にママに隠れてチョコをあげる　(新)英子
まっすぐな眼だから許すプロポーズ　周信
羽ばたいてみたが所詮は籠の中　喜美子
起き抜けの素足に春の肌ざわり　諷云児
妻の座の重さ鰤大根が煮え　重人
おかげ様で今日も日が出て目が覚める　寿美子

翠洋会　穴吹　尚士報

常連もママと一緒に老けていき　義
忙しい言いつつ本屋はしごする　みつ子
男まえすっかり頭軽くなり　東雲
忌を重ねすっかり慣れた独りぼち　志華子
家の中すっかり変えて落ちつけず　日の出
独り身にすっかりなれて人嫌い　蛙
一言で夫婦喧嘩も仲なおり　会美
譲られて一言会釈して座る　春
ずっしりとその一言がこたえます　叡子
一言が世界情勢変えました　舞夢
一言と断りマイク放さない　尚士
左手に一言不平言う右手　喜美子
手料理へ一言欲しい褒め言葉　周信
一言で座を盛りあげる名幹事　靖巳
絵の具溶く長い電話で気が変わり　照子
伸びすぎた天狗の鼻で掘る墓穴　宣司
ぬれ落葉ひらひら飛んだ日もあった　蕉子
ライトアップ吐息忘れる厳島　絹子
戸籍上まだ妻ですと言う家族　恭昌
うつの日は相田みつをを読んでみる　千梢
青テント畳み再起のズック靴　久峰
カップルの隣まぶしい独り者　千枝子
憎めない顔で言い度いことを言う　澄子
おばさんに道聞きよけい迷いだし　さと美
うぐいすの初音へ弾む旅プラン　富子
間違わず薬飲むのもひと仕事　伽羅
歳時記のとおりに祖母の庭手入れ　正雄
疑えば雪の白さも明日の命も　希久子
天寿全うし明治の男逝く　正坊

川柳ふうもん　杉本　孝男報

官邸に訳の分からぬ金がある　洋々

捨てて来た都に雪が降っている　小鹿彰夫
二合ではまだエンジンがかからない　鬼桜忠良
死は迫るたとえど忘れしていても　蟹郎節子
どど忘れが進む夫婦の喜劇です　裕子美恵子
エンジンはボロだが素直まだ使う　はつ江すなお
ど忘れは脳の休日かも知れぬ　一瑶
十七歳病むエンジンが突っ走る　一京益子
三代目土の温もりなど知らぬ　春名昌鼓
どど忘れを年のせいだと言う愚か　雅女茂登子
あやこいがリハビリ中だ手を貸すな　鐘旭健一
脳天のプロペラまわし逢いに行く　喬水圭一郎
まだ欲がありエンジンも快調だ　孝男金祥
縄のれん明日のエンジン貯めに行く　由美子美雪
エンジンをかけては見たがまだ迷う　康博毅
どど忘れをして聖人も人となり　三津子はるみ

川柳藤井寺　高田美代子報

初々しい顔してはるが孫がいる　志洋
初詣で神も戸惑う頼み事　恒雄
初鏡母そっくりな顔に会う　桂子
おーい酒と妻呼んだのが初夢だ　正一
初節句京菓子と行くのし袋　マサ子
初夢は夢二の猫に噛みつかれ　瑠美子
転居した旨も告げてる初便り　半蔵門
初電話母の達者な国なまり　春蘭
私だって最初は白い花でした　和樹
筆おろしは旧家に頼む奉賀帳　シマ子
初孫は両家の愛に溺れそう　婦美枝
初詣で一年分の手を合わす　喜代子
ささやかな誇り初版の蔵書印　重人
人間になって初心に返る朝　鐘造
まっ白なままで貴方と会えてたら　一筒
積立てがやっと間に合う初節句　千里
カルタとり負けたと孫の初涙　昌子
ほどのよい中吉でした初みくじ　葉
初暦大安探す古希の宴　りつえ
白紙に墨をのせ一気に宙へ走る　定男
初春や嫁に出す娘と掘り炬燵　一知
初恋の人に出会った鳥居前　利武
初舞台喉にセリフを詰めている　修六
初恋をいくつも抱いている椿　扶美代
迷うだけ迷うて初心へと帰る　森子
初孫はアンヨは上手初歩き　敏
初夢を食べに来たのは痩せた獏　大八

番傘川柳本社四月句会（女性部企画）

日時　4月9日（月）18時　締切18時50分
会場　三井アーバンホテル　**会費**千円
宿題　「交代」杉森節子選「溢れる」廣嶋英子選
「仮」山本希久子選「相手」梶原サナエ選
「吸う」森中恵美子選　他席題一題各二句

ピアノ乱調初日の舞台から嵐　元紀
初めての恋文で折る紙の鶴　美子
初釜へほめて貰いにゆく着物　しげお

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

サングラス悪に傾きやすくなる　日枝子
鶴の声聞きもらすまい耳を立て　八重子
バレンタインチョコは確かに撒いてある　ふみ
のせすぎて棚の呼吸が聞こえない　玲子
不可解なもの太古から神になり　天雀
もどり雪別れた人に逢いとなる　やえ
首はねた戦国時代より寒い　繭
本命のチョコをとうとう上げずじまい　千代
明るい灯遠くに見える冬の旅　春枝
年毎に心の月が丸くなる　なみ
梅咲いて春の絆をうたがわず　晶子
地震からこっち鉢巻きとれぬ土蔵　寿々子
茶の間には良くも悪くも夫婦だけ　初枝
梯子のぼると肩でトンボが友だちに　瑞枝
大波小波ぬけたら三つ若返る　てい子
道端会議まだ延々と冬帽子　すみえ
春光に明るい朝が日毎増す　恵子

豊中川柳教室

とき 五月～九月（毎月第四月曜日）
（5月28日・6月25日・7月23日
8月27日・9月24日＝5回）
時刻 午後二時―四時
ところ 豊中市立中央公民館
（阪急宝塚線曽根駅南東歩5分）
講師 橘高 薫風氏
会費 三千円（五回通し）
内容 川柳のこころから作り方まで
申込先 豊中市島江町一―三―五―八〇一
田中正坊方 **もくせい川柳会**

大阪川柳人クラブ第2回吟行

日時 **5月24日**（木）
行き先 天の橋立
集合 8時20分JR大阪駅前ヒルトンホテル
出発8時30分→傘松公園→神風楼
にて昼食後句会→海産物ショッピ
ング→大阪駅前着19時予定
宿題 「覗く」「吟行雑感」（各題2句）
参加費 7000円
申込先 坂本 晴美（06―6384―2466）
川島諷云児（0726―96―2765）
締切 **4月7日**（土）まで先着順

第32回 北日本川柳大会

日時 **平成13年5月6日**（日） 午前10時
場所 富山県民会館701号室
富山市新総曲輪4―18
兼題（各題2句）
「濁る」「前途」「異臭」「珍事」「根」
「毛並み」「妙手」「架空」「ガッツ」
選者 柳瀬あき緒・舟渡杏花・仲俣新一
谷口 弘・結城健治・沼田耕作
吉田秀哉・酒井路也・脇坂正夢
締切 午前11時
賞 ▽北日本新聞社長賞（最優秀句）
▽川柳えんぴつ社会長賞（優秀句賞）
▽富山県知事賞 ▽富山県議会議長賞
▽富山市長賞 ▽富山市議会議長賞
▽投句者賞 ▽各題秀句賞
（総合10位まで入賞）
会費 2000円
投句 投句料1000円（切手可）
4月28日締切
投句先 〒930-0362 富山県中新川郡上市町稗田6
柳瀬あき緒方北日本川柳大会係
主催 北日本新聞社
川柳えんぴつ社

第5回 川柳展望全国大会

日時 **8月5日**（日）10時30分開場
場所 マリエ・ド・クール空港（旧玉姫殿）
池田市空港1―12―8
阪急「蛍池」から歩10分送迎バス有
参加費 2000円
題と選者 席題あり（選者交渉中）
「裏切り」和泉 香・「棒」高瀬雲石
「置く」草地豊子・「穴」大西順子
「傷」番野多賀子
自由吟＝原井典子・新家完司・
佐藤岳俊・なかはられいこ・
金築雨学・天根夢草
各題2句 出句締切12時
自由吟は各選者に違う句を出して
下さい。
賞 各選者秀吟2句呈賞
質疑応答〈パネラー〉
鈴木公弘・なかはられいこ・
永井玲子・佐藤岳俊・金築雨学・
新家完司
大会終了後懇親パーティーあり
主催 川柳展望社
事務局 〒563-0102 大阪府豊能郡豊能町ときわ台
3―4―17 天根夢草
TEL・0727―38―1845

柳界展望

★川柳人協会三大行事の一つである花久忌は**2月11日**東京都足立区東岳寺で開催された。当日選者を務めた理事菱田満秋氏は、宿題二題の天位を獲得した。

「便り」　加茂　如水選

留学の子から元気な一通話

「呑気」　荻原　柳絮選

明日吹く風楽しみにして眠り

★第20回横浜川柳作家賞、自由吟の部第一位を本社同人の播本充子さんが獲得した。4月29日、かながわ県民センターで表彰される。

花手桶乾いて暴露本が売れ　ほか

★第23回阪神文芸祭入賞者が**2月24日**、プレラにしのみやで表彰された。122名の投句者のうち本社関係者は次のとおり。

〈兵庫県阪神県民局長賞〉

幸せな頃を思えば父がいる　久保田千代

秀作は三宅保州、黒田能子、小池しげを氏。

★大阪川柳人クラブの平成13年度総会が、**2月17日**ホテルドゥで行われた。本社関係の新役員は、参与に西田柳宏子氏、幹事長に川島諷云児氏。

■『川柳オホーツク』三月号に、木本朱夏さんが「寺尾俊平先生覚え書き」を執筆した。

▽御芳志御礼△

■故金井文秋氏（1月19日逝去）の御遺族から、供養として金一封を拝受。

▽人事往来△

■橘高薫風名誉主幹は**2月10日**、日川協東西合同常任幹事会出席のため、東京都台東区の龍宝寺川柳会館行。当日は小林由多香参与も出席。

2月25日、第50回西大寺会陽川柳大会第2部選者として、岡山県西大寺行。

▼訃　報▲

■乾隆風氏（同人・鳥取県）は3月4日急逝。享年80歳。3月6日自宅に於て葬儀が行われ、柳友多数がお見送りした。

★西原柳雨川柳句碑建立浄財募金

久留米市三本松公園に、

新同人紹介

安達忠央
―薫風・たもつ推薦

古今堂蕉子
―薫風・たもつ推薦

和田つづや
―薫風・天笑・月子・泰子推薦

中崎深雪
―天笑・月子・泰子推薦

松下比ろ志
―薫風・紫香・武庫坊・澄子推薦

澤田和重
―太茂津・天笑・緑良推薦

三大古川柳研究家の一人である、西原柳雨の句碑「覆水を盆へ小さな手で返し」の建立計画が立てられた。建立委員長・堤日出緒　協賛者・仲川たけし（日川協会長）　吉岡龍城（日川協理事長）ほか

募金　個人一口千円　文芸結社一口三千円　法人・団体一口一万円　以上何口でも可　目標三百万円

送付先　郵便振替口座〇一七三〇―七―八一〇六四　西原柳雨句碑建立委員会

締切6月中　除幕7月予定

連絡先　TEL 0942-32-7487　久留米連合文化会

橘高薫風氏が、名誉主幹就任の挨拶に美濃加茂市の東野大八氏宅を訪問、「川柳の群像」等 執筆の労と、川柳塔社ご支援の感謝のお礼を述べた。

平成12年11月22日撮影

▼訂正とお詫び▲

■**2月号**―P14（川柳塔）下段3行目「一夜漬にされて緑が濃いくなる」を本人申し出により削除。　P128下段（梨花吟行）兼題「鳴・る・」を「彩」に変更。

■**3月号**―P1（巻頭言）中段20行目栃和・歌→栃乃和歌。栃乃和歌のあとへ**三杉里**を入れる。　P96（初歩教室）下段21行目○頑・なに・十七・歳・の厚・い・壁→**頑なに壁を味方に閉じ籠る。**

大阪造幣局
桜の通り抜け川柳募集

投句期間　通り抜け期間中

入選句　天地人（各1句）秀逸（5句）佳作（25句）

選者　未定（川柳関係者）

投句箱は主催者のテントの一ヵ所に設置、用紙等は完備。ふるって応募してください。

5月中に造幣局から句集発行。13年度通り抜けの桜の木の短冊は平成8、9年入選句とし、13年入選句は来年吊す。

丹後屋　肇
―薫風・靖巳・淳推薦

村上　玄也
―薫風・天笑・月子推薦

矢倉　五月
―薫風・天笑・月子推薦

西内　朋月
―薫風・天笑・月子・泰子推薦

中川　楓
―薫風・天笑・月子・泰子推薦

小西　小雪
―天笑・月子・泰子推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日)正午から 植える・候補・ぼちぼち・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 弱虫・馬鹿・やれやれ・自由吟	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 手入れ・求める・数字・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)正午から すこし・蹴る・ショック あいにく・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
城北 川柳会	21日(土)　**吟行**（松花堂） 折る・新鮮・ハッピー・自由吟	**問い合せ先** 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
川柳会 梨花	21日(土)午前10時から 川柳会 梨花　吟行	**鳥取県民文化会館2F（4月号 P.85参照）**
岸和田 川柳会	21日(土)正午から 救う・世間・添える・退屈	**五風荘　岸和田城南東横** 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
はびきの 市民 川柳会	22日(日)午後1時から ぼんやり・気配・口実 「メニュー」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)　**吟行**（用瀬町） 裏腹・スパイ・よろしく	**問い合せ先** 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
京都 塔の会	23日(月)午後1時から 帯・……ながら・一旦	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から 散歩・畑・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪 川柳会	25日(水)午後6時から タフ・連想・相続・つづき	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から 砂・直線・あだ名	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から 忘れる・小言・リーダー・幻	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 唐津支部	1日(日)午後1時半から ゲーム・線・それから	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13　仁部四郎
川柳塔 な　ら	5日(木)午後1時から 新任・塩・戻る	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼　崎 いくしま	6日(金)午後1時から 先生・緑・雑詠(A·B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
富柳会	7日(土)午後1時から ポケット・マシュマロ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉　吉 川柳会	7日(土)午後1時から カラス・ねじれ・作る	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 みちのく	7日(土)午後4時から 決断・嬉しい・燃える	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5　波多野五楽庵
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から 胡椒·差し入れ·下敷き·卯の花	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 棒・内緒・きらり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から 祝・学校・別れ	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5　田辺正三郎
尼　崎 尾　浜 川柳会	10日(火)午後1時半から さくら・火種・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太
八尾市民 川柳会	10日(火)午後6時から 庭・子供・絵手紙・望む	八尾市文化会館4F　近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15　宮崎シマ子
堺川柳会	12日(木)午後1時から 伸びる・医者・つよい	堺市総合福祉会館　3Fラウンジ 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3　河内天笑
川柳塔 打　吹	14日(土)午後1時から どっこい・軒・徒花(あだばな)	倉吉市上灘町　上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21　野口節子
川柳塔 ま つ え	14日(土)午後1時半から 桜・脳・高い	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381　竹内すみこ

編集後記

☆西尾栞七回忌川柳大会申込、事前投句締切が目前になった。同人・誌友にかかわらず、一人でも多くの方の参加をお待ちしています。☆栞元名誉主幹のご子息、舜介氏がオーナーである、会場の八尾グランドホテルは、「物部守屋の秘湯」「弓削道鏡の隠し湯」「楠木正成思考の湯」と伝えられる天然温泉が湧いている。あらゆる病気に効能があり、美肌になれる他に頭がよくなり、考えがまとまる温泉と言われている。まさに川柳人にうってつけである。☆希望者には当日入湯券がいただけ、夜遅くまで利用できるとのこと。また、中の劇場では催し物もあるので、行事終了後連休の一日をゆっくり楽しんでもらえると思う。

△毎年恒例の「赤ちゃんの名前の調査（H12年度分）」が発表された。男の子は①翔、②翔太、③大輝、④優斗、拓海。女の子は①さくら、②優花、③美咲、菜月、⑤七海、葵とのこと。個人保険加入者八千人余りが対象だそうだ。我々世代からすると、まるでスターの名のように思われぬでもないが、何れの時代にも親の夢や希望が、一杯詰っていることに変りはない。

△最近の川柳人は本名で作句する人の方が多いようだ。私が始めたS54年頃も、すでにその傾向だったが、たまたま同名が数人重なったので、希望を言ってプロに雅号をつけてもらった。〝風ニ揺レル情緒ヲ文ニテ楽シム人〟の意なのだそうだが目下身辺多忙で憧れた風雅の域には遠い。（ふ）

ひとこと

「火だるま」

昨年末に同人の末席に加えて頂き、一月の本社句会に出席した。

当日の初出席者には天笑主幹から色紙のプレゼントがあり、私は

火だるまになろうとも
　　橋渡るべし

の色紙を頂いた。

川柳という彼岸に架かった橋の袂に佇んだばかりの私には、まだ「火だるま」になっても橋を渡り切ろうという程の固い決意は出来ていない。

しかし、頂いた色紙を毎日見上げていると、耳の奥の方で、「橋渡るべし…橋渡るべし…」と誰かが囁いているようにも思える。

時間はかかるだろうが、いつか遠い日に橋を渡り切れるように、日々心の火に焚き木を絶やさないように努めたい。

（穴吹（あなふき）　尚士（ひさし））

◇とりたてて花見に行くこともないが、シーズン中は普段の暮しの中で、たくさんの桜を見ることができる。近くの公園、電車の窓越し、或いは居ながらにお向かいの庭、そして地方の句会の折、旅先で出会う桜等々。

◇春と言えば桜と連想するほど、普遍的でなじみ深い花である。

◇私の目に映る桜は、同じ桜でありながら、ある年は淋しげに、またある年はやさしくほほ笑みかけてくれるように思う。子供が入学、入社した年の桜は、明るくピンクに輝いてみえた。父を見送った年の桜は、心なしか、薄色にひっそり咲いているかに感じられた。

◇十数年前、私は森の宮にある病院の窓から、手術後の身体を養いながら、丁度満開の桜を眼下に見ていた。少し遠くに目をやると大阪城の桜が、ピンクの帯のように見える。あたりが薄闇に包まれる頃の桜は、ことに妖しくも美しい。その年の桜には、無聊の時間を慰められ、励まされ、そして短い季節を完全燃焼する花に教えられもした。

◇桜にまつわる思い出は不思議に色褪せず、心に残り、その年々の感慨がある。

年年歳歳花相似たり
歳歳年年人同じからず（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**6月号**）　地名　　姓・雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人　・　**誌友**　マルで囲んでください。

きりとりせん

本社4月句会

とき　4月7日（土）午後5時半
ところ　アウィーナ大阪　4階
天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題「カタログ」　坊農柳弘選
「なぜ」　吉川寿美選
「地図」　高須賀金太選
「惑う」　米田恭昌選
「見事」　河内天笑選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円

本社5月句会　5月5日（土）
西尾　栞　7回忌川柳大会
表紙裏をご参照ください。

作品募集

6月号発表（4月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　板尾岳人選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　西出楓楽選
「ゲーム」　吉村一風選
「線」　小谷美ッ千選
「それから」　宮崎ヒサ子選

課題吟（3句）
初歩教室「さらり」（3句）　吐田公一担当

7月号
課題吟「薄い」「トラブル」「倒れる」
初歩教室「ノー」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第11回「おおきに」　森中恵美子選
ハガキに3句　4月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　六百円（送料84円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
二〇〇一年（平成十三年）四月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六）六六一－六九一四番
振替　〇〇九八〇－五－三三六八番

第25回　全日本川柳2001年新潟川柳大会のご案内

日時／平成十三年六月十日（日）午前十時～
会場／りゅーとぴあ（新潟市民芸術文化会館）
〒951-8132 新潟市一番堀通三―一
TEL ○二五（二二二四）五六一一㈹
交通機関（別紙交通案内図参照）
JR新潟駅から車で八分
JR新潟駅前から市内バスで新潟市役所前下車
徒歩七分・白山公園前下車徒歩三分程度
宿題・第一部（事前投句・四月十五日締切）
「大きい」　千葉　津田　湿選
「澄む」　長野　石田　一郎選
「跳ねる」　広島　石原　伯峯選
「チューリップ」　新潟　山倉　洋子選
3・5×18㎝の句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒に住所・氏名明記、投句料一、〇〇〇円（定額小為替現金書留）同封して左記宛郵送のこと。
投句先
〒950-0004 大阪市北区天神橋二丁目北一―十一
ステップイン南森町七〇一
㈳全日本川柳協会大会係　宛
TEL ○六（六三五一）二二一一〇
FAX ○六（六三五一）二四三三
郵便振替口座　〇〇九七〇―九―二五七五
宿題・第二部（当日投句・十一時～二十分締切）
「ニューリーダー」　北海道　辻　晩穂選
「柳」　兵庫　泉　比呂史選
「一歩」　九州　外山あきら選
各題二句・当日配布の句箋に記入。
第二次選者
仲川たけし・吉岡龍城・今川乱魚・礒野いさむ・大野風柳・橘高薫風・藤沢岳豊
会費／四、〇〇〇円（SL弁当・お土産呈）
表彰／①文部大臣奨励賞　②参議院議長賞　③川柳大賞　④大会賞
※当日、21世紀に向けての『川柳サミット』を開催いたしますのでご期待ください。
前夜祭・宿泊・観光ご案内
前夜祭　平成十三年六月九日（土）午後六時～
会場　新潟グランドホテル
〒951-8052 新潟市下大川前通三―二三三〇
TEL ○二五（二二八）六一一一㈹
会費　八、〇〇〇円（新潟食の陣・酒の陣）
■宿泊
新潟グランドホテル・万代シルバーホテル・新潟東急イン・新潟東映ホテル・イタリア軒
宿泊費　いずれもシングル（ご夫婦はツインを用意）一人七、五〇〇円（一泊朝食付）但し税別
宿泊ホテルについては事務局で決めさせていただき事前にパンフレットを送りお知らせ申します。
■観光
①コース／平成十三年六月九日(土)十四時～十七時
●新潟市内観光バス・費用　三、〇〇〇円
②コース／平成十三年六月十一日(月)九時～十六時三十分（新潟駅着）
●豪農の館と阿賀野川ライン舟下り
費用　八、〇〇〇円
③コース／平成十三年六月十一日(月)～十二日(火)
●佐渡観光周遊コース一泊二日（新潟駅着十六時）・費用　二三、五〇〇円
右の前夜祭、宿泊、観光の申込み締切は四月十五日必着です。
別紙申込み書に内容記入のうえ、合計金額を郵便振替口座へご入金ください。
※申込み先（お問い合わせ先）
〒951-8133 新潟市旭町通り二―七三九―一六
白勢朔太郎　方
日川協新潟大会事務局　宛
TEL・FAX　〇二五（二二八）八八七五
※送金先
郵便振替口座　〇〇五〇〇―一―六八二六九
㈳全日本川柳協会大会委員長　礒野　いさむ
全日本川柳新潟大会実行委員会
大会実行委員長　大野　風柳
〒951-8003 新潟県新津市美幸町三―四―六
TEL　〇二五〇（二二二）二五一七
FAX　〇二五〇（二二三）二四七〇

□新刊
寺尾俊平句集
A5判　上製本／3000円（送料共）
寺尾俊平句文集　獅子の懐
A5判　288頁／2800円（送料共）
発行所　新葉館出版
大阪市東成区玉津一―九―一六―四F
TEL　〇六―四二五九―三七七七